
剣と魔法と不良少女

カルマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣と魔法と不良少女

【Nコード】

N8221K

【作者名】

カルマ

【あらすじ】

世界に存在する種族たちは魔物の脅威にさらされながら生きていた。そして、現在では四つの種族しか生き残っていなかった。その四つの種族は協力し、魔物を討伐する手段・剣と魔法を創った。王都エリゴールのユートピア学園に通う少女クロは絶滅した種族の唯一の生き残りだった。剣も魔法も使うことのできないクロが世界にとっても学園にとっても大切な存在へと成長していく

第一の魔法「この少女問題アリ」

世界には果てというものが存在しなかった。幾多の冒険家が挑み、敗れた大地ヴェスパル。この大地では様々な種族が共存している。しかし、その種族にとって脅威となっているもの。

それが「魔物の存在」だった。魔物により滅んだ種族も多い。しかし、魔物の存在に怯える訳にはいかなかった。種族は協力し、魔物を倒す術を見出した。

剣と魔法。これが種族たちの見出した術だった。そして、今でも魔物と種族の交戦は続いていた。

王都エリゴール。ヴェスパルの中心に位置し、全種族の交流が盛んな都市である

エリゴールには魔物を討つために創設されたシュルヴィーヴルという軍の本拠地が存在している。そのため、この都市には剣を使う騎士と魔法を使う魔術師を育てる学園が存在している。学園の名はユートピア。生徒はシュルヴィーヴルに入隊するため日夜訓練をしている。

この日もいつも通り、ユートピアの魔術師クラスでは授業が行われていた。教卓の前で熱心に話している教師は書き終えた黒板の字を消し、何人かの生徒を前に呼び出した。

「ヴェスパルでは、魔物により繁栄が途絶えた種族が数多くあります。今、魔物を倒すために協力している種族は四つの種族しかいません。ですが、この四つの種族は誇りを持って魔物を倒そうとしています。では順に説明していきましょうか。まずはローザ。彼女はポルポール族と言う種族です」

そう言われ紹介されたローザという少女は教師の腰よりも小さかった。

「ポルポル族はとつても小柄な体が特徴的です。小柄な体ですが現存している種族の中で一番古い歴史を持つ種族です。続いてエルフ族であるサフィラを紹介します。エルフ族は種族の中でも最も繁栄した種族です。森を護り、争いを嫌った種族ですが、自らを護るために協力の道を選びました。ポルポル族とエルフ族の二つの種族が共に協力したことにより魔法は誕生したと言われています」

サフィラは金色の髪を腰まで伸ばしており、それを靡かせるだけで男子生徒からはため息がこぼれる。耳は横に尖っていて瞳の色も青色。その綺麗な顔立ちから男子生徒の人気も高い

「続いて紹介するのはトラゴスのようなカノン族です。カノン族は種族の中でも珍しい半獣半人の種族です」

紹介されたトラゴスの耳は頭部近くに位置し、毛が生えている。口元からは鋭い牙、そして尻尾も生えている。トラゴスは狼との半獣である。

「最後に紹介するのはプレミア族のレクスです。プレミア族は現存する種族の中でも最も優れている種族です。シュルヴィーヴルの指揮官や将校のほとんどがプレミア族で構成されているのもご存知の通りでしょう。その類稀なる知能と高い身体能力。更には統率力も素晴らしく、何処を見ても非の打ち所の無い種族と言っても良いでしょう。」

「先生、そんなに言わなくてもいいでしょう」

そのように言われ、照れたように話すレクス。

「いやいや。事実、キミはこの魔法学科でどの分野でも学年トップの実力だし、謙遜することは無いよ」

その言葉の後、クラスの生徒全員は拍手を始めた。クラスの代表を務めるレクスは頼れるリーダーだった。それにプレミア族ということでは他の種族を卑下することも無く、完璧な生徒だった。

「さてと、これで一応種族の紹介は終わったことだし、授業を・・・」

「先生、まだクロの紹介が終わっていませんよ」

授業を終えようとした教師に女子生徒は窓際で寝ている生徒を指差し、言った。

「ああ。そうだったね、じゃあクロ。前に来てくれるかい？」

教師は、ばつが悪そうにクロという生徒に呼びかけた。しかし、呼びかけを無視しているのか、聞こえていないのか、クロは一向に置きようとはしない。

「おい、クロ。聞こえているかい？君が来なきゃ授業は終わらないよ」

その言葉を聞いて、クロの横にいた生徒は机を揺らし強引にクロを起こす。

「おい、起きろよ。早く休みたいんだよ」

机を揺らされたことで体を起こした。クロと呼ばれる生徒は女子生徒だが、男子生徒の服を着ており、丈も膝近くまで伸ばしている。目深に被った帽子から覗かせる鋭くきつい目は横の男子生徒を見ている。

その目に怯え、慌てて体を逸らす男子生徒。ゆっくりと教卓の前まで歩いていく。教師は一つ咳払いをし、気を取り直して説明を始める。

「彼女の種族はヒュム族と言って、すでに滅んでしまった種族です。クロはその唯一の生き残りらしく、滅亡の原因は詳しく解っていませんが、恐らくは種族間での争いが原因と言われています。とても優秀な種族でしたが、非常に愚かな行為だと私は思っております」

その言葉の後、クロは後ろの黒板を思い切り殴る。真ん中に亀裂が入り始めると徐々に広がり地響きを立てながら崩れ落ちる。

「私の悪口は何を言っても構わないけど、種族の、他の皆の事を悪く言ってるじゃねえよ」

教師は腰が抜けたらしく、足を引きずりながらクロから離れようとする。

この世界でたった一人しかない種族の女の子、クロ。彼女を中心にこの物語は始まる。

第二の魔法「不良少女の友達」

ユートピア学園の職員室に叫び声が響き渡る。クロは騒ぎを聞きつけた他の教師によって職員室へと連れられた。

「まったく！お前はどれだけ備品を壊せば気が済むんだ！」

「別に、壊そうと思って壊したんじゃない。もろいんだよ」

「そっという問題じゃないだろ！」

口うるさく説教しているのは魔法学科一年主任のアスワド。巨体とそれに似合った野太い声は生徒を圧迫するのに充分だった。しかし、クロは平然としている。これで十回目。すでに聞き飽きたほど説教されている。

「まったく、お前に説教するのも飽きてきたわ。何度言っても聞く耳持たないしな」

「よくわかってるじゃん。じゃあ、そういうことで」

「あ、クロ。ちょっと待て」

帰ろうとしたクロを呼び止めるアスワド。

「何だよ？まだ何かあるの？」

「いや、そのな・・・」

「何もないなら帰るぞ。じゃあな」

立ち上がり、止めようとするがすでに職員室の外に出てしまった。

職員室から出ると自分と同じように教卓の前に立っていたローザ・サフィラ・トラゴスの三人が待っていた。

「またアスワドのおっさんに怒られたのか？学習しないな」

いつも通り皮肉を叩いてくるトラゴス。

「大丈夫だった？なにか変なこととかされなかった？」

必要以上に心配するのはローザだった。全寮制のユートピアでローザとはルームメイトであり、この学園で最初に出来た友達だ。とにかく心配性でいつも私のことを気にかけている。ちょっと度が過ぎている面もあるけど。

「そんなことどうでもいいからさっさとご飯食べに行きましょう。コイツのせいで大好きなローストチキンが食べられなくなったらどうするのよ」

サフィラに至っては私のことよりも自分のことで頭が一杯になっている。大好物の肉を早く食べたいのだろう。

「じゃあ、一人で先行っていたらよかったじゃん」

「おバカ！そんなことしたら友達一人もいないみたいじゃない」

「てかよ、昼からローストチキンで、女子とは思えないな」

間髪いれずに今度はサフィラに皮肉を言うトラゴス。トラゴスはとにかく人をおちよくるのが好きだ。

「うるさい！肉が好きなのよ！肉が」

「あゝあ。そんな姿見られたらファンが減るぞ」

「ほんとに一々うるさいわね。粉々に切り刻んでやろうかしら」

さらりと怖い台詞を吐くサフィラ。おしとやかなイメージがあり学年でも人気の高いサフィラだけど、その実態はかなり凶暴な性格の持ち主だ。エルフ族ということで助けられている面もある。実際に私とローザ・トラゴス以外はサフィラの本性を知る人はあまりいない。

サフィラとトラゴスのやり取りを見ながら私はローザと手を繋いで後ろを歩いていく。

第三の魔法「学科一の劣等生」

職員室ではアスワドが机で次の授業の準備をしている。後ろからアスワドに近づく一人の教師。名前をフィリップという。魔法学科と対になる騎士学科の一年主任。

「アスワド先生。少しいいですか？」

「何ですか？」

「前々から話している合同実技訓練の実演なのですがね」

「そのことですか、もう候補は決まっていますか？」

二人の話は二日後に行われる魔法・騎士両学科の生徒が合同で授業をする合同実技訓練の最後の演習である実演に出す生徒を決める話であった。アスワドは当然、レクスをと決めていた。

「いえいえ、そちらの代表がクロということで決定しましたので」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。何で勝手に決めているんだ」

前回の話し合いでは代表候補を次までに決めるというものだったが、しかし、フィリップは話など関係なかったかのようにクロを代表にした。

「そう言われましてもこちらの代表も三年の主任が決めてしまいましたので。異論があれば直接、そちらの三年の主任に話して下さい」

言い終わるとフィリップは自分の机へと戻っていった。やり場の無い怒りを込め、机を叩くアスワド。合同実技訓練に選ばれたクラスはクロのクラスだがクロを選ぶ理由は無い。万が一にもその可能性は無かった。

あのクラスにはレクスがいる。この合同実技訓練は魔法学科と騎士学科でどちらが優れているかを競う目的もある。クロをどんな理由で選んだのかを知るため、アスワドは三年の学年主任の元へと向かった。

午後の授業は実技を兼ねた「魔法」を扱う授業だった。

「今日は、魔法について説明しますね」

初老を迎えたリエータ先生は物腰柔らかく説明を始める。

「現在、開発されている魔法は四種類。ご存知の通り、地・水・火・風です。この魔法学科にいる生徒にも必ず素質はあります。皆さんも早く素質を見つけることが魔術師への道に近づくことになります」

リエータ先生は説明を終えるとある実験道具を取り出した。丸く光る水晶やフラスコの数々を教卓の前に並べていく。

「では、この道具を使ってある実験をします。では、クロさん。前に来てくれますか？」

今日はついていない。午前の授業だけでなく午後の授業でも当てられるとは。リエータ先生の授業ではよく当てられているから嫌な予感はしていたが。諦めたようにため息をつき、教卓に進んでいく。

ふと、何人かの生徒から小さな笑い声が聞こえる。理由は知っている。リエータ先生の授業では実験は失敗するし、問題も正解したことは無い。

「じゃあ、今日は皆にどの魔法の素質があるか調べようと思います。実は皆さんにはもう、どの魔法の素質が自分にあるのか知ることが出来るのです。この二ヶ月、私たちの授業を受けたことで皆さんの体の中には無意識に素質が生まれているんですよ」

その言葉で生徒の間で喋り声が聞こえてくる。自分がどの魔法に属しているのかは魔術師を目指す者として、最も大事なことの一つだから。

「クロさん。その水晶を持ってくれる？」

言われるがまま水晶を手にとってみる。水晶からは不思議なエネルギーを感じる。

「その水晶に力を込めてみて。それでクロさんにどの素質があるのか解るわ」

水晶に力を込める。次第に水晶の色が変わり始める。

「青なら水、茶色なら土、緑なら風、赤なら火を指すわ。もうそろそろかしら」

しかし、水晶の色は未だ決まっていなかった。様々な色に変わっていく。そして、水晶が真っ黒に染まった。

「え？」

私は目を疑った。リエータ先生から聞いたどの色にもならなかった。最も醜い黒色。綺麗に輝いていた水晶はまるで鉄の塊にでもなったようだった。

次の瞬間、水晶が粉々に砕け散った。

「これはどういったことかしらね」

最初に力を込めて以外、一切力を入れていなかった。ただ、軽く持っていただけなのに。

「まあ、しょうがないわ。個人差はあるもの。落ち込まなくても良いわよ」

私はその言葉を聞く前に自分の席へと戻っていった。

「じゃあ、皆も実験してみましよう。水晶じゃないけど同じ性質の結晶石を前から順に配りますよ」

皆、配られた結晶石を手に取り、力を込めていく。

「私の青色だ」

「オレは赤色になったぞ」

自分以外の生徒がそれぞれ実験を成功させる。自分の魔法の素質を知って喜んでいる。誰も、自分のように失敗する人はいなかった。配られてきた結晶石も水晶のように黒く染まり、粉々に散っていった。

「色が付いた人から順番に持ってきて。次の実験に移るから」

その後、どんな実験をしたのかは知らない。クラスの雰囲気にならねず、教室から出て行った。

魔法も使えない。実験すらまともに出来ない。自分が嫌いになる。

第四の魔法「不幸に不幸は続くもの」(前書き)

私はまた、魔法の実験で失敗をした。好戦的になる性格からローザたち以外のクラスの皆からは疎外されている感じがあった。変えたと思うても、きっかけが無い。しかし、その日の放課後に意外な事を担任のロッソから告げられた。

第四の魔法「不幸に不幸は続くもの」

この日の放課後。私は耳を疑うようなことを告げられる。

それはホームルームでのことだった。内容は二日後に行われる騎士学科との合同実技訓練の内容だった。

「今回の実演でこのクラスの代表が決まった。クロだ」

その言葉にクラスがざわつく。当然だった。私よりも優れている生徒はクラス全員と言ってもいい。

「えっと、クロ。辞退は出来ないから、選ばれた以上がんばれよ」

そう言って担任のロッソは去っていった。教室は、この話題で盛り上がっていた。この合同実技訓練で騎士学科と競うことはクラス全員が知っている。負けたら惨めな思いをするのは当たり前だった。

今日の授業が終わり、いよいよ明日に控えた合同実技訓練。クラスにはすでに負けたかのような雰囲気が漂っていた。クロは部屋に戻ったが、何を考えても明日のことが頭から離れようとしなかった。

「クロちゃん。大丈夫？」

心配そうに見つめてくるローザ。やはり自分のことのように悲しい顔をしている。

「大丈夫だ。何とかなるよ」

私は、ローザにこれ以上心配かけさせないと嘘をついた。本当は恐い。普段から好戦的ではあるが、それは種族のことを悪く言われるからだ。深い理由はないが、種族の皆のことを言われるとどうしても黙ってはられない。その時のように好戦的になればいいけど。

「あのね、今夜は一緒に寝ていい？」

「ん？急にどうした？」

「お母さんから聞いたの。一緒に寝ると不安じゃなくなるって。だから一緒に寝よ」

「どうやら、ローザには強がりもバレているらしい。こんなに心配してくれる友達がいるんだ。少しはがんばってみようかな。」

アスワドは三年の学年主任であるパーチェの元にいた。

「どういうことですか！クロを選ぶなんて」

「アスワド君。もう決まったことなんだよ」

「ですが、パーチェ主任。クロのことを知っているんですか？今日の授業あのクラスは魔法を扱い始めました。しかし、クロは今日の授業に参加していなかったんですよ。それだけじゃない。クロには魔法の素質も目覚めていないのに。どうやって実演をさせるつもりですか！」

アスワドの言っていることは本当だった。今日の授業で初級魔法程度の魔法を扱えるようになった魔法学科の生徒たち。レクスに至っては初級魔法の大半を取得するまでに成長している。そのレクスを差し置いて、何の魔法も使えないク口を選んでいる。

「だからどうしたというのだ？ 此方で決まった以上、君が口出ししても無駄なんだよ」

もはや、口論は無意味だった。あとは奇跡を祈るしかない。アスワドはそう思っていた。

第四の魔法「不幸に不幸は続くもの」(後書き)

ついに始まる合同実技訓練。魔法学科代表として騎士学科の生徒との一騎討ち。クラスの皆はすでにあきらめムード。魔法をまったく使えないクロはこの窮地をどう乗り切るのか。

第五の魔法「落ちこぼれの闘い」（前書き）

合同実技訓練・実演の代表者に指名された私にはクラスのこと、そして魔術師と騎士の意地を見せるための闘いだなんてどうでもよかった。ただ、自分のため、友達のために、この闘いに勝つ。

第五の魔法「落ちこぼれの闘い」

合同実技訓練も残るのは実演のみ。実演の時間は刻一刻と迫っていた。

「では、これより最終項目である実演に入る。魔法・騎士学科から各一名ずつ代表者による一騎打ちを行う。日ごろの授業や訓練の成果を存分に発揮するが良い」

騎士側から出てきた男を見たとき、力任せなイメージがあつた。スキンヘッドに厳つい顔。大きな、雄叫びにも似たような声をあげ前に出てくる。その姿を見ただけでこちらの生徒から溜め息がこぼれる。男と女で分が悪いのに私はクラスで一番出来の悪い生徒。溜め息が出て当然だと思った。

「諦めたりなんかしたら許さないわよ」

サフィラが声をかけてくれる。サフィラなりに気を遣って言ってくれた言葉だろう。

「間違つて殺すなよ」

相変わらず皮肉のように言ってくるトラゴス。二人の言葉で肩の力がすつと抜けた。負けるためだけに闘う奴なんかない。どうせ闘うなら勝つことを考えよう。

「魔法学科クロ。騎士学科モンスター。中央へ」

三年最高責任者のエトレインの合図で私は足を前に出す。魔法・

騎士両学科の一年主任のアスワドとフィリップ先生もエトレイン先生の両脇にいる。その時アスワドが棒の様なものを持ち、何か言ったような気がしたけど、すでに闘いは始まっていた。鋭い目を更に尖らせ、相手を威嚇する。騎士の男も負けじと睨み返して来る。

「まるで獣同士だな」

トラゴスがまた皮肉を言った。それを合図にしたかのように

「はじめえ！」

号令が始まった。

「オラア」

先手必勝。モンストロの顔面を思いつ切り殴った。意表を付かれたのかまともに喰らい地面に倒れこむ。よく見れば剣すら抜いていないことに気付いた。静まり返った後、周りから大きな笑い声が聞こえた。

「マジかよあの女。グーで殴ったぞ」

「本当に魔法学科の奴かよ。魔法使えよ」

周りの声を聞いているうちにちよつと恥ずかしくなってきた。フィリップ先生もエトレイン先生も少しばかり笑いを堪えていた。

「バカ野郎！指揮棒も持たんと何やってる！」

アスワドのおっさんに頭を殴られ変な棒を渡される。

「魔法学科の生徒なら指揮棒くらい持たんでどうする！」

「何だ？指揮棒って？」

その言葉の後、更に笑い声が激しくなった。魔法学科からは何やら暗いムードが漂ってくる。

「クロの奴、昨日の授業に出ないから。もう終わりだ・・・」

「指揮棒ってのは自分の魔力を集中させる時に使う棒のことだよ！よく覚えておけ！」

「へえ」

アスワドのおっさんから指揮棒とやらを貰い、仕切り直す。モンスター口も剣を抜き、構える。鼻血が出ている顔は怒りに染まっていた。

「ゴホン。では改めて開始！」

「オリヤア！」

殴られた借りを返すように突っ込んでくる。振り下ろされた剣をかわそうとしたが時間が無かった。仕方なく手に持っていた指揮棒で受け止める。指揮棒はその役目を果たすことなく無残にも真っ二つに割れた。

「あらら」

モンスターは剣を振り回しているが、間一髪の所でかわし続ける。騎士と呼ぶのが嫌になるくらいだった。

「おい、モンスター。情けないぞ。女相手になめられて」

「うるせえよ！チツ。女のくせに男の制服着やがって。変な奴め」

「あ？」

疲れたのか、或いはバカにされたのが気に障ったのか、モンスターは剣を止め喋り始めた。

「お前みたいな奴は目障りなんだよ。滅んだ種族の生き残りらしいがお前も死んでいれば良かったんだよ！」

そこから先、私はよく覚えていなかった。ただ、心の奥から声が聞こえた。

憎め。そう、聞こえた。

「アンタに何がわかるってんだ。皆のこと侮辱しやがって・・・」

制服を脱ぎ、帽子も外した。

自分の名前と同じ黒色の髪が風に揺れた。

そこまでは覚えていた。そこから何をしたのか、覚えていない。自分の意思ではない何かが自分の体を動かしたような感じだった。

クロはモンスターに向かって走った。その眼は、ただ獲物狙う獣のようだった。モンスターも反応し、剣を振り下ろす。その剣をク

口は手で受け止めた。その手は禍々しい黒で染まっていた。手に力を込め、剣を粉々に砕く。ガラス細工のように跡形も無く砕け散った。そして、クロはそのままの手で拳を作りモンストロの顔面を再び殴った。

大の字に倒れこみ意識を失ったモンストロ。未だ、眼光は鋭く光っている。

「勝者！魔法学科クロ！」

魔法学科から歓声の聲があがる。しかし、それがクロの耳に届くことは無かった。

第六の魔法「闘いが終って」

気が付いたとき、闘いは終わっていた。どうやら自分が勝って実演が終了したようだ。両クラスが整列し、エテレインの最後のあいさつが終ろうとしていた。

「生徒諸君。ご苦労だった。これで合同実技訓練を終了する。では解散」

あつという間の出来事のように思えた。何だか体が重いし酷く疲れている。

「やったじゃん。アンタが勝つなんて！」

サフィラたちが駆け寄ってくる。けど、話す余裕が無かった。

「ワリイ。ちょっと疲れたから先に帰るわ」

引きずるような足取りで、部屋へと向かう。

「どうしたのかしら？あんなに疲れているなんて」

「緊張してたんだろ？ゆっくりさせようぜ」

「そうね・・・」

ローザもサフィラ同様、心配していた。しかし、後を追う勇気がなぜか出なかった。

「腹減ったな。メシ食べていくか」

「いいわね」

「ローザも行くか？」

「あ、うん」

部屋に着いてからはベッドに一直線。身を任すようにベッドに倒れこむ。大きく息を吸い、ゆっくりと吐く。あの闘い、どうやって勝ったのかさえ覚えていない。ただ、一つだけ覚えていた。

自分の手が黒く染まったこと。

手をじつと見てみる。もう、黒くはなかった。あの黒色はある魔物を思い出す。私たちの村を襲い、皆を殺した。黒く染まった鳥の様な魔物。

私は考えるのを止め、深い眠りについた。

第六の魔法「闘いが終って」（後書き）

闘いに勝利したクロ。しかし、魔法ではない力、手が黒く染まった故に得た勝利だった。なぜクロの手が黒く染まるのか。魔法が使えない事と何か関係があるのだろうか。

第七の魔法「小さな喜びと小さな不安と」(前書き)

実演が終わった後、いつも通りに投稿した私にちよつと意外なことが待ち構えていた。それは小さな、だけど嬉しさは大きかった。

第七の魔法「小さな喜びと小さな不安と」

翌日、クラスに行くときちょっと意外なことが起きた。ほんの些細なこと。

「おはよう、クロ」

「おはよう」

クラスの皆が私にあいさつをしてくれた。いつもなら無視されていたのに。戸惑っていた私にトラゴスが声をかけてくれる。

「サフィラに感謝しろよ。皆を説得したのアイツだからさ」

意外だった。サフィラが私のことを心配してくれていたのだろうか？

ここに入学して、一人ぼっちだった私は最初の授業で種族の皆のことをバカにされた。それで、その教師を殴って停学になった。ローザとはルームメイトだから友達になれた。それからサフィラとトラゴスとも仲良くなった。だけど、クラスの他の人は私のことを恐い人だっと思ってしまった。他の生徒とも喧嘩することが多く、余計誤解を招いていた。本当は私だって皆と仲良くしたかった。

「アイツ、一生懸命説得していたぜ。お前のことよっぽど心配だったんだな」

遅刻時間ギリギリにサフィラが教室に入ってきた。サフィラが皆の誤解を解いたお陰で、こうして皆に話しかけられた。素直な気持ちでサフィラに送った。

「ありがと。サフィラ」

「な、何よ急に。朝はおはようでしょ。いきなり感謝しないでよ」

どうやら照れているようだ。顔が真っ赤になっている。サフィラ自身、感謝される理由は分かっているはずだから。

「照れんなよ。クロが感謝してるんだぜ」

「トラゴス。アンタ覚えておきなさいよ」

「何のことだ？俺は別にお前がクロのためにがんばったことなんて喋ってないけど」

いつものサフィラとトラゴスのやり取り。だけど、今日はなんだか不思議な感じがした。新鮮な感じ。今から学園生活がスタートするような、そんな感じ。

自分の手に意識を集中させる。すると、手が黒く染まった。手首近くまで染まりきった手は禍々しく別の生き物にさえ思えた。実演から一週間。魔法の訓練では相変わらず失敗続きだが、なぜか手を黒く染めることは出来た。

事の発端はリエータ先生の授業で魔法を使うときのコツを教わったときだった。意識を集中させ、念じることが一番大事だと聞き、魔法なんて何も覚えていないけど手に意識を集中させた。すると、手が真っ黒に染まった。その時は突然のことで驚いたからすぐに手

は元通りに戻った。

この黒い手のことで解っていること。それは、この手で物に触れると粉々に砕け散る。そこに何もなかったかのように跡形も無く消え去る。試しに部屋にあったコップや外に落ちているゴミなんかで試してみた。この手は物の大小に関係なく壊すことが出来るようだ。だけど、壊した物が大きければ大きいほど、その後に襲ってくる疲労感も比例して酷くなる。一度、樹を壊してみたら立っていられないほどの疲労感だった。

なんで私にこんな能力があるのか解らない。だけど、この黒い手がある限り魔法を使うことが出来ない。直感だけど、そう思えた。

第八の魔法「学科最高責任者エテレイン」

少しだけ、時は遡る。夜、合同実技訓練が終わり、フィリップとエテレインは資料室にいた。明かりもつけずに月だけが二人を照らしていた。

「くそ、モンストロの奴。あんな女に負けるなんて」

「まあいい。あの男には期待などしていない」

「お言葉ですが、エテレイン先生。モンストロはクラスでも随一の剣の使い手です。多少癖はありましたが、その言葉は酷すぎます」

「お前にも言えることだ。当面、あの女の始末はお前に任せてある。次に失敗してみる。覚悟は出来ているな」

エテレインは静かに、フィリップを圧迫する。

「わかりました」

納得いかない。しかし、反感を唱えることが出来ない。エテレインは三年最高責任者。いわば、全学年・全学科における最高責任者でもある。校長や教頭よりも実質的に権力を握っている。

ただ、理解できない点は一つだけある。確かにクロと言う女子生徒は素行も悪ければ成績も最悪。だが、たったそれだけの理由で学園を追放するほどだろうか。クロとは違うが、素行の悪い生徒もいれば成績も悪い生徒も他にはいる。なぜ、クロだけなのか。それだけがフィリップには理解できなかった。

フィリップが帰った後もエテレインは資料室に残っていた。ある

書物をただ、じつと見ていた。

『始祖の種族と魔物』

かつて、種族と魔物は共存の道を歩んでいた。世界の秩序を守るため。だが、始祖と呼ばれた四体の魔物は人種の危険性を感じ、同様に始祖と呼ばれた四つの種族を滅ぼす。しかし、同時に始祖も命を落とすことになった。そこから種族と魔物の争いは始まった。種族を殺された人種。始祖を殺された魔物。これ以降、二つの立場が交わることは無かった。

資料を読み終えると、エテレインは窓から月を眺めた。なぜ、始祖の魔物は始祖の種族を殺したのか。その理由は、この資料室に存在している書物の中には記されていなかった。

第八の魔法「学科最高責任者エテレイン」（後書き）

クロを学園から追放しようとするエテレイン。それに不快感を抱きつつもフィリップは次の作戦に移行する。新たに学園のスタートを切ったクロに新たに厄介なことが降りかかる。

副題をやっと決めたので、ちょっと変えてみようと思います。

第九の魔法「優等生と劣等生」（前書き）

合同実技訓練も終わり、クラスの人とも仲を深めることが出来た。口。そんな朝のある日、広場でレクスを見かける。

第九の魔法「優等生と劣等生」

珍しく朝早く起きた私は部屋を出て、寮の外を出歩いてみた。朝の日の光や風が気持ちよかった。男子館と女子館の間の広場に着いたときに同じクラスのレクスと出会った。

「おはよう、レクス」

「クロさん。おはようございます」

相変わらず、さわやかな笑顔であいさつを返してくる。レクスとはローザ達のように特別、仲が良いわけではないけど、普通に接してくれていた数少ないクラスメイトだ。

「朝早くから何やっているんだ？」

「魔法を教わったからね。少しでも早く上達したくて」

「熱心だな。俺には絶対無理だ。第一、魔法は使えないし」

「いや、誰にでも得手不得手はあるものだ。焦らずに、ね」

久しぶりにレクスと話してみると、心が落ち着く。相手のことを第一に考え、人のためにと思う性格からだろう。だけど、レクスはあのことをどう思っているのだろう。やっぱり本人の言葉が一番気になる。

「レクス。合同実技訓練の実演で、私が選ばれたこと。どう思う？」

「ん？そうだなあ」

少しの間、レクスは空を見上げ考え込んでいた。

「あの闘いを見たら、君が選ばれたのは当然だと思ったよ。どんな理由であれ、勝つことが出来たのは君の実力だと思っている」

「でもレクスは学科一位の実力だから、自分が選ばれるとかは思っ
てなかったか？」

「どんな生徒にも可能性はあった。それは僕だって当然、選ばれる
かもって思っていたよ。だけど、君のように勝てるかと言われたら
絶対とは言い切れないし、そう考えれば君が選ばれたことには納得
しているよ」

レクスがやけに大人びて見える。こういう考え方が出来るからこ
そ、クラスの皆も信頼している。

「また学校で」

そう言っ
てレクスは男子寮の方へと戻っていった。

それから、レクスと会話する機会が増えた。レクスから話しかけ
られることもあるけど、私が授業で解らなかつたところを聞きに行
くのがほとんど。

相変わらず魔法は使えないままだけど、レクスが言ったとおり、
焦らずに自分なりにがんばっていいこうと思った。

第十の魔法「マルグリット」恋する女の子」（前書き）

レクスと仲良くなっていくクロ。しかし、そんなクロを良く思わないクラスメートのマルグリット。彼女はクロに嫉妬する余り、様々な嫌がらせを講じてくる。

第十の魔法「マルグリット」恋する女の子」

どんな手を使ったのか知らないけど、なんであんな不良女がレクス様と一緒にいるの？

クロと同じクラスでエルフ族のマルグリットは食堂の物影からレクスとクロを見つめる。

「あんな不良女がレクス様と話しているなんて。私でも一回しか喋ったことないのに」

レクス様は学園でも珍しいプレミア族。成績優秀に加えてルツクスも拔群。女子からの評判が高く、私もそんなレクス様に恋する可憐な少女。毎日レクス様を見つめるだけでとっても満足している。でも当然、レクス様を狙っている女子生徒は多い。同じクラスなんだからもっと積極的に行かなくちゃ。レクス様と付き合うため、敵は一人でも少ないほうがいいと思っていたのに、なんでクロなんて妙な奴があんな仲良くなってるのよ。

「ねえ、サフィラも言っていたし、クロは別に不良なんかじゃ」

「冗談じゃない！あんな女の言う事なんて聞くもんですか！」

一緒にいるのは同じくエルフ族で幼馴染のイーリス。サフィラも昔からの友達だけど、同じエルフ族としてキャラが被っている。私だって学園ではそれなりに人気がある。けど、サフィラの人気には敵わない。昔から何かと競い合っていたけど、私が勝てることなんてほんの少し。あんな大食い女の何処が良いの？自分の方が何倍もかわいいのに。

「まあ、あんな不良女にレクス様が惹かれるはずないし」

「何してんのアンタ？」

いつの間にか憎きサフィラが後ろに立っていた。明らかに一人前ではない量の食事をトレイに載せて。

「あ、サフィラちゃん。お昼なの？」

「お呼びじゃないわよ。あっち行ってよ」

私の言葉などお構いなしに視線の先に目を向ける。

「クロとレクスじゃん。覗き見なんて相変わらず趣味悪いな」

サフィラは二人に近づいて、会話に入っていた。

「マルちゃんも仲良くすれば良いのに」

「あんな不良と仲良くなれるわけ無いでしょ」

言い合っているうちに三人はどこかへ行ってしまう、見失ってしまったと思ったが、サフィラが座っているテーブルを見つけた。

「ねえ、レクス様とあの不良女。何話していたの？」

「あのさ、クロは別に不良じゃないって前に言っただろ？」

「そんなことどうでもいいのよ。ねえ、教えなさいよ」

「今度の授業、野外活動でしょ。それで一緒の班になるんだって」

「はぁ！それ本当なの！」

「嘘言ってどうするのよ。アンタ、変なこと考えないでよね」

マルグリットはその言葉を聞かずに食堂を出て行った。後を追うようにイーリスも食堂を後にする。

「マルちゃん。どうしたの？」

「許さない。あんな不良に。レクス様……」

独り言のように小言を口にするマルグリット。イーリスの声は届いていないようだった。

第十の魔法「マルグリット」恋する女の子」（後書き）

とりあえずやっとの思いで十話まで書くことが出来ました。今更になって女の子を主人公にしたのは自分でも後悔しています。ケツコ―難しいですね。ファンタジーもので女の子が主人公って……。けど、書きたいこともいっぱいあるので頑張っていきたいと思っています。応援ヨロシクお願いします！

あと、お気に入り登録してくれた人アリガトー！こんな作品を登録してくれただけで感謝です^^

第十一の魔法「嫌いな子に見える黒い影」（前書き）

野外授業でクロとレクスが同じ班になると聞いたマルグリットは、放課後になると、レクスに話しかける。用件はもちろん、野外授業のこと。そんなマルグリットに対してクロはあることに気付く。

第十一の魔法「嫌いな子に見える黒い影」

授業が終わり、ホームルームを迎えた。明日はいよいよ野外活動の授業がある。

「明日は初めての野外だ。羽目を外すなよ。以上、解散」

ロッソのいい加減な伝え方でホームルームも終わった。レクスが私の机に近づいてくる。

「クロさん。明日のことで」

「呼び捨てでいいって。さん付けするほど私は偉くねえよ」

「そうか、すまない。で、明日のことなんだけど」

話を始めようとしたレクスだが、後ろから声をかけられ振り返る。後ろにはマルグリットがいた。クラスの人と話せるようになっても話しかけてくれない人も当然いる。マルグリットもそんな一人だった。サフィラと昔からの友達。それしか知らない。

「ねえ、レクス君」

「マルグリットさん。どうしたの？」

レクスはどんな人にも「さん」付けする癖がある。「さん」付けしなくていいと言えはしなくなるし、逆にあだ名で呼んでと言ったらその通りに呼ぶ。素直すぎるというのか無垢と言った方がいいか。

「もう、マルちゃんの良いよお」

甘ったるい声と上目遣いで身をレクスに身を寄せている。なんか嫌いなタイプだ。ネコ被っているような、女の武器使いまくりって感じが好きにはなれない。それが第一印象。

「明日の野外活動。一緒の班になろうよお」

「マルちゃん。僕はもう、クロと一緒に行こうと思っ

「チツ」

一瞬でよく聞こえなかったが、確かに私に向けて舌打ちが聞こえた。それに、すぐく睨まれた気がする。

「えゝ。私も一緒に行きたあい」

「クロはどう？マルちゃんも一緒に行ってもいいかな」

「別にいいけど」

私は誰と行っても一緒だと思い、あっさりと承諾した。

「ありがとゝ。じゃあ楽しみにしてるね」

そう言い、マルグリットは教室から出て行った。その時、なんとなくだけど、黒い影が一瞬見えた。見間違いかもしれないけど、自分の手の黒色と似ているようだった。

第十二の魔法「男の子の策略」(前書き)

野外での授業は明日に迎えた夜。レクスはルームメイトであるトラ
ゴスとある話をしていた。

第十二の魔法「男の子の策略」

夜、レクスは自分の部屋に戻っていた。机に向かい、熱心に日記を書いている。

「相変わらず真面目な奴だな」

ルームメイトのトラゴスはベッドに寝そべったまま話しかけた。

「まあ、日課だからね。それより、野外活動の件はありがとう」

「まったく、サフィラとローザが一番大変だったんだぞ。特にローザが」

レクスは事前にトラゴスにある提案をしていた。クロと一緒に班になること。ローザとサフィラと別の班にすること。この二つ。

「しかし、お前も物好きだな」

体を起こし、からかう様に話しかけるトラゴス。

「誰が誰を愛そうと自由だ。そうだろう？」

レクスにとってトラゴスは本当のことを話せる友人である。

「でも、いいのか？メルキュールが黙ってないだろ」

「彼女は関係ない。これだけは自分の自由だと思うから」

そうか、と小さく呟き再びベッドに倒れこむ。

「君だって同じだろ。バシリスさんとは上手くいつているのか？」

「その名を出すな。禁句だぞ」

二人は、何でも話せる。それは二人だけにしか解らないこともある。秘密を共有することで更に深い仲となる。

第十三の魔法「教師の策略」(前書き)

フィリップは翌日に行われる野外の授業である策略を弄していた。けして許される行為ではないそれは、クロたちの授業を危険なものと化す。

第十三の魔法「教師の策略」

エリゴールの南門付近に止まる馬車。そこに近づく一つの影。月明かりに照らされた影はフィリップだった。

「お待ちしておりましたよ、旦那」

「例のモノはこの中か？」

「そうです。しかし、貴方のような教職者がなぜ、このようなモノを？」

「そんなことは詮索しなくてもいい」

「では、代金の方を…」

フィリップは黙ったまま金貨の入った袋を手渡す。御者はそれを受け取り大事そうにしまい込む。

「後はご自由にお使い下さい。ただ、凶暴ゆえ何分お気をつけ下さい」

御者はそう言い残し、馬車を置いて帰っていった。

もう失敗は許されない。たとえ、如何なる手段を使っても。エトレインは始末と言っていた。なら、殺しても構わないだろう。

第十三の魔法「教師の策略」(後書き)

くあとがき

一挙に二話投稿しましたが、一話一話が短いので本来の一話分に満たないことに気付きました……。やつと色々なことにまとまりがつきそうなのでどんどん投稿したいと思います(できるだけ)

第十四の魔法「野外授業、開始」（前書き）

様々な人間の思惑が交わる中、野外授業は始まった。レクスと思い、マルグリットの思い、フィリップの思いはこの授業にどのような結末を生み出すのか。

第十四の魔法「野外授業、開始」

王都エリゴールの南門を出ると、どこまでも続く広大な草原が広がっていた。

「いいか、今日は実際に自然に存在する魔法の素質になるものを探してもらおう」

魔法は、この世界に存在する生物や植物、文明、果ては魔物から生まれてくると先代のポルポル族は語った。

そして現在。開発されている魔法は地・水・火・風の四種類。しかし、まだ発見されていない魔法もあると、先代の遺した書物に記述されていた。

ユートピア学園では毎年、魔法学科の新生に野外での授業を体験させ、新しい魔法の元になるものを探し、すでに存在する魔法の元になったものを教える、といった授業を取り入れている。

ロッソを先頭に生徒たちは森の中へと入っていく。

「先代のポルポル族は、この世界に流れている大気とこの森のヴィント・ウッドという木からヒントを貰い、風という魔法を創り出した」

ロッソは木の葉を一枚手に取り、レクスに渡す。

「今、レクスに渡した木の葉がヴィント・ウッドの葉っぱだ。レクスは風の素質を持っていたな？覚えている魔法の何でもいい。その葉っぱを持ちながら魔法を使ってみろ」

「はい」

レクスは言われるまま葉っぱを握り、もう片方の手で指揮棒を手取る。

「じゃあ、イエロ・ブリッサを使います」

指揮棒を木に向け、呪文を唱える。指揮棒から放出された風の弾丸はいとも簡単に木を貫通し、折れるようにして倒れてしまった。

「すごい……。さすがレクス様」

後ろで見ていたマルグリットは憧れの眼でレクスを見ていた。

「レクス、どうだ。感想を言ってみてくれ」

「力が増幅したような、呪文を唱えている時に自分のではない違う力を感じました」

「そうだ。レクスが使った魔法、普段の威力では木を倒すことはできない。では、なぜ威力が高まったのか。その理由はヴィント・ウツドの葉っぱの力にある」

レクスが握っていた葉っぱは粉々に砕けており、枯れたように茶色になっていた。

「ヴィント・ウツドの葉っぱは風の素質を持つ魔法の威力を増幅させる作用を持っている。ヴィント・ウツドのように現在ある魔法に作用するものも世界には存在している。そういった新しい発見を探すのもこの授業の目的だ。では、事前に決めていた班に分かれて行動を開始しろ。以上」

普段のロツソと違い、真面目な態度で授業をしている。それほどにこの授業は大切ということだろう。

「じゃあ、僕たちも探そうか」

レクスとマルグリット。そして私は森の探索を開始した。歩いていると、不意に後ろから押されて倒れてしまった。

「ごめんなさい。ちょっとつまずいちゃって。大丈夫？」

どうやら、マルグリットが私のことを押したらしい。指の方が切れてしまい、血が流れている。

「クロ、血が出ている」

レクスが切れた指を見て、服の端を破いて包帯の代わりに指に巻いてくれた。

「ありがとう。でも服を破かなくなっただっていいだろ」

「女性のキズは見ていて良いものじゃないからね。じゃあ行こう」

立ち上がった私に近づいてきたマルグリットにいきなり鳩尾を殴られた。

「うっ」

前によるめいた私の耳元に小さくマルグリットが呟く。

「あんまり調子に乗らないでよ」

そう言い残し、マルグリットはレクスのほうに走っていった。相
変わらず甘い声で身を寄せながら。

第十四の魔法「野外授業、開始」（後書き）

（あとがき）

前回書いたことと違う結果になってしまいました。一日一回更新するつもりでしたが、気付けば日時が……………。

と、まあ反省もここまでにして気を取り直していきたいと思います。もうすぐですが、クロの力の正体とかを書いていこう。出来れば呼んでくださる皆様に伝われば良いのですが、中々上手く書けてなかったり。なんとか頑張って書いていきますのでよろしくお願いします！

あと、やっとですが、お気に入りが増えました。まだまだですが、これからも増えていく事を願ってしっかりしていきます。

f i n

第十五の魔法「黒い影、再び」

どうやら、マルグリットはレクスのが好きで、最近仲良くなった私のことを疎ましく思っている。そんな私に敵対するように、一緒の班になったということだろう。

そう思ったとき、またマルグリットに黒い影が見えた。今度は間違いでもなく、ずっと見え続けていた。

森を探索していると、何度かマルグリットに嫌がらせをされた。いきなりヘビを投げられたり、前と同じように転ばされたり。さすがに怒りそうになったが、我慢しなくてはならない。せっかくサフイラが誤解を解いてくれたんだ。こんな早く問題を起こせば、昔に逆戻りだ。今は、自分が我慢すればいいだけのこと。

気が付くと、授業の時間も終わりに差し掛かっていた。森に入っているため、早く引き上げなければ帰りに間に合わなくなる。

「そろそろ終わりにしようか」

「えー。まだ、こっちのほう探してないよお」

マルグリットが指差した方は更に森の奥の方だった。この森に魔物はいない。だけど、気になっていることが一つだけあった。まだマルグリットに黒い影が見えている。先程からずっと。マルグリットの体を取り巻いているように動きながら。

「なあレクス。マルグリットの周りにある黒い影が見えるか？」

「黒い影？別に何も見えないけど……」

どういうことだ？なぜ、私にしか見えていない。レクスが嘘を言

うわけも無いし、幻を見ているわけでもない。

「もういい！私一人で探すから！」

「待つて。一人で行動したら……」

レクスの忠告を無視してマルグリットは奥の方へと走っていった。マルグリットは自分のことを心配してもらおうと敢えて森の奥へと走った。レクスが自分を追って来てくれれば、自分のことを心配していると思ったのだ。

「どうする？レクス」

「追うに決まっている。このままじゃマルちゃんが心配だ」

レクスと一緒にマルグリットの後を追おうとしたその時、森の奥から悲鳴が聞こえた。マルグリットの悲鳴だった。

「レクス、今の声」

「急ごう！何かあったんだ！」

このとき、私は嫌な予感がした。あの時、マルグリットを強引にでも止めておけば、あんなことにはならなかったのに。そして、この森の奥へ行くことが、私自身の、この黒くなる手に変化が訪れるきっかけになってしまう。

第十六の魔法「森での異変」

奥の方の広い場所に、魔物とマルグリットがいた。マルグリットは腰が抜けており、魔物が目の前にいるのに呆然とし、顔は恐怖に染まっていた。

「なんだありやあ？」

「あれは、グリズリー。なぜこの森に……」

「助けないと！」

グリズリーは叫び、手を大きく上に上げ凶暴に伸び切った爪でマルグリットに襲い掛かるうとする。

「いやああああああっ！」

悲鳴を上げるマルグリットの元へ走る。逃げることなど考えなかった。

間一髪のところマルグリットを抱えて、助けることが出来た。だけど。

「う、うあ……」

肩に激痛が走る。肩から大量に血が流れている。触ってみて血の生暖かさがキズの深さを実感させられる。

「なんで…私を助けたのよ！あんたに酷いことしたのに…。ねえ！なんでよ！」

「……大切なクラスメイトだから……」

その言葉を聞いたマルグリットは涙を流した。自分に酷いことをした人を自分が傷ついてでも助けたクロ。サフィラが言ったことだと真に受けず、周りの噂だけを信じて、自分で判断せずに、そのことを今になって後悔した。

すでに授業の終了を知らせる鐘の音が学園から聞こえてから数分が過ぎた。まったく、何をやっているんだ、あの三人は。今回はレクスと一緒にだから大丈夫だと思っていたが、クロめ、また何かトラブルでも起こしたのか？

クロ・レクス・マルグリットの三人だけが戻ってきていない。幸い、この森に魔物はいない。

「先生、探した方が良くないですか？」

「ん、そうだな。じゃあ探すか」

面倒になる前にさっさと探すか、まあ別に焦る必要も無いだろう。どうせ迷子にでもなったのだろう。

森に入ろうとするロッソの耳に悲鳴が聞こえる。女の声、まさかクロかマルグリットに何かあったのか？……多分マルグリットだろう。クロがあんな声を出すわけが無い。しかし、ただごとではない悲鳴だった。

「先生！今の悲鳴……」

「お前たちは学園に戻っている！」

走るロツソの後ろをサフィラとイーリスが後を追って走ってくる。

「付いて来るな！戻れ！」

「さっきのマルちゃんの悲鳴です。マルちゃんに何かあったら……」

そう言ったイーリスは泣きそうだった。

「分かった、分かった。はぐれるなよ」

まったく、女の涙ほど恐いものは無いな。

第十七の魔法「クロの覚醒」(前書き)

森にいないはずの魔物に襲われるクロたち。初めて出会う魔物に恐怖を覚えるクロとマルグリット。しかし、レクスだけは助かるために諦めていなかった。

第十七の魔法「クロの覚醒」

どうやら、かなり傷は深いようだ。一向に血は止まらない。そればかりか、グリズリーがゆっくりと近づいてくる。肩を抑えながら、立ち上がり、距離を取るうとしても思うように足が動かない。

「しっかりしなさいよ！」

マルグリットが私に肩を貸し、一緒に歩いてくれた。だけど、小柄なマルグリットはゆっくりとしか進めなかった。

「アンタだけでも逃げなよ。そうすれば助かるかもしれないだろ」

「バカ言わないで！友達を放っておけるわけ無いでしょ！」

その言葉はどんな言葉よりも私の胸の奥底まで響き、熱くさせた。最初は、あんなに嫌われていたのに、今は違う。互いに助け合うことが出来る友達。

そして、今までマルグリットに纏わりついていた黒い影が徐々に消えていった。まるで悪い気が浄化されていくように。しかし、後ろから雄叫びが聞こえる。グリズリーは狙いを定めたかのように一直線に私達に向かって走り始めていた。

「どうしよう……」

周りには隠れる場所も無ければ、逃げる道も無い。絶体絶命か。そう思った時、後ろから呪文が聞こえた。

「イエロ・ブリッサ！」

放たれた風の弾丸はグリズリーの喉元を捕らえた。グリズリーは後ろに飛ばされ大きな地響きを立てて倒れ込んでしまった。

「大丈夫か？二人とも」

レクスが駆け寄って来てくれた。レクスは服を脱ぎ、肩のキズの応急処置をしてくれた。

「万が一と思って、持ってきて良かった」

レクスの手にはヴィント・ウツドの葉が握られていた。さっきの魔法はヴィント・ウツドで威力を高めた魔法だったようだ。

「レクス様、ごめんなさい。わたしがこんな奥まで来ちゃったから……」

「今は、後悔する前に逃げることを考えよう」

そう言ったレクスの顔に普段の爽やかで余裕な表情は無かった。ただ、目の前のグリズリーに恐怖しているようにも見えた。

「死んだのか？あの魔物」

「いや、急所を狙ったけど所詮、初級の魔術だ。魔物を殺せるほどではないはず」

レクスの言ったとおり、グリズリーは起き上がった。まだ、諦めていないようだ。

「ここは僕がグリズリーの注意を引き付ける。その間に二人は逃げてくれ」

「そんな、レクス様……」

「でも、それじゃあアンタが」

「逃げるんだ！早く！」

その時、私は目を疑った。今度はレクスに、黒い影が見えた。なんで、レクスに。一体、この黒い影は……。

頭に激痛が走る。頭の真ん中に鋭く突き刺さる痛み。やがて、痛みは体全体に広がり、頭を抑え、倒れてしまった。

意識が朦朧とする中、微かに聞こえる声。マルグリットでもレクスでもない。この声はどこかで聞いたことがある。あの時、合同実技訓練の時に聞こえた声。

憎め、全てを。

グイント・ウツドの葉も、魔力も底をついたレクス。指揮棒を握るだけが精一杯。

魔法は使えば使うほど、術者自身にも影響が及ぶ。それは魔力と呼ばれ魔術師の持つ素質と同様に体内に存在する。魔力を失えば当然、魔法は使えなくなる。レクスは優等生といってもまだ一年。慣れない実戦と突然の状況。加えて、まだ自分の魔力がどの程度体内に存在するのも知らない。今のレクスは魔法を数発使えば魔力は枯渇する。

「ぐわっ！」

グリズリーの爪がレクスを襲う。かすった程度だが、体勢を崩したレクスには立ち上がる体力さえ残っていなかった。

「レクス様！」

マルグリットはレクスに駆け寄ろうとした。しかし、クロを放っておくことは出来ない。意識を失い、倒れこんでしまったクロを。レクスの目の前までグリズリーは近づいていた。レクスは後退りせず、ただ座り込んでいる。

このまま、魔物の、グリズリーの餌になり、死んでいく自分を想像するレクス。何もかも諦めたように目を閉じる。

刹那が永遠にも思える時間だった。だが、グリズリーは襲ってこない。恐る恐る目を開けたレクス。

そこにはクロがいた。振り下ろされたであろうグリズリーの腕を左手一本で受け止め、レクスの前に立っていた。

「え、クロ……」

マルグリットでさえ驚いていた。一瞬でレクスの前まで行ったクロに気付かなかった。何が起こったのか理解できなかった。

「さっさと逃げなよ。こんな魔物、私一人で充分だ」

「しかし……」

「いいから行きな」

振り返ったクロの顔。その顔にレクスは恐怖を覚えた。目は真っ黒に染まっており黒い線が顔を十字に刻んでいる。よく見ると、手

の方も同様に黒く染まっていた。

「アンタがここにいるても気持ち悪くなるだけ。邪魔よ」

その言葉を合図にクロは左手に力を込める。腕から聞いたことの無い音が聞こえる。クロの手は徐々にグリズリーの腕に食い込み、血が流れ出す。グリズリーは呻き声を上げながらクロを振り払おうともう片方の手で襲い掛かる。クロはその手も掴み、同様に力を入れる。

そして、骨の折れる音。クロの手を境にグリズリーの両腕は千切れた。グリズリーは悲鳴にも聞こえる叫び声をあげる。鮮血が飛び散り、辺りを血に染める。クロは手についた血を舐め、笑みを浮かべる。

「きゃああああああ」

マルグリットは悲鳴を上げた。レクスは目の前の惨劇に言葉が無かった。

「不味い血ね」

グリズリーも本能的に死を察知したのか、背を向け逃げようとする。

「逃がさないわよ」

クロはグリズリーの足を掴み再び力を込める。腕と同様に足も千切れた。

「クロ！もういいだろ！逃がしてやれよ」

「何言っているのよ。殺すに決まっていますでしょ?。」

クロの右手が黒く染まり、剣へと姿を変えた。漆黒の剣は倒れているグリズリーの首に当てられた。

「さようなら。森のクマさん」

「やめる……。クロオオオ!」

すでにクロの手は振り下ろされた。首は切り落とされ、苦痛に歪んだ表情のままグリズリーは死んだ。

第十七の魔法「クロの覚醒」(後書き)

くあとがきく

今回は長くなりましたが、もう少しで区切りが付きそうなのでスピードを上げて書き上げました。しっかり書いたつもりでも上手く説明できていないと思います。ここが終われば一段落着きそうなので最後の気力を振り絞って生きたいと思います

第十八の魔法「異変」

私は目の前に広がった光景を理解できなかった。手についた血。辺りを漂う、腐った様な、嫌な匂い。そして、見覚えのある何かの肉の塊。

「うっ！」

そんなモノを見ていると当然のように吐き気がしてきた。

「クロ、お前……大丈夫か？」

レクスがこちらを見ている。その言葉と、顔を、見たことがあった。

あの、合同実技訓練のとき、気付いたらモンストロが倒れていたとき、周りにいた騎士学科の生徒の顔と同じだった。まるで怖い物でも見るかのような。

吐き気を抑えながら、自分の手をじっくり見てみる。血に染まって最初は分からなかったが、毛と肉のようなモノが手に付いていた。それを見てやっと分かった。

「レクス、俺……俺……」

私が、全ての原因。この血に染まった醜い手が何よりの証拠。

「全部、俺が……」

小さく、レクスが頷く。

「嘘……、だろ」

さっきまでグリズリーに恐怖していた自分。だけど、今は自分に恐怖している自分がいる。

ロツソが到着したとき、とりあえず三人の無事を確認し安堵した。しかし、マルグリットは気絶しておりレクスも傷ついている様子。一番様子がおかしかったのはクロだった。両手に血が付いている。よく見ると顔や服にも付いていた。そして、酷く怯えている。

「大丈夫？クロ」

サフィラが話しかける。

「サフィラ……」

生気の無い声で答えるクロ。かなり様子がおかしい。

「とりあえず、立てるかクロ？」

ロツソの言葉に頷くだけで何も言わない。

「イーリス。マルグリットは大丈夫か？」

「気絶しているだけです。怪我とかはありません」

「そうか、ならサフィラはクロを、イーリスはマルグリットを連れ

て先に帰っている。外で待っている他の生徒にも学園に帰る様に伝えてくれ」

無事とは言えない状況。ロツソはレクスに近づく。

「何が起こったのか、教えてもらおう。レクス」

「はい」

「傷ついているのに、済まないな」

「いえ、無事なのは自分一人ですから」

レクスはあの場所へと歩いていく。ロツソもレクスの後を歩く。何も知らずに、惨劇のある場所へと歩く。

ロツソは言葉が無かった。魔物のいないこの森で、なぜグリズリーがいる。そして、死んでいる。

「なぜ、グリズリーが……」

死んでいるということは誰かが殺したということ。

「分かりません。ですが……」

「誰が殺した！」

鬼気迫るロツソにレクスは少し怯え気味に話を続ける。

「クロが、殺しました。別人のようになって……」

「まさか……」

普段とは違う真剣な雰囲気で考え始めるロツソ。

「わかった。とりあえず、お前も帰れ。後は先生に任せろ」

「はい」

レクスを見送った後、ロツソはグリズリーだった肉の塊に近づく。酷い有様だった。両手は千切れ、足も片方しかない。首は刃物のようなもので切断されている。レクスの言ったことが本当ならクロが殺したことに矛盾が出る。騎士学科の生徒ならともかく魔法学科の生徒がどうやって剣を持つ。最初の集合のときに剣を持っている様子は無かった。

飛んだ首を調べてみる。すると、耳の位置に紙切れを見つけた。

「これは、まさか商標の……」

ロツソが見つけたのは商標タグと呼ばれるものだった。

魔物には家畜として扱われる魔物も存在する。魔術師や騎士により捕らわれた魔物には商標タグをつけることで様々な用途に使われる家畜となる。

このグリズリーもタグをつけているということは誰かに飼われている。しかし、本来タグをつけられた魔物は人を襲わないように調教されているはず。可能性としては一つ。何者かが特別な調教をされた家畜の魔物を野に放ったということ。このタグから割り出せば簡単なこと。

第十九の魔法「異変に次ぐ異変」

医務室で治療を受けようとしたけど、なぜか私のキズは治っていた。確かにキズは深く、血も大量に出ていた。

マルグリットは未だベッドで眠っている。イーリスはずっと看病を続けている。

サフィラと一緒に自分の部屋に戻る。

「もう大丈夫？」

「ああ、心配かけてゴメン」

「いいのよ。じゃあ、また明日ね」

部屋に戻ると、ローザが待っていた。心配しているような顔は相変わらずだった。けど話す言葉が見つからなかった。

自分が恐い。合同実技訓練の時も、さっきも、自分が自分じゃなくなった。別の誰かが自分を支配している。そんな気がした。

恐い恐い恐い恐い。頭の中でいくら考えても答えは出ず、ただその単語だけが頭を巡る。

「どうしたの？ 顔色悪いよ」

私はローザに抱きついた。一人でいたら押し潰される。不の感情に押し殺されてしまいそうだった。

「？ クロちゃん」

「しばらく、このままでいさせて……。お願い」

ローザは何も言わず、黙ったまま頭を撫でてくれた。

夜になり、フィリップはいつものようにエテレインに呼び出されていた。場所もいつもの資料室。しかし、この時だけはエテレインの表情は違った。

「まったく、とんだ失敗をしたものだな、フィリップ」

「は？」

「お前、クロを殺そうとして魔物を雇ったそうだな。それも、裏の世界に精通している行商人から」

「何で、そのことを……」

「つい先程、緊急会議が開かれた。内容はロツソのクラスでの野外授業の件。ある生徒がグリズリーに襲われたそうだ。しかも、そのある生徒がグリズリーを殺した」

「え？」

「その生徒がクロだ。そして、グリズリーから商標タグが見つかったそうだ。そのタグから一人の行商人が割り出された」

フィリップは言葉が無かった。行商人と接触していることが知られれば明らかに今回の騒動は自分が原因だと分かる。

「なぜ、会議など開いたのですか！私は呼ばれていませんよ！」

「そつだ、敢えて呼ばなかった。お前以外の職員で開かれた緊急会議だ。この意味が分かるか？」

「まさか……」

「もう、お前の仕業だと職員全員知っている。近々、処分が下されるだろう」

終わった。全てが崩れる音が聞こえた。フィリップは力なくその場に膝をついた。

「とんだ失敗だ。始末しろと言ったが、殺せとは言っていない。お前に任せたこと自体が失敗だったようだな」

エトレインは資料室から出ようとする。しかし、フィリップが前に立ちはだかる。

「アンタも……道ずれにしてやる！」

「よせ、貴様如きに俺は殺せない」

剣を抜き、エトレインに斬りかかる。素早く剣をかわし、同様に剣を抜くエトレイン。両者の剣が交わる。

「俺を殺しても何も変わらないぞ」

剣を持っていないもう片方の手をフィリップの腹に当てる。小さな声で呪文を呟く。

「アンタ、まさか！」

「死ぬがいい」

フィリップは後ろの本棚まで飛ばされる。本と共に床に倒れこむフィリップ。

「魔法騎士だなんて……………」

「誰にも言っていないからな。貴様が初めてだ。だが、事実を知る者は一人として生かしてはおけない」

エテレインはフィリップの口を塞ぐ。騒がれては迷惑だ。躊躇なくフィリップの胴体に剣を突き刺す。

剣を収めフィリップの死を確認したエテレイン。ふと、壊された本棚に目がいく。本棚の後ろのほうに何かを見つけた。本棚を壊し、確認する。そこには重厚そうな扉が広がっていた。

「なんだ、これは？」

扉に触る。押し扉のようで簡単に扉は開いた。扉の先には地下へと続く階段しかなかった。その階段はどこまで続いているのか分からない。

「ここに、あの書物が……………」

エテレインはその階段を下に下っていった。自分の目的のために。辛うじて、息を吹き返し、一命を取り留めたフィリップがメッセーヂを残したと知らずに。

第二十の魔法「フィリップの残したメッセージ」

今朝早くから先生の動きが慌しい。どうやら緊急の会議が続いているらしく、授業は自習になった。まあ私には関係のないことだった。

この前の授業で、グリズリーを殺したということで謹慎処分を受けている。私自身は全く覚えがないけど、レクスが証言したらしい。あの時は、レクスだけが正気を保っていたらしく、レクスもマルグリットも同じように謹慎処分を受けている。

今は一人でいる方がいいかもしれない。私は何も考えずにベッドで二度寝をすることにした。

職員室ではまた、会議が開かれていた。フィリップが死んだことに対して開かれたものだった。死因は剣が体を貫通したことによる傷。現場の資料室には大量の血が流れていた。しかし、直接の死因ではないが魔法による攻撃も確認されている。つまり、犯人は魔法騎士兩名による殺人だとされている。このとき、学園にいる者も、調査に来たジュールヴィーヴルの検査官でさえも、魔法騎士による犯行だとは考えなかった。

魔法騎士とは、魔術にも騎士にも精通したエリートのこと。しかし、ユートピア学園には魔法騎士は存在しない。カリキュラムはあるが、それに見合った生徒も、教える職員もいないため、事実抹消されているカリキュラム。

そのため、二人組みによる犯行とされ、単体での犯行は考えられなかった。

思わず笑みがこぼれる。他の教師のくだらない推理ごっこも愚かな憶測も笑いにしかならなかった。たとえば、ジュールヴィーヴルの検

査官でも知る筈はあるまい。

会議が終わり席を立つと、声をかけられた。

「エテレイン先生、ちょっといいでしょうか？」

話しかけてきたのは理事長のヴァローナ。ここでは要件を告げず、付いて来て欲しい、と言われ職員室を後にする。

「なんでしょうか？」

連れてこられたのはフィリップの死んだ資料室。事後処理は済んでいるが、まだ血の匂いも跡も残っている。気持ち悪い場所だ。

「犯人のことですが、何かご存知ですか？」

「いえ、私は何も。そのために呼んだのなら……」

「フィリップ先生が以前、私にある相談事をしていましたね。貴方のことで」

「どういうことですか？」

「貴方が、クロという生徒を始末しようとしているということを知りました」

まさか、フィリップが他言していたとは。それも理事長に。面倒なことになった。

「それが、フィリップの殺人と何か関係があるのですか？」

フィリップを使って始末させようとしたのは確かだが、それがフィリップの死と関係性はない。よって自分が犯人になるなどあり得ないことだった。

「相談事をされたときに私はフィリップ先生にある約束をしました」

「約束？ですか」

「ええ、もしエテレインが貴方に危害を加えた場合、すぐに私に伝えと。そして、フィリップは貴方に殺されかけ、最後の力を振り絞り、私にメッセージを残しました」

ヴァローナは血の残ったある場所を指差した。何かが這ったようにして、線が引かれていた。

「これはエルフ族にしか伝わらない文字です。幸い、私もフィリップ先生もエルフ族。貴方にはこれが理解できない筈です」

言葉が無かった。完全に殺しておらず、メッセージを残していたとは。地下に続く階段を見たときに油断してしまったようだ。

「この文字はひどく汚いですが、確かに『エテリエン』と書いてあります。もう諦めて罪を認めたらどうです？」

まだこちらにも手はある。

「ですが、私は騎士です。私がどうして魔法を使えるのです？ 犯行は魔法と剣による攻撃ですよ？ その証明をして欲しいものだな」

「実は、残したメッセージには貴方の名前以外にもう一つメッセー

ジがあります」

「は？」

「『魔法騎士』と書いてあるのですが、貴方まさか……」

「あの女は、必ず学園に害をもたらします！今の内に始末するべきなのです！」

ヴァローナの言葉を遮る。

「教職者の言葉とは思えませんね、エテレイン」

もはや、言い逃れは出来ない。もう少しで全てが完成するということなので、やはり、フィリップなどに頼むべきではなかった。

しかし、地下で見つけたある書物。後は自分一人でも出来ることのみ。

「っ！止まりなさい！エテレイン」

今は捕まるわけにはいかない。窓を蹴破って外へと脱出する。

「バカな……」

資料室は三階。ヴァローナは窓から身を乗り出し、下を見る。しかし、エテレインは姿を消した。

エテレインは騎士のほず。一瞬で姿を消すなど、魔法による力が必要では出来ない。フィリップの残したもう一つのメッセージも真実だったとヴァローナは確信した。

『エテレイン・魔法騎士』

ヴァローナは資料室を後にして、職員たちを再び呼び掛ける。

第二十一の魔法「エテレインの目的」

エテレインの目的はただ一つ。クロの持つ黒い力。アレさえ手に入れば全てが思うままになる。しかし、職員の様が見えないことがエテレインを焦らせる。

すでにヴァローナの召集によって集まった職員は事の全てを聞かされている。つまり、エテレインを捕まえるために必死になっているということ。

エテレインは最後の作戦に出た。必要なのはクロと、クロを一番に心配し大切に思っている人。後者にはアテがある。フィリップの情報だが、やっとな役に立つ。向かった先はある教室。中からは生徒の音が聞こえる。まだ、職員が来ていないようだ。扉を開け、中へと入る。クラスの生徒全員が、なぜ？という疑問を抱いた顔をしている。当然だ。本来、学年の違う職員が教室に来るのは珍しい。生徒たちは何が始まるのか解らず、顔を見合わせていた。

「このクラスに、ローザという生徒はいるか？」

「はい」

小さな声で返事をするローザ。エテレインはローザに歩み寄りこ
う告げる。

「大事な話がある。一緒に職員室まで来て欲しい」

「……わかりました」

渋々といった感じだが、了承してくれた。後は、あの場所へと行くだけだ。

ロッソがクラスに戻ったとき、すでにエトレインはいなかった。しかし、今はそんなこと知る由もなく、ただ生徒の無事を確認しに来ただけだった。

「なんだか、今日はやけに先生が来るよなあ」

ある男子生徒のその言葉を聞き逃しはしなかった。

「おい！オレ以外にも誰か先生が来たのか！」

いきなり怒鳴られて男子生徒は少し腰を引きながらも質問に答えた。

「えっと、三年の最高責任者で……」

全部を思い出していない男子生徒だったが、最高責任者という単語だけでエトレインだと理解できる。

「エトレインだな。何をしに来たんだ？」

「ローザに話があるって言うてどこかに……」

ロッソは教室を飛び出した。エトレインの目的が何かは解らない。しかし、自分の生徒に被害を出されたのなら決して許すことは出来ない。

「おい、ロッソ。どうした？そんな血相を変えて」

廊下で同じく搜索をしているアスワドと合流した。

「アスワド先生、どうやら、ウチのクラスにエトレインが来ていたらしいです。そして、女子生徒を一人拉致したと思います」

「な、なんだと！まさか、クロか？」

「いえ、クロは謹慎処分ですから部屋にいる筈です」

「とにかく、二人で探すぞ！」

アスワドと共にロッソは再び、搜索を開始した。

第二十二の魔法「クロVSエトレイン」序」

ロツソの思いとは裏腹にクロは部屋にはいなかった。ある一枚の手紙を握り締めながら、手紙に記された場所を目指し、走っていた。幸か不幸か、走っている最中、職員と出会うことはなかった。

目的地は資料室。普段から利用したことのないクロでも中の異変に気付いた。血の匂い。崩された本棚。

「よく来てくれた、クロ」

クロの目の前にエトレインが立っていた。

「手紙のこと、本当なんだな？」

資料室の異変など聞かずにエトレインに話しかけた。クロの持っている手紙を出したのはエトレインだった。

「付いて来い」

それ以上を語らず、エトレインは地下に続く階段を下っていく。それに続くようにクロもまた、エトレインの後を追う。

暗く、じめじめとした空気。いるだけでも吐き気をするくらい気持ち悪い雰囲気。

「本当に、私の黒い力を取り除いてくれるのか？」

クロに届いた手紙の内容はこうだった。

『お前の持つ黒い力。それを取り除く方法が見つかった。資料室ま

で来い。 エテレイン」

この手紙を見て、クロは深く考えなかった。なぜ、エテレインがクロの力を知っているのか、なぜその力を取り除く術を知っているのか。グリズリーを殺したことがクロの心の中に焦りを生んだ。自分が自分でなくなる感覚。それが恐かった。暗闇にもたらされた小さな一筋の光に導かれるようにエテレインを頼った。

「確かに、お前の力を取り除く方法はある。だが、その前にある話をしてやる」

「ん？」

「昔、始祖と呼ばれる全ての魔物の頂点に立つ魔物が存在した。その魔物はこの世界、ヴェスパルを魔物のみの世界にするべく種族を殺戮していた。そして、ある一つの種族との対立で事件は起こった。その種族はほとんど殺されたが、その種族を殺そうとした始祖の魔物もまた、深く、致死に至る傷を負った。しかし、魔物も始祖と呼ばれるだけのことはあった。最後の力を振り絞り、生き残った一人の少女に自分の力ともいえる全てを強引に与えた」

話を聞くにつれ、次第にエテレインが何を言いたいのかが分かっていった。

「それって……まさか」

「クロ、お前のことだ。お前の種族、ヒュム族を殺した魔物がお前に取り憑いている。それが、黒い力の原因だ」

「なんで、そんなこと知ってるんだよ」

「この地下に置いてあった一つの書物に記されていた。そして、お前の力を取り除く方法も……」

エテレインが指を鳴らすと、それに反応するように辺りに火が灯った。今まで暗く見えなかったが見たことのある人を見つけた。

「なんでローザが？」

ローザは気を失っているようで、手足を縛られ倒れこんでいる。

「お前の黒い力の原動力、それは『憎悪』という不の感情。お前が憎悪に染まったとき、その力は発現する。そして、その時こそ、お前から力を取り除く唯一の時間だ。そのための、生贄だ」

「生贄だと？」

「そうだ、この子には悪いが、死んでもらう」

「ふざけるな！」

「仲の良い友人が死ねばお前の憎悪の感情は最高潮に達する。その時しか取り除くチャンスは無い」

「黙れ！黙れ！そんなことでしか消えない力なら消えなくなっただけだ！黙れ！」

「お前の力は、この友人だけでなくいずれ学園にも害になる！今のうちに取り除くべきだ。そのための犠牲と思え！」

エテレインは剣の切っ先をローザに近づける。切っ先がローザの胸元に届き、血が流れ落ちる。

「止める……」

クロの手が徐々に黒く染まる。指先から徐々に侵食していく黒。ただ、クロは今までは違うように感じた。

エテレインもクロの手が染まっているのに気付いた。もう一押し、そう思い、一気に剣を下ろそうと力を込める。

「うっ！」

エテレインの手に衝撃が走る。何かが直撃し、持っていた剣が飛ばされる。クロは人差し指を立て、目の前のエテレインに向けている。クロは顔だけを残し、全てが黒く染まっていた。

「エテレインだっけ………覚悟は出来てるんだろうな？」

エテレインは飛ばされた剣を取り、呪文を呟く。

「覚悟だと、それはオレの台詞だ！」

大気から生み出された真空波がクロに襲い掛かる。クロは右手を広げ、前に突き出した。エテレインの作り出した真空波はクロの右手に吸収されていった。

「な……」

全てを吸収し、手を握り、再び手を広げ、突き出す。クロの手から吸収した真空波が生み出される。真つ黒に染まった風となって。

「くっ！」

エトレインは真空波を喰らって、あることを感じた。自分の魔法と同じ素質であると。

第二十三の魔法「クロVSエテレイン」破」

体が軽い。気分もいい。あんなに嫌だった黒い力が私の体に、心に馴染んでいる。何でも出来るように思えた。もちろん、エテレインを倒すことも簡単に出来そうに思えてくる。

エテレインの繰り出す剣も、魔法も、難なく避けるクロ。次第に焦りを見せ、上級魔法を使い続けるエテレイン。

上級魔法は高威力のため、術後に隙が生じやすい。その隙はどのように魔法を極めても絶対に生まれる。

闘いに慣れていないクロに対して、エテレインは上級魔法を使い、一気に勝負をつけるつもりでいた。

しかし、クロはその隙を見逃さなかった。数m距離を取って魔法を回避していたクロは一気にエテレインの懐に飛び込む。そして、腕を振り上げ、掌底を顎に当てる。体が宙に浮くエテレイン。追うようにしてクロも飛び、追撃の蹴りをエテレインに喰らわす。エテレインは防御する間もなく後ろの壁に叩きつけられる。

軽い脳震盪を起こし、眩暈もする。エテレインはクロを素人だと油断した。そして、自分が学園で一番強いと自負する、その慢心によって起きた結果である。

「なぜだ……なぜ勝てない」

エテレインの読んだ書物には力を取り除く方法しか書かれていない。その方法はただ一つ。黒い力を持つ者を殺すこと。殺すことで黒い力は宿主を失い、元の宿主を殺した者を新たな宿主とする。黒い力に関してはこれしか書かれていなかった。こんなにも黒い力が強力だとは知らなかった。グリズリーを殺せる程度の力だと、甘く見ていた。

足にまでダメージが及んでいる。やっとの思いで立てたエテレイ

ン。

「くそ、貴様を殺して……全てが上手くいくのに……」

「どういうことだ？」

遠く離れたクロはエトレインの言葉を逃さなかった。そして、エトレインは異常なまでの聴覚の良さも黒い力のものと知っている。

「その力だ、その力を我が物にするためだ！」

クロの持つ黒い力は身体能力を急激に向上させるだけではなく、五感の神経も限界まで研ぎ澄ます。そして、全てを滅ぼす力。

「一体なぜ、この力にこだわる？」

「俺の真の目的……。オレはお前を殺す。そして、その力を手に入れる！」

「なんで、そんなことを……」

「お前にもわかるだろう！種族を皆殺しにされたお前なら！」

「どういう……ことだ」

「オレの種族もお前同様に始祖と呼ばれる魔物に殺された種族だ。名をアルマース族といった」

そこからエトレインは静かに自分のことを話し始めた。

「アルマース族も始祖と呼ばれる魔物に襲われた。しかし、お前達、ヒュム族を襲った魔物と違う魔物だ」

「どうしてわかる？」

「全てはここにあった一つの書物に記されていた。お前達ヒュム族はエトワールと呼ばれている魔物。アルマース族はメルオースと呼ばれる最古にして最強の魔物に、それぞれ襲われた。一瞬だった。一瞬で田畑が燃え、家が無くなり、人も死んだ。立ち向かおうとしたが傷一つ付けられず、アルマース族は全滅した」

クロは話を聞きながら、自分の事と照らし合わせていた。同じ境遇にいる人

「だが……」

不意に、声を震わすエテレイン。拳を握り締め悲しみにも怒りにも似た顔をしている。

「他の種族は……助けに来なかった！助けを呼んだにもかかわらず……無視をされた！今ものうのうと生きているプレミア族は……自分たちかわいさに同じ志を持つ種族を見殺しにしたのだ！」

「そんなの、俺たちだって同じだ！」

「違うっ！ヒュム族には助けが来たのだ。だからこそ、お前はこの都市にいる。覚えていないだろうが……オレがお前を助けたのだ」

「ウソ……」

「本当だ。もう、アルマース族と同じ目に会って欲しくなかったから、ただ結果は変わらなかった。お前以外を助けることが出来なかった」

一つ、呼吸を置き、冷静になるエテレイン。

「だからこそだ。お前の力はエトワールが残した最高の力だ。エトワールはお前に種族を殺して欲しいと願っている。お前さえ良ければ、二人で復讐をしよう」

「ふざけるな！この力をそんな……友達を殺すようなことに使いたくない！」

エテレインは高らかに笑った。まるでクロの言葉を嘲笑うかのよう
うに。

「友達だと……お前は所詮一人だ。種族の違いはいずれ友情を壊すことになる。お前には誰一人、本当の友達など出来ない！あそこにいる女も、クラスの奴らも全員、本心ではお前のことを恐がっているに違いない！」

「やめろ、やめろやめろやめろお」

クロは首を振り、エテレインの言葉を否定するように叫ぶ。エテレインは徐々に近づく。

「グリズリーを殺した奴などと、誰が友達になるか！」

その言葉を聞いたクロは静かに涙を流した。入学からずっと強がってきて、それでも切れない様に頑張って、友達も出来て、もう苦

労することも無いと思っていたのに……。全てが無駄になるようにして糸は切れた。

クロはその場に泣き崩れた。今まで、誰にも見せたことの無い涙。甲高い声で泣き叫ぶ。今までずっと女を捨ててきたクロ。独りになったときから、昔の自分は皆と一緒に死んだ、そう誓ってずっと男の格好までして頑張っていた。

第二十四の魔法「クロVSエトレイン」急ぐ」

「もう……やめて……」

泣き崩れているクロをエトレインは強引に起こす。

「協力しないのならお前を殺し、オレがその力を手に入れる」

手に力を込め、クロに魔法を放つ。すでにクロの体から黒い力は出ていなかった。地面を転がり、ローザの元まで飛ばされるクロ。力なく呻き声を上げるクロ。すぎるように、ローザに手を伸ばすクロはただの女の子だった。

「ローザ……」

頬に手を添える。ふと、ローザが目覚めます。そして、目の前にいるクロを見る。

「大丈夫！クロちゃん」

手足が縛られていることに気付かず、クロに近づく。足をつまずかせ、転倒するローザ。

「酷い……こんなに傷だらけになって……」

自分も傷ついているのにクロのことだけを気にしているローザ。それを見たクロはまた、大粒の涙を流した。

「どこか痛いのか？クロちゃん……」

「ちが…うの……」

嬉しかった。エテレインの言葉で少しでもローザのことや、サフイラのことを軽く見ていた自分が情けなかった。

ローザを、自分の大切な友達の存在を確かめる為にもクロはぎゅっとローザのことを抱きしめた。

「その女共々、死ね…」

エテレインは右手に渾身の力を込めて上級魔法を放つ。全てを切り裂く上級魔法「ヴァン・パルフェ」は大きな渦を巻き起こしクロとローザを包み込んだ。徐々に小さくなる渦の中で身を切られていくだろうクロをじつくりと待つエテレイン。

しかし、風が消えていく。エテレインの意に反して。そして、風の中から黒い力を纏ったクロが姿を現した。

「な……………」

クロは、笑っていた。先程の涙はとうに枯れていた。

「分かったんだ。アンタの言ったこと」

「なんだと？」

「憎む気持ち。それがこの力を生み出す。だけど、単に憎むだけじゃない。守りたいものがあるから、それを邪魔する奴を憎むんだ。自分勝手に人を憎むんじゃない。守りたいものを守る為に、私はこの力を使う」

クロは胸に手をあて、そつと目を閉じる。

「そつ、教えてくれたから……」

クロは風に包まれた刹那、以前心の奥から聞こえた声が、静かに語りかけてくれた。

憎め、守るために。

微かに聞こえたわけじゃない。しっかりと耳に響く声が心の奥から聞こえてきたのだった。

「もう一回言つぞ、覚悟は出来ているか？」

「ふざけるな！勝つのは俺だ！」

クロはエテレインが魔法を放つ前に、手を伸ばす。クロの手から黒い何かがエテレインに向かっていく。それは手の形をしており、エテレインを掴む。

「！なんだ、これは……」

クロが手を握ると、エテレインを掴んでいる手も同じようにエテレインを握る。その力はエテレインでも振りほどくことが出来なかった。

この、黒い力、全てを滅ぼす力。たとえ、それがヒトであろうと。クロの握った拳の先、すでにエテレインの姿は無かった。黒い力により、エテレインという存在自体がこの世界から消えた。

クロに罪悪感は無かった。エテレインは悪。そう言い聞かせていた。

第二十五の魔法「闘いが終わって〜その2〜」

アスワドとロッソが資料室の地下に駆けつけたとき、すでに闘いは終わっていた。

気絶しているローザ、立ち尽くしているクロ。明らかに様子がおかしい二人。

「どうした、何があった!」

クロに話しかけても反応が無い。

「おい!」

大きな声に気付いたのか、クロはアスワドのほうを振り向く。

「おっさん、どうして……」

「ここで何があった?」

クロは何から話せばいいのか分からなくて言葉を濁らせた。

「アスワド先生、とりあえず二人を連れてここから去りましょう」

ロッソの言葉通り、アスワドはローザを抱え、クロを引っ張り地下を後にした。

ロツソとアスワドは理事長室に二人を連れて行った。クロは落着きを取り戻し地下で起こったことを話した。

「やはり、エテレインがすべての原因ですか。それに……」

ヴァローナは地下でエテレインが見つけた本を読んだ。

「この本に書いてあることが本当ならば、クロさんにはやはりエトワールという魔物の力が宿っているんですね」

クロは黙っていた。この力が皆に知られてしまったら、もうこの学園に居られない。そう思い、言葉を飲み込んでいた。

「理事長、このことはどうするつもりですか？」

「そうですね、クロさんの力は明らかに現在の魔法とは異質のものですが、なんとかなるでしょう」

ヴァローナの安易な考えにロツソは反抗した。

「そんな悠長なものではないでしょう！ もっと深く考えたほうが」

「今はクロさんのことを考えてあげましょう。貴方も担任でしょう」

「ですが……」

ヴァローナはソファアに座っているクロに近づき、そつと頭を撫でた。

「辛かったです。誰にも話せずに気付いてあげられずゴメンな

さいね」

クロは唇を噛み締めながら大粒の涙を流した。

「クロちゃん」

はじめて見るクロの涙。その涙を見ただけでローザはクロがどれほど辛い思いをしていたのかを理解した。

「理事長、オレはやっぱり……」

「退学にする、とても言うつもりですか？大丈夫、私は貴方を全力で守りますよ。今は何も気にせずについて下さい」

「はい……ありがとうございます」

涙ながらクロはヴァローナに感謝した。

「でも、理事長。このことをどう報告するつもりですか？シユルヴイーヴルの方々にも迷惑を掛けたわけですから……他の生徒にも」

「そのことなら心配ありません。私にいい考えがあります」

「は？」

「どう難しく考えても魔物のことやエテレインのこと、クロさんの力のことなんて分かる筈不是吗から、今は出来ることだけをしましょう」

「はあ……」

ヴァローナの呑気とも言える考え方にすこしだけ不安を抱くロツソ。

「まあ、理事長を信じようかロツソ」

「はい」

「さあ、後のことは私に任せて。皆には追って連絡します。それと、ここでのことはこの五人だけの秘密です。分かりましたねローザさん」

「あ、はい」

「よろしい、では解散としましょう」

ヴァローナの言葉で四人は理事長室を後にした。

一人残った理事長室でヴァローナは再び本を開く。エテレインがなにをしようとしていたのか、それは決してシウルヴィーヴルにも話さない。

「エテレイン、貴方とはもっと解り合えたと思いますよ」

学園に来たあの頃、二人で目指したこと。いつか二人で最強の生徒を育てようと。

いつからか、クロがこの学園に来た頃、貴方がこの本を見つけた頃、歯車が狂ったのでしょうか。

エテレインの目的。黒い力を手に入れ、魔物の殲滅。そして、種族の頂点に立つという無謀にも思える目的。しかし、それを可能にするほど、クロの持つ力は恐ろしいもの。なぜ、エトワールがクロ

に力を宿したのか。なぜ、メルオースは全てを滅ぼしたのか。それは誰にも分からない。

ヴァローナは本を棚に入れ、椅子に腰掛ける。クロの力は危険な存在。自分一人でも彼女を育てていこう。彼女こそが二人の、あの頃の夢を叶えてくれる存在だから。

第二十六の魔法「クロの魔法」

次の日呼ばれたときはレクスも一緒にいた。この黒い力を見たときにレクスもいたからだろう。

「今日はクロさんの力の改善策を見つけました」

ヴァローナはすでにレクスに話はしているようだ。

「本当ですか？」

「ええ、それを今から実行に移します」

「しかし、もうすぐ朝礼の時間ですよ。早く行かなければ…」

「だからいいですよ。ロッソ先生、貴方にも協力してもらいますから」

「はあ…」

ロッソを含め、他の五人もヴァローナの言っている事が理解できなかった。ただ、策はあるとだけ言ってロッソとクロを残し、他の三人を朝礼へと急がせた。

朝礼は十日毎に学園の大広間で行われる。生徒全員が集合し、校長の長い話を聞くだけのどうでもいいモノだった。しかし、今日だけは雰囲気違った。

生徒の前に現れたのは校長ではなく理事長だった。

「皆さん、今日はとても嬉しい知らせがあります。なんと、新しい魔法を見つけた生徒が現れました！」

会場はどよめき、生徒だけではなく教員も慌しくしていた。しかし、誰よりも驚いていたのはクロだった。

「おい、ロツソ。もしかして……」

「お前の力をこういう形で公表するのだろう。まったく、理事長も人が悪い」

「大丈夫か？こんな簡単に言っ……」

「まあ、あの人も考えがあつてのことだろう」

「さあ、その素晴らしい生徒を拍手で迎えましょう！」

すっかり盛り上がった理事長に続いて生徒も拍手で迎える。

「行つて来い」

渋々、壇上にかかるクロ。クロが現れたことに皆、不審に思っていた。特に一年の生徒に騒ぎは起こっていた。

「なんで、あの落ちこぼれが？」

「なんで、あんな不良女が？」

皆、考えていることは一緒だった。クロのような生徒がなぜなのだ？まったく理解できていなかった。

「クロさんは、前の野外授業のとき、偶然魔法の元を見つけたそうです。では実際に見せてもらいましょうか」

「え、でも……」

「大丈夫ですよ」

ヴァローナは小言でクロに呟く。ロツソもヴァローナには考えがあると言っていた。ならそれに賭けてみよう。なんせ、この学園の理事長なのだから。

言われたとおり、黒い力を発動させた。手が黒く染まると、生徒はその黒い力を食い入るように見つめていた。

「なんだあれ？」

「どんな魔法だよ」

「なんか、今までの魔法と違うような」

「すごく特殊だよな」

生徒の声もすごかったが、私自身は恥ずかしくて堪らなかった。

「クロさんはこの魔法に自分の名前を込めて『クロ魔法』と名付けたようです」

「は？」

その一言はあっという間に生徒の声にかき消された。更にヒートアップする会場と同じように私の顔も真っ赤になった。

いきなり何を言い出すのか。自分で決めていないのに勝手に決められてしまった。しかも『クロ魔法』って…。
ちよつと良いかも。

「この力は、クロさんにしかない特別な力のようです。魔法学科の皆さんはクロさんのように自分だけの魔法を発見できるように、騎士学科の皆さんはクロさんに負けないように今以上に勉学に励むように」

そう言い残し、ヴァローナは壇上から降りた。クロもそれに続いて隠れるように壇上から降りた。

第二十七の魔法「休息」

教室に帰ったら一気に皆に囲まれた。

「ねえクロ。すごいじゃん」

「まだ一年生なのに、本当にすごいよ」

「やっぱりあの野外授業で遅れていたのってその魔法を見つけたからなの？」

「あれからずっと教室に居なかったのもそのせいなの？」

その言葉で皆が、私がグリズリーを殺したことを知らないことを知った。皆は知らないけど、もしかしてサフィラは知っているのではないだろうか。

今日一日ずっと質問攻めで疲れきった私は足早に部屋に戻った。部屋に戻るといきなり大きな音で迎えられた。

「おめでとう！クロ！」

部屋にはローザの他にサフィラ・トラゴス・レクスだけでなくマルグリットとイーリスもいた。全員がクラッカーを鳴らし、クロを祝福していた。

「すごいよ、クロ。まさかアンタが自分の魔法見つけるなんて」

笑顔で言ったサフィラ。何も聞いてこないということは知らないということだろう。素直な気持ちで

祝福をしてくれていた。ただ、ローザもレクスも本当のことを知っている。

「まったく、そんなすごい見つけるなら早く言ってくれよ」

トラゴスも今回は皮肉を言わずにいてくれた。でも二人に本当のことを言えないのは少し気が重かった。

「まあ今日は騒ごう。クロの見つけた新しい魔法を祝ってさ」

部屋には飲み物や菓子類がいっぱいあった。売店で売っているもののほとんどがこの部屋に揃っていた。

「じゃあ、乾杯！」

『乾杯！』

騒いだのは久しぶりだった。こんな風に仲の良い友達と一緒に騒げるなんて最初の頃は思ってもみなかった。

「ねえ、クロ。あの時ってさ」

騒いでいるなか、マルグリットが話しかけてきた。マルグリットは私のことを知っている可能性がある。グリズリーを殺したことは知らなくてもわたしの黒い力を見た可能性はある。マルグリットには話をしなければいけない。

部屋での歓迎も終わりサフィラもトラゴスもイーリスも自分の部屋に帰って行った。けど、レクスもマルグリットも部屋には残っていた。私のことを教えるためだった。

一通り、話し終わるとマルグリットは

「なんか、よく分からないけど。とりあえず黙っておけば良いんだよね？」

「まあ、俺たちもよく分かってないから、それで良いんじゃない？」

「じゃあ、この四人だけの秘密だね」

マルグリットは嬉しそうに言った。私もこんな風に秘密を共有できる仲間がいるのはちょっとだけ嬉しかった。

理事長室にはロツソとアスワドが集まっていた。

「どういうつもりですか？あんな風にクロのことを公表したら、どうなるか？」

「でも、これ以上何も分からないのならこれが最善の策だと思えますよ。クロの力を秘密にしたところでいずれ授業などで実戦が行われれば間違いなくクロは力を使ってしまうでしょう。なら、今分かっていることだけでも皆に認めさせることが大事でしょう」

「そうですね、私は賛成ですよ」

ロツソの言葉でアスワドも承諾した。

「もし何かあったときは頼みますよ二人とも」

「しかし、このことをシュルヴィーヴルに伝えるつもりですか？」

「もう済ませました。でも今回のエトレインのこととは全くの無関係ということで話は付けておきましたから、これ以上詮索される心配はありません。ゆっくりと考えて行きましょう。クロが卒業するまであと二年はありますから」

その言葉で話し合いは終了した。

いずれ時がくれば、考えなければならない。その時までクロには学園生活を楽しんでもらいたい。そう、ヴァローナは思っていた。

そして、何事もないようにクロは二年生へと進級した。

第二十七の魔法「休息」（後書き）

くあとがきく

ちよつとシリアスな展開になってしまったようにも見えますが、長かったクロの力に関するお話はこれにてひと段落ということにしました。

やっと自分の好きなように描けると思っていますのでこれから応援よろしく願います。

出来ればもっとクロには女の子らしくなって欲しいと思っています

^^

第二十八の魔法「新学期」

この日もユートピア学園はいつものように授業が行われていた。魔法学科も騎士学科も日々、シウルヴィーヴィルに入隊するために授業に真剣に取り組んでいた。

二年生へと進級を果たしたクロもまた、皆と同じように授業に出ていた。二年生になると魔法学科の生徒は自身の魔法を見つけ出し、独自の魔法や闘い方を探している。しかし、クロだけは違う。

この日の授業は実技。日々の訓練の成果を出し切るため、一対一の魔法による対決が行われていた。

「じゃあ、最後の一組だな。二人とも、前へ」

前に出る二人の生徒。クロとレクス。この日もクロの対戦相手はレクスだった。

「今日は勝たせてもらうよ、クロ」

クロと対等に闘えるのがクラスの中でレクスしかない。他の生徒とは実力の差が離れすぎているからである。

レクスも二年生に進級して初級の魔法をすでにマスターし、中級の魔法も少しばかり扱える程度に成長した。

クロの力、『クロ魔法』は単純に、黒い力を体外へと発現させ、意のままに操れるというもの。それは、触れたものを破壊することもクロ自身の身体能力を驚異的に向上させることも出来る。

その、圧倒的な能力の真の脅威は相手の魔法をも破壊することにある。

この力の前ではどんな魔術師であっても無力だった。以前、試しにロツソの放った上級の魔法であろうとも破壊することが出来た。

破壊とは、無に帰す事と同意であつた。そこに魔法がなかったかのようにクロ魔法は全ての魔法を消し飛ばす。

この日もいつも通り、決まっていたかのようにクロが勝った。

授業が終わり、クロたちは学食で夕飯を食べていた。

「まったく、クロの魔法は反則級ね。どうやって勝てばいいのよ」

愚痴を垂れたのは珍しくサフィラだった。以前、サフィラもクロと闘ったことがあるが、サフィラの完敗に終わった。

「確かに。今じゃレクスも勝てないからな」

トラゴスの言うとおり、レクスも最初の頃はクロに負け続けていたわけではない。一年生の終わりごろから始まった実技授業。負けるほうが多かったが、それでも少しは勝つことが出来た。しかし、今となつてはクロに勝つことが出来なくなっていた。

「クロの成長ぶりはすごいからね。僕ももっと努力しなければ」

「充分だつて。この時期に中級使えるの学年でもあんまりいないぞ？」

「だけど、クロには敵わないからね」

その言葉で会話が終わった。クロ自身も何も言えない。この力が魔物から授かったものだなんて到底言える筈がなかった。今でも皆

はクロが新しい魔法を見つけたと思っているから。

「そつえば、もうすぐだよね。新入生」

マルグリットが沈黙に耐え切れなかったのか、会話を切り出した。

「今年は何人、入学するんだろうな」

「どうせ、アンタは可愛い娘目当てでしょ」

再び、賑やかな雰囲気を訪れた。

「それにしても長いようで短い一年だったな」

「あつという間だったよね」

「これからあと二年で魔術師になるかが決まるのか…」

ユートピア学園では三年の最終科目として生徒一人だけで魔物を討伐するという授業が存在する。これはどんなに成績の悪い生徒でも受けなければならない卒業資格であり、この授業の成績でシユルヴィーヴルに入隊できるかが決まる。試験自体は受けるだけで卒業資格が与えられるが、途中で棄権したり、討伐が不可能になるとシユルヴィーヴルへの道が閉ざされてしまう。

ユートピア学園の生徒、魔法学科と騎士学科の生徒はこの最終科目を無事突破することを目指し、勉強をしている。

「クロなら、楽勝だろ」

「そんなことねえよ。俺だって、魔物とは闘ったことないんだし」

嘘だ。正確には本当だけど、自分ではない黒い力に支配された時の自分が闘ったのだ。全く記憶にないことだ。

「ま、今は新しく入る新入生に負けないように頑張らなきゃね」

しばらく談笑が続き、それぞれ部屋へと戻っていった。

第二十八の魔法「新学期」（後書き）

くあとがきく

今回は新学年を迎えたクロたちの話でした。前回までの話を一章だとすると今回の話から第二章が始まります。

いつ区切りになるのかはまだ決めていませんが、騎士学科の生徒やエトレインの代わりに入ってくる学科最高責任者なども登場させていく予定です。

相変わらず、下手な文章だと思いますが、それでもお気に入り登録しているヒトには感謝しています^^

第二十九の魔法「夜の出会い」

理事長室にはアスウドと騎士学科の新たな主任となったルーウェルがいた。

「どうですか？二年生の生徒たちは」

「魔法学科では、Bクラスの生徒達が他のクラスと比べて平均値が高いです。レクスとクロがいるため、他の生徒に良い刺激を与えています。とりわけ、サフィラ・トラゴス・ローザの三名が特に伸びしろを感じます」

「騎士学科はこのクラスが優れていると言うよりは一つ一つのクラスに将来性を感じる生徒がいますね。例えばですが、Dクラスのケーニツヒが現段階では一番優れています」

「そうですね、貴重な報告ありがとうございます。三週間後には新入生も入ってきますので、面白い行事ことを考えたのですが…」

「行事ですか？」

「ええ、両学科から貴方たち二人が推薦する生徒同士で一对一の決闘をするというものです。新入生には一年間でどれ程自分たちが成長するのか、という希望を持ってもらい、二年生には今自分たちの魔法及び剣術がどれほど通用するのかを確認するいい機会だと思ひまして」

「それはいいですね。推薦枠は何名ほどですか？」

アスワドは乗り気ではないが、ルーウェルが乗り気になってしまっていた。

「各学科五名ほどの生徒を推薦するというのでどうでしょうか？時期は、そうですね、新入生入学の次の日にでも開催しましょうか」

「ですが、理事長。そう簡単に決めてもいいのですか？授業の日程もありますし…」

「なんとかなるでしょう。それに二年生というのは不安を持つ時期でもありますし早々に将来への目標を定めるのにいい機会だと思いますが」

「しかし…」

「おやおや、アスワド先生。恐いのですか？」

「は？」

「この一年間で自分たちの受け持つ生徒がどれ程の実力を持っているのか確かめたほうがいいと思いますが。それとも、全敗するのが嫌なのですか？」

「何をバカな！私の生徒が負けるはずがないだろう！」

「なら、決まりですね。また詳しく決まったら教えてくださいね理事長」

すっかりルーウェルの口車に騙されたアスワドだった。しかし、アスワドにも勝算はある。

夜の闇は黒を一層際立てる。黒は闇に溶け込んでいるが、確実に拳に宿る。

その拳を遠く離れたグラスに繰り出す。拳から放たれた黒い力はグラスに命中し、粉々に破壊する。

クロは毎日、夜の特訓をするようになった。黒い力は遠く離れた場所まで飛ばすことが出来るようになっていた。距離を詰めることなく相手を倒す。

二年生に進級するまでにクロは、全身から黒い力を出せるようになり、遠くの物体まで破壊できるようになっていた。大切なものを守るため、クロも前に進んでいる。

この日はいつもと違う感じがしたからなのか、夜の闇に一人の男が現れた。

「誰だ？」

「散歩してたら、君を見かけてね」

その男は純白の制服に身を包み、腰に剣を携えていることから騎士学科の人間だと分かった。

魔法学科と騎士学科の生徒を区別するために制服のデザインは違う。魔法学科は黒い制服。騎士学科は白い制服。

「何してるの？」

鮮やかな白銀の髪。吸い込まれるような緋色の瞳をした男は唐突に話しかけてきた。

「別に、俺の勝手だ。それにアンタこそ、何してんの？」

「散歩って言っただろ。女の子なのに変な言葉を使うね」

「それも、俺の勝手だ。アンタに指図されることじゃないね」

「服も指定のものとは違うけど……」

「アンタ、何か用かよ？用がないなら……」

「クロ、でしょ？一度でいいからこんな風に話してみたかったんだ」

初対面なのにこんな風に話しかけてくる奴は初めてだ。そう、クロは思った。

「けっこう騎士の間でも有名だよ。学生なのに魔法を見つけるなんてすごいね」

「話したいなら、まず自己紹介しろよ。騎士学科の学生さん」

「騎士学科二年、Dクラスのケーニツヒ。よろしく」

ケーニツヒ。名前ぐらいは聞いたことがある。確か、マルグリットが話してくれた。レクスと同じプレミア族でレクスと同じように騎士学科で一二を争う実力者らしい。加えて二枚目。女子からの人気も高い。

マルグリットはこういった情報に詳しい。魔法・騎士問わずにカッコいい男には目がないのだろうか。

「クロはさ、何してたの？」

「だから、俺の勝手だつて……」

「魔法の特訓とか？熱心なんだね」

調子が狂う。こんな風に自分からぐいぐい話す奴はめずらしかつた。

「それに、なんで女子の制服着ないの？似合つと思うけど。その服に思い入れとかあるの？」

「あるから着てるんだよ。この服は兄の形見だから……」

「形見つて……」

そう言われた途端、自分がなんでこんなことを話してしまったのかと思った。初対面の男に。

「もう、いいだろ。私は帰るから」

「待つて、クロ」

「何だよ」

「また、明日も会いに来ていいかな」

「はあ？なんでだよ」

「なんでつて、君のことが気になっているからね」

そう言ってケーニツヒは笑った。その笑顔はいつも見ているトラゴスやレクスとは違うような、見たことない笑顔だった。

「じゃあ、おやすみ」

「…おやすみ」

気が付くとケーニツヒにつられて手を振っていた。

第三十の魔法「不良少女のイメチェン」

その日からクロの夜の特訓には必ずと言っていい程、ケーニツヒは来ていた。

「何でいつも来てるんだ、と言ったクロに対して
ヒマだからね、と言ってくる。」

クロもいつしか、ケーニツヒが来るのが当たり前になっていた。
そんなある日のこと。いつものように特訓も一段落ついて近くのベンチに腰を下ろしていたとき、ケーニツヒはクロの顔をじっと見つめていた。

「な、なんだよ。何か付いているのか？」

「クロはいつも帽子被っているけど、それもお兄さんの形見なの？」

「そうだよ」

そう言った途端、ケーニツヒはクロの帽子を取り上げた。クロの黒い髪が夜風に靡く。

「やっぱり、綺麗な髪だね。手入れとかしているの？」

「アンタに関係ないだろ、早く返せよ」

「髪型変えてみたら？例えばポニーテールとか」

やっぱり調子が狂うとクロは思った。こっちの話などお構いなしに話を進めてきている。

「だから、そんな俺の勝手だろ！」

ケーニツヒから帽子を取り上げ目深に被り、ベンチから立ち上がる。

「じゃあな」

クロはそのまま宿舎へと向かった。しかし少しだけ歩いて、クロはその歩いた分だけ戸惑っていた。

いつもなら、さよならとか声をかけてくるのに…。

振り返ってみると、ケーニツヒはこちらを向いていた。帰る素振りなど見せていなかった。まだ一緒にいたいと言う様に。

ケーニツヒは笑いながら手を振り

「また、明日ね」

そう言われたが、何も言い返さずクロは足を進めた。自分が思っていることと同じことをケーニツヒも思っていたと感じたから。

そう思うと恥ずかしくなって何も言えなかった。

こんな風に誰かと一緒にいたいと思ったことはなかったから、クロは少しだけ嬉しかった。

次の日、魔法学科のBクラスではちょっとした騒動が起きた。いつも、帽子を被って、髪に関して全く興味が無いように見えたクロが、この日だけは違った。

帽子は被っておらず、髪型もポニーテールに変えていた。

「どうしたの、何かあったの？」

「べ、別に！何もないけど…」

サフィラが言い寄ってきて、マルグリットが何を言っても本当のことは言えなかった。

ケーニツヒの言葉が気になったからとは。

この日一日、魔法学科二年生、特に男子生徒の間でクロの評判が上がった。

ある男子生徒は

「髪を上げたら、顔がよく見えて実は綺麗なことに気付いた」

と言い、とある男子生徒は

「可愛さと格好良さを兼ね備えた美しい顔立ちだ」

この日、クロを廊下で見かけた生徒、口で伝わった生徒もＢクラスにいるクロを一目見ようと集まっていた。

第三十の魔法「不良少女のイメチェン」（後書き）

くあきがきく

いつのまにか「剣と魔法と不良少女」も三十話目に突入してしまいました。長かったような短かったようなそんな気持ちです。

気が付けばお気に入り登録も10件に到達していました。初の二桁で嬉しい限りです^^

さて、物語の方ですが、三十話と致しましてクロにちょっとした変化を付けてみました。女を捨てていると言ったクロでしたが、ここに来てようやく女の子としての部分が目覚めはじめています。自分的にも何をしていいのやら分からないのが現状です。

とまあ、長話もここまでということ。

第三十一の魔法「女の勘？」（前書き）

クロが髪型を変えた。ただ、それだけで男子生徒の間では話題になっていた。

そんな中、仲の良い四人は今日のことを食堂で話していた。話題はもちろんクロについてだった。

第三十一の魔法「女の勘？」

食堂ではサフィラ、ローザ、マルグリット、イーリスの四人が机を囲んでいた。

「絶対何かあったのよ、クロの奴。でなきゃ髪型なんて変えないでしょ」

「でも、クロちゃんだって女の子だもん。髪型くらい変えるよ」

「そうそう、あんたの思っているほど特別なことなんてないって」

マルグリットはクロに何かあったと言い張るが、サフィラもローザも否定している。

「でもさ、ローザちゃんもサフィラちゃんも最初からクロちゃんと仲良かったよね？」

イーリスが二人に質問する。

「そうだけど」

「今までさ、クロちゃんが帽子脱いで髪型変えたことってあるの？」

「そういえば……」

サフィラもローザもその言葉を聞いて昔を思い出してみるのが、一度としてなかった。

「クロちゃんにとって帽子を脱ぐことって『絶対にありえない』ことなんだと思うの。じゃあ、なんで『絶対にありえない』ことを今日、クロちゃんがしたのか？それにはきつと何か原因があるのよ」

珍しく力説しているイーリス。しかし、サフィラもローザもイーリスの言っていることは的を得ていると思った。

「そういえば昨日…」

「何かあったの？」

「いつも夜、特訓しているけど、昨日部屋に戻ったときは機嫌が良かったって言うか」

「恋だ！」

いきなり大声を出したマルグリット。話の途中など関係なくマルグリットは話し始める。

「だって、イーリスの言っていることが正しいとしたら、クロに恋愛だって『絶対にありえない』ことなんじゃないの？」

「クロちゃんが、恋？」

言われてみてローザはある日のことを思い出す。

その日は、サフィラの机の中に一枚の手紙が入っていたことで始まった。その手紙の内容からラブレターだと判明し、三人で珍しく恋愛について話していたとき。

「クロちゃんってどんな男の子がタイプなの？」

と聞いたら。

「え…と、そのだな…」

ばつが悪いように口籠ったクロはそれ以上答えずに。

「そういえば今日、宿題とか出たか？」

まるで自分が話したくないように無理やり話を変えてしまった。
いつも勉強の話なんて絶対にしないクロなのに、なぜか恋愛の話を
したこの時だけ勉強の話をした。

サフィラも同じことを思い出していたらしい。

「そう言われればそうね。夜の特訓になにか鍵があるっぽいし」

「じゃあ、今日こっそり覗いて見ようよ。絶対に何かあるって」

マルグリットの意見には全員が賛成した。

第三十一の魔法「女の勘？」（後書き）

くあとがきく

題名に？があるように、自分でも果たしてサフィラたちの考えが正しいのか分からない現状です（汗）

まあ、それはさておき果たしてクロは本当に恋をしているのでしょうか？作者なんです、自分でもよく分かっていません。

あれ？なんでクロって恋愛話は嫌なんだっけ？

どんな心境でイメチェンさせたんだっけ？

記憶を思い出しながらも全然答えは出ません。

書いているうちに思い出すかもしれないし、書かないまま終わるかもしれないし、よく分からないけど…

頑張っていこうと思います！

では、また次回

第三十二の魔法「うずまく感情たち」

夜の特訓をしていて、黒い力の扱いにも慣れてきた。足に力を発動させ、一気にトップスピードまで速度を上げる。50mのタイムは3秒。確実に強くなっている自分に身震いさえ覚えた。

けど、少しだけ残念だった。いつもいるはずのケーニツヒが今日は来ていない。せつかく、髪型も変えたのに。

ベンチに腰を下ろし、ため息一つ。

「なに考えてんだ、私は…」

いつの間にか、ケーニツヒがここに来るのが私にとって当たり前になっていった。

「クロ、遅れてごめん」

息を切らして、ケーニツヒがやってきた。その姿を見て、走ってここまで来てくれたことに嬉しさを覚えた。

「別に、アンタを待っている訳ないだろ」

嘘だった。素直な気持ちを言えない自分を必死に隠して出た言葉。

「髪型、変えたんだね。やっぱり似合ってるよ」

「そう、ありがとう…」

じっと見つめてくるケーニツヒ。一回も顔は見れなかった。なんか恥ずかしくて。

「今日はもう終わったの？」

「ああ、そうだ」

「残念だな、じゃあもう帰ろうかな」

「あのだ、ケーニツヒ…」

「ん、何？」

「最近さ、授業のほうはどうなの？」

なぜか帰ろうと言ったケーニツヒを止めたかった。今日はまだ、ちよっとしか会えていないから。

ケーニツヒは質問に答えてくれた。普通に話しているはずなのに、なぜだか私の胸は熱かった。

クロが特訓を始めて少し経った頃。真相を確かめるため、サフィラたち四人は建物の影から様子を伺っていた。

クロの特訓を見ていて、全員言葉が無かった。一年のときまで魔法を何一つ覚えることも出来なかったクロが、今では自分の魔法を見つけて確実に成長している。

「なんか、嫌なもの見ちゃった気分ね」

マルグリットの言葉に誰も反応しない。三人とも同じ意見だから。

「私、自分が恥ずかしいかな」

サフィラは思った。いつの間にか、心のどこかで、クロのことを馬鹿にしていた。友達なのに、いつも一緒にいるはずなのに、なぜだか今日、この時だけはクロのことを尊敬していた。嫉妬していた自分を恥ずかしがるのと同時に。

「今日は、帰ろうか」

「そうだね……」

「！ちよつと待って、あれ……」

帰ろうとしたその時、マルグリットがクロに近づく一人の男に気付いた。予想通り、四人は再び隠れてクロの様子を伺った。

第三十二の魔法「うずまく感情たち」（後書き）

くあとがき

好きなことを書いていこうと思って絶対にも物語との関係を考えてしまうカルマです。

もっと甘酸っぱい、できれば中高生がしているような恋の話をしてみたかったのに、無理だった…。

もう少しで、書き溜めているのが少なくなりそうなので、急ピッチで書いています^^自分としてはそろそろクロの過去の話でも書いていこうと思っています！楽しみにしてくれたら嬉しいです

では

第三十三の魔法「クロとケーニツヒの約束」

こんなにドキドキしたのは何時以来かな。ケーニツヒと話していると、充実したような、嬉しい気持ちになる。

「クロ、聞してる？」

「え？何か言った？」

「だから、女子の制服も着てみたらって、絶対似合うよ」

「嫌だ。そもそも女子の制服なんて持ってねえ」

「支給されるはずだよ。アスワド先生に聞いてみたら」

「だから、着たくないって」

「じゃあ、もし、クロと僕が闘って僕が勝ったら、女子の制服を着てくれるかい？」

流石に、返事に困った。生徒間での私闘は禁止されている。それも違う学科の生徒となら尚更だ。だけど、授業で闘うことになるなんて滅多にないはずだ。モンストロと闘って以来、騎士学科との共通授業なんて一回もなかったから。

「いいけど、その代わりに俺が勝ったら一つだけ言う事聞いてもらうぞ」

「わかった。交渉成立だね」

そう言ってニツコリとケーニツヒは笑った。
この時、私はケーニツヒの笑顔の意味を本当に理解していなかった。

ケーニツヒが騎士学科の宿舎に戻ったとき、入り口に一人の男がいた。

「また、会いに行っていたのか？」

「まあね」

男の名はソーマ。長い黒髪を一つに結っている目つきの鋭い男。

「あんまり思い入れするな。でなければ闘うとき辛いぞ」

「心配要らないよ。それともソーマは僕が魔術師に情けを掛けると思っているのかい？」

「そうだな。あと一週間だが、調整は済んでいるのか？」

「僕はいつでも万全だ。調整の必要はないよ」

騎士の間では魔法学科との実演の行事のことは耳に入っている。ルーウェルが騎士学科の生徒に話したのだ。正式に行事は決定されていないが、理事長が発端の行事は絶対に行われる。

ルーウェルはすでに何人かの優秀な成績を誇る騎士の生徒に声を

かけている。もちろん、勝つつもりでいるからである。早く動けばそれだけ生徒自身のモチベーションも上がると予想していたためである。

アスワドはまだ魔法学科の生徒には話していない。一応正式に決まってから生徒には話そうと思っているらしい。

第三十四の魔法「クロとケーニツヒの約束」その2」

今朝起きたときにはローザは学校に向かっていた。

「今日当番だっけか？」

いつもなら私のことを待っていてくれるのに、その時は珍しいとは思わなかった。

ふと、ローザの使っている鏡台が目に入る。髪はいつものように下ろしているだけ。結おうとしたけど、やっぱり私にはこつちの方が生に合っている気がした。

教室に着くと、目線を感じる。ちっちゃな溜息も聞こえた気がした。

「今日はポニーテールじゃないんだ」

席に着くと、サフィラが話しかけてきた。

「別に、いいだろ。どんな髪にしようとか俺の勝手だろ」

そう言うと、サフィラはニヤニヤと笑いながらこつちを見ている。

「な、なんだよ。何か付いてるか？」

「昨日、見ちゃったんだ。アンタが男と会っているところ」

「な！」

「しかも、騎士学科のケーニツヒだなんて、アンタもけっこうやる

ねえ」

「ちがつ！別に…会ってた訳じゃ…」

「実際のところどうなの？クロちゃん」

いつの間にか反対側にはローザが迫っていた。

「そうよ、アンタ、レクス様にも気があるんじゃないの？」

前からはマルグリット。完全に囲まれた。確かに、いつも特訓しているときは会いたいとは思っていたけど、それが目的じゃないから。って言っても絶対信じちゃくれないだろうな。

「もうっ！んな訳ないだろ！アホらしい…」

私は教室から逃げるように出て行った。

「やっぱり、凶星なんじゃないの？」

「まあ、焦らずにゆっくりと行きましょ」

結局、この日は一回も授業を受けずに部屋に戻った。
夜になり、部屋に戻ってきたローザは一枚のプリントを私に渡した。

「何これ？」

「今度ね、騎士学科の生徒と実演の特別授業があるんだって。クロちゃんも選出されたんだよ」

「は？」

「クロちゃんと、レクスさんと、トラゴスくんがDクラスからは選ばれたんだ」

やけに誇らしげに言うてくるローザは自分のことのように嬉しそうだ。だけど、私は何かが引っかかっていた。

「そうそう、騎士学科の選出された生徒も書いてあるよ」

その言葉で私はある約束事を思い出した。ローザからプリントを貰い、騎士学科の生徒リストを見る。

案の定、そこには思っていた通りの名前があった。

『ケーニツヒ』

「アイツ、知ってたんじゃない？」

「アイツって？誰のこと？」

「いや、何でもねえよ」

あんな約束をしたなんてローザにも言えない。誰にだって言えないし言いたくない。

いつもなら来てくれるケーニツヒは今日の訓練にはとうとう来なくなつた。やっぱり、私の予想は当たっているのだろうか。選出された騎士学科の生徒同士ですでに特訓なんかをしているのかもしれない。

私も負けてられない。実演の授業なら経験はある。あの時と自分は比べ物にならないほど成長した。新しい力も、技も手に入れた。ヒトに使つたことはないけど、使えば必ず勝てる。たとえば、どんなにすごい魔術師でも、騎士でさえも。

クロの前方の、垣根に揃つて延びている木々のなか、一本だけがおかしかった。

まるで強力な圧力が掛かつたように真ん中の方が絞られていた。今にも倒れそうに。

第三十五の魔法「あの漢、再び！」

その日は、騎士学科でも正式に実演の行事が決定された。同じくして選出された生徒が正式に発表された。選出された生徒はルーウエル作戦により、事前に知っているため、各々ルーウエルの指示によりこの日まで個人で訓練をしていた。周りの生徒から見ればこの日が初めて集合したと思う。しかし、選出された生徒はここから団体での本格的な訓練が始まる。

放課後、ルーウエルの召集命令により選出された生徒が集まっていた。そのなかにはケーニツヒとソーマの姿があった。女子の生徒も選ばれていた。

騎士学科も魔法学科も男女同様に選ぶことは出来る。しかし、騎士は重い武器を扱い、体の至るところに鉄の鎧を身に付ける。それだけ女子の生徒は選ぶことを躊躇うことが多い。

それでも毎年、十数人の女子生徒が騎士学科を選ぶ。単に、騎士に思い入れがある娘も多いが、暗い過去を持つ生徒もいる。

メルキュールもその中の一人。女子が実演の授業に選出されるのは珍しいが、ケーニツヒもメルキュールのことは一目置いている。

「全員集合したか？」

「アヴァンサルが来ていません」

「また、アイツか…。五分だけ待ってこなければ変えるか…」

その言葉に異議を唱える生徒がいた。ドッジーナだ。

「ルーウエルさんよお、アヴァンサルには俺が伝えとくから変えねえでくれないか？」

アヴァンサルと同じクラスであるドッジーナは頭を剃っており、顔に刺青を彫っている、見るからに強面の男子生徒。カノン族であるアヴァンサルは体も他の生徒より一回り大きい。

「私も本気で変えようとは思っていない。ただ、自覚して欲しいだけだ。ドッジーナ、しっかりと伝えておけ」

ウス、と生返事を返すドッジーナ。

「メルキュールも選ばれたんだね。おめでとう」

ケーニツヒがメルキュールに近づく。金色の綺麗な髪を腰まで伸ばし、

「当然だ。私よりも強い生徒なんてここにいるお前たち以外にはありえない」

「相変わらず強気だね。君のように強くて可愛い娘は珍しいよ」

「フン、アンタのお世辞なら聞き飽きた。それに、狙ってる娘がいるんだろ、魔法学科にさ。そっちに精出しな」

「相変わらず、君は鋭いね」

「訓練もしないで逢引してれば嫌でも分かるさ」

「お喋りはそれまでにしておうか。これから新入生が入学するまで一週間。その次の日には本番だ。この実演は特別、成績に関わると言うものではない。表向きは新入生に二年間の成長の過程を見

せると言うことだ。しかし、魔法よりも剣の方が優れていることを示すためにこの実演の行うと私は解釈している。いいか！ここでしっかりと魔法よりも騎士が強いことを見せ付けるのだ。ケーニツヒ」

「はい」

「首席のお前がリーダーとして皆をまとめてくれ。私からは以上だ。健闘を祈る」

ルーウェルはそう言っ て部屋を後にしようとした時、部屋の扉が乱暴に開かれる。大きな音を立てて開いた扉の先を四人は見つめる。扉の前にはモンスター口が立っていた。その顔は一見、穏やかに見えるが、内出る怒りを抑えられないでいるようにも見えた。

「ルーウェル先生。何で俺が選ばれなかったんだ」

第三十六の魔法「揉め事」

今にも怒り狂いそうになるのを必死で抑えてルーウェルに詰め寄った。

一年の初めに行われた実演では魔法学科からクロ。騎士学科からはモンスターが選ばれていた。そして、今回。クロは再び選ばれたが、モンスターは選ばれなかった。

ルーウェルは怯えることも、威圧されることもなく冷静に話し始めた。

「お前を選んだのはフィリップだ。フィリップがなぜお前を選んだのか私には理解できなかった。だから、お前を外した」

「ふざけるな！俺がコイツらに劣っているとでも言うのか！」

「そうだ」

「なぜだ！なぜ女を選んで俺を選ばない！」

その言葉を聞いたアヴァンサルは大声で笑った。腹を抱え、モンスターを馬鹿にするように。

「貴様っ！何がおかしい！」

「お前バカか？ザコは消えろってルーウェルさんも言ってる。さっさと消えろ」

「なんだとっ！」

「なんだよ、やろうつてのか？ああ！」

モンストロに近づこうとするアヴァンサルをメルキュールはそつと止めた。

「アヴァンサル、どうやらコイツは私に喧嘩を売っているようだ。女だ男だとか差別している男は大嫌いだからね」

その言葉に納得したのかアヴァンサルはわかったよ、と一言言つて後ろに下がる。

その刹那、メルキュールはアヴァンサルの耳元で

「氣遣つてくれてありがとう」

と囁いた。アヴァンサルとメルキュール。種族は違うが、昔から仲が良かった。子供の頃は体も弱かったメルキュール。アヴァンサルは不器用な自分なりにメルキュールを氣遣つたつもりでもメルキュールにはお見通しだった。

「アンタ確か、モンストロだっけ？要は私がアンタより強かったらアンタも納得できるだろ？」

「そうだ！貴様のような女がなぜ選ばれてるんだ！」

「だったら、闘ってみるか？」

「ああ。いいだろう」

「先生も許可してくれますよね？」

「許そう。それでモンスターが納得するんだからな」

ルーウェルは拒否しなかった。自分の人選に絶対的な自信があったからだ。

第三十七の魔法「加速する騎士の女王」

騎士学科の授業で使われている訓練場。モンストロは着々と防具をつけ、闘いの準備をする。しかし、メルキユールは一向に防具をつける素振りを見せない。

「メルキユール、早く付けろ」

「先生さ、あんな奴に防具つける意味なんてあるの？」

「なんだと？」

「あら、聞こえた？言っただ通りよ、アンタなんかに傷一つ付けられずに勝てるわよ」

「面白い。なら俺も防具はつけないで闘ってやるよ」

メルキユールの挑発に乗り、防具を外すモンストロ。

「いいな、戦闘不能になるか、気絶及び失神した方の負けとする。武器も個々の判断で使用を任せる。依存はないな？」

両者は頷く。モンストロは両手で持つ大きな剣を使用し、メルキユールは細身の剣を使う。

騎士学科で武器に規制はない。生徒自身が自分で使いたいと思う武器を入学時に選ぶことになっている。すでに使用が許可されている武器もあれば、生徒自身のアイデアによる独自の武器も認められている。生徒の戦闘スタイルに合わせて武器を選べるのが騎士学科の特色とも言える。

「アンタさ、力さえあれば強いって思ってるでしょ？」

「そうだが？それがどうした？」

「アンタみたいに考えて女をバカにする奴も私は大嫌いなんでね。本気でいくから」

「はじめっ！」

ルーウェルが言い切った瞬間、メルキュールは超スピードでモンストロの懐に入り込む。一瞬の虚を突かれたモンストロは剣も構えていなかった。モンストロの体に突きを数発打ち込み、横をすり抜ける。

「くっ！こんなもので！」

モンストロは振り返り、反撃に出ようとするが、その場で膝を付いてしまう。突きを数発くらい体に激痛が襲っている。しかし、血は出ていない。突きを食らった場所が紫色に変色しているだけだった。

騎士学科では常に、自分の武器を使って授業を行っている。普通に言えば、人を殺めてしまう凶器であるが、騎士学科で使用及び許可が下りた武器に全て魔法によるプロテクトが施されている。

そのため、人に対して使用しても実際に切れることはなく、モンストロのように攻撃があたった場所は変色してしまい痛みが走るようになっていく。

「どうしたの？自慢の力は」

「ちっ」

モンストロは強引に立ち上がる。未だ足は震えている。剣だけはしっかりと握っている。

「腕っ節だけなの？情けない」

「うるさい！」

メルキユールに向かって一直線に走っていくモンストロ。剣を振り下ろすもメルキユールには当たらない。挑発するかのように、余裕を見せるように笑顔を作っている。

次第に剣を振るモンストロも息遣いが荒くなり攻撃を仕掛ける回数も少なくなっている。

「もう終わり？」

「黙れ、黙れええっ！」

再び切りかかろうとするモンストロを嘲笑うかのように接近するメルキユール。先程突きを打った場所にもう一度、寸分の狂いもなく攻撃する。攻撃を止めることなく、背後に回り更に突きを繰り出す。

モンストロが振り返ろうとすれば、すぐに背後に回り突きを当てる。それを何度も何度も繰り返した。しかし、モンストロの体に傷口が増えることはなかった。モンストロの前面も背面も何でも行き来して攻撃しているメルキユールだが、すべて同じ場所に攻撃を当てている。

『ルーン』

メルキュールが武器の申請の際に付けた名前。

メルキュールの最大の長所は類稀なるスピードにある。細身で高い身長。長い手足。その体の特性を最大限に生かせる突きに特化した武器。

もはや剣を構えることが出来ないほど体力を消耗し、負傷しているモンスター口。

「そろそろ終わりにするよ」

メルキュールは剣を構え、再びモンスター口の周りを超スピードで走り、モンスター口を翻弄する。

右を向いても、左を向いてもメルキュールを捉えることが出来ないモンスター口。目の前に現れたと思った瞬間、金属音が辺りに響き渡る。何回も金属音は鳴り響いた。

メルキュールはモンスター口の体を狙っているのではなく剣を狙っていた。何度も何度も執拗に剣を狙うメルキュール。防戦一方のモンスター口。

突然、メルキュールは距離を取った。

「どうした？もう疲れたのか！」

「アンタこそ、いい加減諦めたら？勝てるわけないじゃん」

その言葉で完全に頭に血が上ったモンスター口は最後の力を振り絞り、剣を構えメルキュールに向かって走る。

まるでこの時を待っていたかのようにメルキュールは再度、モンスター口の横に超スピードで迫る。

「アンタの剣もろとも、下らない自信を砕いてあげる」

モンストロの剣目掛けて最大速の突きを繰り出す。

度重なる剣を狙った攻撃により、モンストロの剣は真つ二つに折れた。

騎士学科の授業で最も気を付けなければならないのは武器の管理である。普段から授業で自信の武器を使い授業を受ける。日々の授業のなかで消耗品である武器の管理・手入れは必然的にしなければならない。

騎士同士の闘いでは注意が必要である。武器同士による攻防や鎧迫り合いなどは直接武器を傷めることになる。

しかし、モンストロも騎士学科の生徒。この闘いの前にはしっかりと武器の手入れはしていた。だが、メルキールの異常なまでに剣を狙った攻撃。

先程の攻撃のなかで起こった金属音の正体はメルキールの剣を狙った攻撃。これも一点だけを集中的に狙っていた。

たった一回の闘いで相手の剣を壊す破壊力。一点を狙うことの出来る剣さばき。それらを確実にするための超スピードを使える身のこなし。それら全てがメルキールの最大の能力と言える。

第三十七の魔法「加速する騎士の女王」（後書き）

この文を読んでいると今でもちょっとおかしいな？と思うところが魔法によるプロテクトなんです、現存する魔法は地・水・火・風となっています。

それはあくまでも戦闘用に使用できる魔法が四種類だけであってこういった、防衛的な魔法も存在しているということをお願いします。

何か後付みたいで嫌な気持ちですが……。

そして、前の話でついに10,000アクセスを突破しました！！自分としてもこの作品でこんなに読んでくれる人がいるのにビックリです。

お気に入り登録している人も、何度も言うようですが本当にありがとうございます^^

これからも楽しんで読んでください。

第三十八の魔法「女王の願い」

剣を砕かれ、その場に力なく腰を下ろすモンスター。

「もはや、武器を失ったお前に勝ち目はない。この勝負、メルキユールの勝利だな」

武器を失うということは、騎士学科の授業に参加できないことを意味する。武器の再申請は最低でも一ヶ月近く必要とするため、事実上留年が決定する。倒れこむモンスターに構うことなく、メルキユールたちは訓練場を後にした。

廊下を歩いているメルキユールとケーニツヒ。

「いつまで付いてくるんだい？もうすぐ男子寮に着いちゃうよ」

「ちょっとさ、お願いがあるんだけど…」

「何？」

「今度の魔法学科との実演で、クロと闘うの私に譲ってくれないかな？」

「どうして？」

「さつき先生に見せてもらった魔法学科のメンバーにレクスがいるんだよ。アイツの前でかつこ悪いところ見せたくないからさ」

「でもなあ、クロとは約束してるし…」

「レクスは…どうもクロのことが気になつてゐたんだ。私から連絡しても、久々にあつても上の空つて感じて…だから…」

それ以上、メルキユールは言わなかった。目が潤んでいるところを見ればこれ以上言つと、泣いてしまふのだから。

自分の許婚が他の女のことを気にしているなんて誰だつて嫌に決まっている。

「わかつたよ。先生には僕から話しておくよ」

メルキユールは礼を言い、女子寮へと戻つていった。男子寮に向けていた足をルーウエルの部屋へと向ける。

「何か用か？ケーニツヒ」

「実演のことで、お願いがあつて参りました」

「何だ？」

「魔法学科のクロとメルキユールを闘わせて欲しいのです。本人の希望でして」

「ちょうどその順番を決めていたところだ。で、お前はレクスとの対戦でいいか？」

「大丈夫です。ですが、もう一つお願いがあります」

「言ってみろ」

「対戦の形式ですが、勝ち抜け戦にしてもらえないでしょうか？」

「なぜだ？」

「ある生徒と約束事がありまして。その約束を守るため」

ルーウェルは少し考え、ケーニツヒに告げる。

「まあ、それぐらいの我侭なら許そう。あちらの担当にも話をつけておく」

「ありがとうございます」

「お前だから、許すのだ。しかし、これ以上の我侭は流石に許さない」

「分かりました。では」

教師に対して、これほどまで自分の我を通せるほど、ケーニツヒの実力は高い。選ばれた五人のなかでも、他の四人とは桁違いの成績を誇っている。それゆえに許される我侭なのである。

第三十九の魔法「トラゴスとバシリス」

魔法学科でも選出された生徒がアスワドにより集められていた。

「トラゴスが選ばれるなんて、珍しい」

「まあ……な」

トラゴスの様子がいつもと違った。そわそわしている。まるで何かを警戒しているように。

今集まっているのは私とトラゴス、レクスの三人だけ。後の二人はまだ来ていない。

「なあ、おっさん。後の二人ってどんな奴なんだ？」

「お前みたいに先生のことをおっさん呼ばわりしない奴だよ」

トラゴスが皮肉を言わないと思ったたらおっさんが言ってきた。まったく、男って皮肉が好きなのか？

「遅れました」

入ってきた生徒は男女一人ずつ。二人ともトラゴスと同じカノン族。女子生徒のほうは猫のような大きな目と耳が特徴的な、おとなしそうな感じ。男子生徒のほうは、バンダナで頭を覆っており、額近くまで隠している。口元には牙が見えており、近寄りがたい雰囲気を出している。

「遅いぞ、まったく」

「すみません」

「二人とも、自己紹介してくれるか？」

「はい、Aクラスのバシリスです」

「Fクラスのアルジエントだ」

「お前達も、自己紹介してくれ」

「Cクラスのレクスです。二人ともよろしく」

「同じくクロだ。よろしく」

私が終わり、次はトラゴスの番だが、なぜか自己紹介しようとしなかった。

「どうした、トラゴス。お前も自己紹介せんか」

アスワドのおっさんにそう言われても横を向いているだけだった。やっぱり様子がおかしい。

「こんな奴の自己紹介なんていらねえよ」

トラゴスを挑発するように、アルジエントは言った。

「何でトラゴスがここに呼ばれてるんだよ、目障りだから消えな」

「お前に言われたくねえよ。俺より弱い奴こそ何でいるんだ？」

「なんだと」

トラゴスに殴りかかろうとするアルジェントをバシリスが割って入って止めた。

「やめなよ、二人とも。久しぶりに会ったんだから」

「チッ」

罰が悪そうに後ろを向くアルジェント。バシリスはトラゴスのほうを向き。ニッコリと笑みを浮かべた。

「本当に久しぶりね」

「そうか？」

「そうよ、私は会いたかったのに、全然連絡くれないんだもの」

「悪かったよ、俺も忙しくてね……」

二人の会話を聞く限りどうも顔なじみのようだ。

「なあ、レクス。あの二人って知り合いなのか？」

「クロは知らないの？あの二人、許婚だよ」

「え！」

「うるさいぞクロ。その二人も私語は止めてもらおうか」

トラゴスに許嫁がいたなんて、全く知らなかった。

「じゃあさ、付き合っているのか？」

まあ、許嫁なんだから当たり前かもしれないが確認のため、レクスに小声で話しかける。

「いや…なんていうかさ…」

「なんだ、付き合っていないのか？」

「彼女の方は付き合ってるつもりらしいけど、トラゴスが…」

「どういうこと？」

「ちょっと嫌ってるらしいんだよ。バシリスのこと」

「へえ」

意外だった。男女関係なく誰とでも仲の良いトラゴスに嫌いな人がいたなんて。さっきまで様子がおかしかったのも、あのバシリスって女が原因なんだろうか？

「本番は八日後。入学式の次の日だ。それまでは各自しっかりと訓練などしておくことだ。なお、授業の方は通常通りに行くから時間は自分たちで見つけることだ」

「なんで？別に授業に出なくていいじゃん。本番まで時間ないんだし」

クロの意見をもつともだと言うように他の四人も頷く。

「この実演に選ばれたからと言って、お前たちを特別扱いはいしない。現在の評価が高いから選ばれているだけだ。今回の実演は特別、成績に関わるというわけではない。新入生に二年間のうちでどれだけ成長できるかを見せるためのものだ」

一同は納得したらしく、皆「ハイ」とだけ答えた。

「わかったなら解散だ」

教室を後にすると、トラゴスとバシリスが何かを話していた。流石に聞いてはいけないと思い、その場を離れた。

「クロ、一緒に帰ろうぜ」

離れようとした矢先、トラゴスが気付いたらしく私に話しかけてきた。

まるで、バシリスから逃げるように腕を引っ張られ強引にその場を後にする。

「痛いって、離せ！」

「何だよ、だらしねえな」

いつものように皮肉を言っているつもりだろうか。やっぱり様子がおかしい。

「アンタさ、なんか変だぞ」

「どこがだよ？」

第四十の魔法「愛の無い許婚？」

「あのバシリスって娘と会ってたとき、その前からなんか変だ…」

「お前には関係ねえよ」

「だけど、あの娘が可哀相だぞ」

「だから、関係ないって言ってるだろ」

そう言ってトラゴスは帰っていった。

「何だよ、アイツ…」

「ねえ？アナタ」

不意に後ろから声をかけられ振り向いた。そこにはバシリスが立っていた。

「な、なんだよ…」

「Dクラスのクロなんだよね？あの…自分だけの魔法を見つけている…」

「そうだけど」

「やっぱりっ！私、アナタのファンなの！ねえ、握手して！」

「いいけど」

すごい勢いで手を握られブンブン振り回すバシリス。屈託のない笑顔を見ると第一印象とは違う感じがした。耳を動かしていると本当の猫のように見えるのでかわいかった。

「本当にすごいよね。私と同年なのに独自の魔法を見つけるなんて」

「そう…かなあ」

こんなにストレートに褒められたのは初めてだった。

「私もがんばらなきゃ。がんばってトラちゃんに認めてもらわないと」

「トラ…ちゃん？」

「トラゴスのことだよ。同じクラスでしょ」

「ああ」

トラゴスだからトラちゃん。すごく安易なあだ名の付け方だな。ちよつとだけ笑みがこぼれる。

「知ってる？私とトラちゃん、許婚同士なんだよ」

「へえ…」

あまりにも簡単に言ってくるバシリスにびっくりしすぎて、知ってるよなんて言えなかった。

「私、トラちゃんのこと大好きなの。だから、いつも一緒に居たいのに……」

少し、言葉を濁されるバシリス。そういえばレクスが「トラゴスはバシリスのことを嫌っている」って言ってた。

なんで、こんなにも一途に想っている女の子を嫌うのか、私には理解できなかった。

「アルっちと私とトラちゃんは昔から幼馴染でね、その時から許婚だって決まっていたの。昔は仲が良かったのに……なんで……」

少しだけ涙声で自分のことを話すバシリス。次第に、トラゴスに對して怒りがこみ上げてきた。

「ゴメンね。なんか愚痴っちゃって…変だよね…」

「そんなことないよ」

「ありがとう……」

そう言って帰っていくバシリスを見て、私は拳を握り締めた。その拳を緩めることなく一人の男に向けて足を進めた。

乱暴に、ドアを蹴る。ノブが壊れても構わなかった。今はアイツを殴ることが先決だ。

「どうしたの？クロ」

レクスがいたけど構わない。

「なんだよ、うるさいな」

見つけた。私は握った拳をソイツの頬めがけて思い切り殴る。勢いよく殴られたソイツは床に豪快に倒れこむ。

「いつ…てえなっ！なにすんだ！」

突っかかってくるソイツの胸倉を掴む。

「何で、バシリスを悲しませるんだ！アンタ、許婚じゃないのかよ！」

トラゴスは胸倉を掴んでいる手を握り、退ける。

「てめえに何がわかる！」

トラゴスも同様にクロの頬を殴る。

「わかんねえよ！わかんねえから怒ってんだ！」

クロも反撃し、トラゴスの腹を蹴る。

「なら関わるんじゃないやねえ！俺とアイツの問題だ！」

「バシリスが話してくれたんだ！アンタが好きだって！なのにアンタは！」

殴り合いながらもお互いの主張をぶつける。レクスはそれを見つめるだけだった。

第四十一の魔法「許婚の真の意味」

夜、レクスはトラゴスの手当てをしていた。

「いてっ、もっと優しくしてくれよ」

「男だろ。我慢しろ」

手当てを終え、救急箱をしまうレクス。

「まったく、お前が余計なことを話すから」

「だって、本当のことだろ」

「だからってクロに話すことないだろ…」

レクスは率直に今思っていることを聞いてみた。

「なんで、そんなに隠そうとするんだ。バシリスはいいい娘じゃないか」

「別に、隠している訳じゃない」

「じゃあ、何であんなに突っかかるんだ」

「アイツは、純粹すぎる。それが俺にとって苦になってる…」

「どういふこと？」

「俺たち、カノン族は成人を迎えると『成人の義』を受けることになってる。それを受けることで一人前のカノン族と認められる」

「それが、何か関係あるの？」

「オレの一族はカノン族の中でも最古の歴史を持つ、頂点に立っている一族らしくて、俺もその事を昔から教えられてきた。バシリスも同じように昔から続く一族なんだ」

「というと、トラゴスって王族？」

「まあな……」

そのことに今は驚くことをせずに、トラゴスの話を聞いた。

「成人の義って言うっても、特別なことをすることはないんだ。だけど、俺の一族は違った。カノン族の頂点に君臨し続けるために特別な儀式を行うらしい」

「特別な儀式？」

「半獣半人が特色のカノン族だけど、完全に人の姿になることが出来るんだ」

「え？」

「今ある耳や尻尾が完全に無くなってプレミア族のような外見になる。外見だけでなく、能力的にもプレミア族に引けを取らなくなるらしい。俺の父も、プレミア族と同じ姿をしているから……」

「それが、カノン族の頂点に立つために必要なこと？」

「その通り。ただし、その儀式を行うのには人柱が必要なんだ」

「人柱？」

「つまり、生贄だ。誰かの命と引き換えにその儀式を成功させる」

「まさか、トラゴスの儀式の人柱って……」

「本当に察しがいいなお前は……。そうだよ、俺の人柱はバシリスだ。俺の母親は幼いときに死んだ。成人になる前に結婚し、子を生む。そして、儀式を行う。父は母を生贄に儀式を成功させたんだ。それが、カノン族の、王族である一族の代々の決まりごと」

「それじゃあ、バシリスはこのことを……」

「……知らない」

「え！」

「このことを知るのには、俺と、父と、バシリスの両親だけだ」

「そんな……」

「だから、バシリスの純粋さは俺を苦しめる。俺だってバシリスが好きだ。だけど、何も知らないアイツと居ると、オレは罪の意識で潰れてしまいそうになるんだ……」

トラゴスは本当にバシリスのことを愛している。しかし、二人が

許婚で、いずれバシリスが死ぬ運命にあると本人以外が知っているならばそれを隠して付き合うことほど、辛いものは無い。

第四十二の魔法「前の夜」

バシリスは月を眺めていた。昔から、月を見るのが好きだった。

「バシリス、まだ寝てなかったのか？」

「アルジエント。ちょっと考え事」

二人はちょうど、男子館と女子館の間の広場にいた。

「また、トラゴスのことか？」

「うん」

「許婚だからって無理に付き合うこと無いだろ？その…オレは…」

アルジエントが言おうとすることを知っているようにバシリスは振り返ってこう言った。

「ありがとう。でもトラちゃんが好きだから…」

「そうか…」

「それに私、トラちゃんのためなら」

「何か言ったか？」

「ううん、別に」

アルジエントもまた、バシリスのことが好きだった。昔からの馴染みで、優しく屈託の無い笑顔のバシリスにいつの間にか恋心を抱くようになっていた。しかし、バシリスとトラゴスは許婚。それを知り、身を引くことも考えた。だが、トラゴスの態度が許せなかった。慕っているバシリスを無下に扱っているような態度が親友として許せなかった。

それぞれの想いを巡らせながら魔法学科・騎士学科の選ばれた生徒は静かに決闘のときを待つ。

第四十三の魔法「開始直前の二つの学科」

無事に入學式も終了したこの日。学園には希望に満ち溢れた新入生たちがシュルヴィーヴルを目指し、学園の門を叩いた。

その次の日。ついに合同実演の時間がやってきた。クロたちは空き教室に集合していた。

「いいか、この実演では日ごろの授業や自身の特訓の成果を見せるいい機会だ。存分に闘ってくれ。それと…」

「どうしたおっさん？何か言うことでもあんのか？」

「その、だな…前に言い忘れたことだが、今回は勝ち抜き戦だ」

「は？」

「その、勝ったら続けてもう一回闘うのか？」

「そついうことだ」

「ふざけるなっ！」

「そうですね、勝ち抜きなんてまるでゲームだ」

「事前に言っておいて下さいよ先生」

「まったく、モチベーションの下がること言ってくれて」

「本当に」

「ええいつ！うるさい！つべこべ言わずにさっさと行け！」

いきなりの怒声に驚き、五人は急いで会場へと向かう。向かう途中、レクスの肩を数回叩く。

「久しぶりに聞いたな、おっさんの怒鳴り声」

「そういえば…」

「あんな風に怒鳴ってる方が似合ってるってよな」

「確かに」

すこしだけ緊張がほぐれた。いい感じで今日は闘えそうだ。一方の騎士学科サイドでは。

「今日、ついに騎士が優位に立つときが来たのだ！いいか、特訓の成果を存分に見せ付けてやれ！ドッジナ、お前一人で五人抜きをする勢いで闘え！」

「言われなくてもそのつもりだ。それにつもりじゃねえよ、絶対だ」

「頼もしいな。よし、もうすぐ時間だ。行つて来い、誇り高き騎士たちよ」

ケーニツヒはメルキュールに近づき耳元で囁く。

「やっぱりクロは四番目だ。君も四人目。あっちの大將はレクスだから、上手くいけばレクスとも闘えるね」

「あんたのことだ。どうせ、私が負けると思ってるんだろ？」

「そう見える？」

「やけに嬉しそうだからね。手に取るように分かるよ」

「君には敵わないな」

「お互い様だ」

話している最中、ケーニツヒとメルキュールは後ろから肩を組まれる。

「何？相談事？つれないなあ、俺も仲間に入れてよ」

話しかけてきたのはアヴァンサルだった。地面に付くような朱色の長髪のため、顔がよく見えない。

「やっと申請が降りたのかい。その武器」

ケーニツヒは上手く話を逸らし、背中、朱色の髪の間から覗かせているモノに目を移す。白い布で何重にも巻かれたモノはアヴァンサルの身長よりも高く、大きいものだった。

「よく気付いたな！そうだよ、やっと降りたんだぜ。苦労したわ」

「じゃあ、今日がお披露目ってこと？」

「そういうこと、ドッジーナには悪いけど、俺が五人抜きするから、

そのつもりでヨロシク」

「聞こえてるぞアヴァンサル！」

「はっはっは。精々ががんばれよ。ドッジーナ」

「言われなくても分かっとなるわ！お前こそ、その武器使わなくていいようにしてやるよ」

「楽しみにしてるぜえ」

軽い男だが、実力は本物だ。ケーニツヒとは常に争うように成績上位に食い込んでいる強者。

騎士学科の最強のメンバー。死角は無い。それはメンバー全員が思っていることだった。

第四十四の魔法「実演第一回戦開始」

舞台となるのは、ユートピア学園校舎の天高くに位置する闘技場。その名も「メギストン」

年間を通してたった一度しか使われないこの場所は生徒たちにとっても夢の舞台であった。

三年の両学科成績最優秀者のみが立つことを許させる場所。その場所にクロたち五人の生徒が門を開け、足を踏み入れた。最初に声をあげたのはクロだった。

「うお！ すごいな！」

クロたちのいる場所は「メギストンの心臓」と言われている闘技場の舞台。そこには辺りを取り囲む5mの高き壁とそこから天を覆うような巨大な観客席。まさしく、全生徒憧れの場所であった。

「すごい…こんなに新入生がいるなんて」

周りを取り囲む観客席は白と黒の真新しい制服に身を包んだ一年と二、三年で埋め尽くされていた。

「今年の入学人数はここ十年で一番多いらしいからね」

「あ、ローザだ。それに、サフィラも」

クロは緊張感が無いのか、ローザに向かって手を振っている。

「呑気なもんだな」

「おっと、騎士学科の生徒も到着したようぜ」

反対側の門が開き騎士学科の生徒が入場してくる。そのなかには見覚えのある人物。

「ケーニツヒ」

今回、賭けをしているが、ケーニツヒの番は最後。私は四番目。直接闘うには最低でも一回は勝たなければならない。

闘技場の真ん中に位置する場所にある最後の門が開き、ヴァローナが現れる。

「新人生の皆さん、入学おめでとうございます。皆さんにはこの一年でどれ程成長できるのか、希望を持ってもらうために両学科から選出された生徒で団体戦の実演を行ってもらいます。それでは早速ですが、先鋒の生徒、前に」

魔法学科からはバシリス。騎士学科からはドッジーナが中央へと歩き出す。

「これから始まる実演では、実際に剣と魔法による闘いを見てもらいますが魔法による特殊なプロテクトを施しているため実際にケガをすることはありません。思う存分闘ってください。そして…」

ヴァローナは二人が中央に来たことを確認すると、指を鳴らした。すると、メギストンの心臓を取り囲むようにして透明な光が下から発射された。光は上空に集まり、半円を描くようにしてメギストンの心臓を取り囲んだ。

「魔法は時に暴発することもあります。それを考慮して、観戦

している生徒の皆さんの安全を確保するためにこの装置を使います。この光の外には決して魔法は出ることはありません。思う存分闘ってください」

「やはり、魔術師は軟弱だ。こんな物が無ければ人に危害を加えかねない危ないものだ。騎士の力のほうが優れている証拠だ」

ルーウエルの意見も最もだが、ケーニツヒは賛同しなかった。確かに、魔法は暴発すれば危ない。しかし、二年生なのに暴発するほど危険な魔法が使えるのだろうか。そこにケーニツヒは疑問を持っていた。何かを、ヴァローナは知っているようにも見えた。

両者がヴァローナに向かい一礼する。そして、各々の武器を構える。

「それでは、始め！」

第四十五の魔法「水のバシリス」

先に動いたのはドッジーナだった。ドッジーナの武器は槍。バシリス目掛けて一直線に槍が走る。

大きく横にかわし、すかさず呪文を唱える。バシリスの周りに水が現れ、水弾が発射される。

「しゃらくせえ！」

ドッジーナは槍を大きく振り回し、水弾全てを防御する。攻撃に出ようとするドッジーナだが、バシリスは再び呪文を唱え始めた。何かを感じたのかドッジーナは手を止め、後ろに大きく跳び、後退した。その瞬間、ドッジーナのいた場所から噴水のように水が天に噴射された。

「すこしは手応えがありそうだな」

ドッジーナのいた場所、水が噴射した場所には魔方陣が描かれていた。先程の呪文による魔法である。

バシリスは水の魔法を操る。四つの魔法のなかでもっとも美しく、流れるような連携を得意とする水の魔法。最初の水弾による水を使い次の魔法に繋げる。卓越した集中力と魔法の連携を考えるセンスがあつてこそ水の魔法は真価を発揮する。

「そろそろこっちの番かな」

ドッジーナは再び槍を構え、矛先をバシリスに向ける。しかし、バシリスは手を天に向け、再度呪文を唱え始める。

「そう何度もやらせるかよ！」

いち早く走ったドッジーナだったが、すでにバシリスの詠唱は終わっていた。

「フレッド・テンポラーレ！」

天に溜まっていた水が一気に放出され、数多の剣を作り出す。それは全て、ドッジーナに向けられていた。

「なにっ！」

ドッジーナは攻撃の姿勢に出ていたため、避けることは叶わず全ての剣をその身で受ける事となった。

「すい…」

クロは感服していた。温厚な印象のバシリスの流れるような魔法の連携。

無から有を。有から無を作り出す変幻自在の水の魔法。その美しさに会場だけでなくケーニツヒたち騎士学科の生徒も見とれていた。肩で息をしているバシリスは手を止めて呼吸を整える。初級・中級・中級と連続で魔法を駆使したため、疲労が出ていた。ただ、最初の二つは命中せずとも中級の魔法を当てたことにより多少なりとも自分に優位になるはずと思っていた。

しかし、その考えはあっけなく崩れ去った。水の剣を全て受け止めたドッジーナは立っていた。未だ槍を放さずに。

「今のは効いたぜ、お嬢ちゃん。だけど、それじゃあオレは倒せないぜ」

「うそ……」

不適にも笑うドッジーナを見て、落胆の表情を見せるバシリス。

「さて、反撃開始と行きますか！」

第四十六の魔法「一人の女の子として」

勢いよく前進するドッジーナ。虚を突かれたバシリスは防御のタイミングを失った。

鳩尾に突きを喰らい、勢いよく吹っ飛ぶ。

「きゃあっ！」

ろくに受身も取れずに床を転がる。しかし、何とか体勢を立て直して反撃を試みるバシリス。指揮棒を持ち呪文を唱える。
しかし、ドッジーナはバシリスの目の前まで来ていた。

「我がグラーシーザよ！敵を裂け！」

十字に切り裂かれたバシリスは力なくその場に倒れこむ。

「バシリス！」

飛び出そうとしたトラゴスをクロは強引に手を取り、止める。

「何すんだ！」

「実演中だぞ！選手に手を出したら反則負けだ」

「もう勝負は終わった！見たろ、バシリスの負けだ」

「アンタが決めることじゃない！バシリスが決めることだろ！」

言い争っていると、いつの間にかバシリスは立っていた。しかし、

膝に足をつき満身創痍の状態に見えた。

「バシリス！もういい！それ以上闘うな！」

バシリスは何も言わずに首を横に振った。

「私は…トラちゃんの許婚だよ。だから、負けたくないの…」

「そんなの関係ないだろ！もう、闘えないだろ！」

「いやよ、闘うわ」

「何で…」

「だって、私はトラちゃんのために生きてるんだよ。こんなところで負けてたら儀式なんて成功するわけ無いでしょ」

「お前、まさか…」

その言葉はトラゴスの耳にしっかりと届いた。

儀式。それはトラゴスの成人の儀式を指している。バシリスを生贄にして行う儀式。すべてを、バシリスは知っていた。儀式の生贄には王族同等の力を持たなければ儀式に耐えられないことも。

クロはトラゴスの肩を叩いた。

「最初から全部知っているんだよ、バシリスの奴。だけど、それを言わなかったのは何でだと思う？全部知った上で、それでもお前のことが好きなんだぞ。わかってやれよ！あの娘の気持ちをも！」

「バシリス…」

「お話中悪いけどよ」

ドッジーナの声で闘いに意識を戻される。

「待っていてくれたの？」

「オレは騎士だ。正々堂々、闘うぜ」

「ありがとう」

距離を取るバシリス。それに合わせるようにドッジーナもまた、
槍を構える。

「行くぞ」

「ええ」

ドッジーナは走り出した。詠唱の時間を与えまいとバシリスに近づく。しかし、バシリスは詠唱をせず、指揮棒を前に突き出し一瞬で魔方阵を描く。その魔方阵には呪文のようなものが描かれていた。

「まさか、瞬唱を使ったのか」

アスワドは驚いていた。バシリスの書いた魔方阵は通常のもとは異なる魔方阵「瞬唱」だった。

通常、魔方阵を使用する魔法は中級と上級の2種類。詠唱を唱え魔方阵を描き、魔法を発する。これが通常の魔法の流れ。

しかし、瞬唱は魔方阵と詠唱を同時に行う高度な魔法技術。それをバシリスは使った。それはとても、二年生になったばかりのバシ

リスには出来ないことだった。

「アクア・ドラゴニス！」

辺りを無数に取り囲んでいた水溜りは一瞬で魔方陣の前に集まり、巨大な龍を作り出す。

「マジかよ！」

ドッジーナは足を止め、急いで後退する。しかし、龍はそれ以上の速さでドッジーナを追いかける。

徐々に距離を詰められるドッジーナ。もう、勝負はついたと、自分の勝ちだと安心したバシリスは安堵の表情を見せた。

その隙を、ドッジーナは逃さなかった。素早く槍を持ち替え、投槍の構えを取った。

「飛べっ！グラーシーザ！」

龍に襲われるよりも一瞬早く、槍をバシリス目掛けて放った。バシリスの体を槍が直撃する。直後、激痛に襲われたバシリスはその場に倒れた。ドッジーナもまた、槍を投げた直後に龍に襲われ、倒れている。

一瞬の静寂のあと、周りの光は消えた。そして、ヴァローナは中央まで歩き、言い放つ。

「両者ノックダウン！この勝負、引き分けとする」

第四十七の魔法「トラゴスVSアヴァンサル」

バシリスに駆け寄るトラゴス。抱きかかえ体を揺する。意識を取り戻し、微かに開いた瞳からは涙がこぼれていた。

「ゴメンね。トラちゃん…勝てなかった…」

「喋らなくていい、今はゆっくり休め」

「うん、アリガト」

バシリスを抱きかかえ、歩くトラゴス。アルジエントは二人に駆け寄った。

「次は、お前の番だろ？トラゴス」

何も言わずに、ただアルジエントにバシリスを渡す。

「目が覚めたら、すまなかったって言ってくれるか？」

「それは、勝ってから言え。お前自身の口からな」

「そりゃそうだな。間違っても襲うなよ」

「誰が寝込みを襲うか！」

相変わらず仲が悪そうに見えた二人だったが、皮肉を言うトラゴスを見ていると、二人が元に戻ったようにも見えた。

バシリスを病室に連れて行くのと同じようにドッジーナもまた、

負傷を癒すため、病室へと運ばれた。

「敵はとってやるぞ、ドッジーナ」

次の対戦はトラゴス対アヴァンサル。両者が中央に集まり、再び光が取り囲む。

「随分とデカイ武器だな。そんなの使えるのか？」

「心配しなさんな。使えるから持つてるだけだ」

「そうかい」

アヴァンサルは武器を持ち、目の前に持ってくる。実際にアヴァンサルと高さを比べてみると武器の巨大さが分かる。アヴァンサルの身長は2m近く。その身長と同じくらいの高さ、そして横にも幅のある武器だった。

「そろそろお披露目としますか」

布を全て取り、武器が姿を現す。

「大剣……か」

「半分正解かな」

不敵に笑うアヴァンサル。その意味を、トラゴスはこの闘いで思い知らされる。

「では、二回戦開始！」

第四十八の魔法「重詠唱く負けられない闘い」

アヴァンサルは大剣を持ち、思い切り振り下ろす。動作が遅いため、難なく避けるトラゴス。しかし、振り下ろされた大剣により、地面は砕け、石つぶてがトラゴスを襲う。

「パワーバカめ」

石つぶてを避けるトラゴスの視界に剣を持ち構えたアヴァンサルが移る。初手を見ていたトラゴスはアヴァンサルの武器の弱点を見抜いていた。

大きい武器ほど破壊力はあるが、スピードは無く、連携も不可能に近い。ギリギリの所で攻撃をかわし、隙を見て渾身の一撃を打つ。すでに詠唱を始めたトラゴス。シミュレーションは完璧だった。横への薙ぎ払いだと感じ、バックステップで距離を取ろうとする。

しかし、トラゴスはかわすことが出来なかった。初手よりも速いスピードで繰り出された大剣の一撃をまともに喰らった。

派手に吹っ飛ぶトラゴスを見て、アヴァンサルは大きな声を出し笑った。

「ぐ…」

何とか立ち上がるが、腹部に激痛を感じ、立膝をつく。どうやら先程の一撃で肋骨が数本折れてしまっている。

「骨が逝ったか？痛そうだけど」

「さっきの半分正解は、どうやら本当のようだな」

「あれ？ばれちゃった？」

「まともに喰らったんだ。嫌でも分かるさ」

「アンタが思っている通りだ。この大剣・ベガルタは二つの役割を持っていてだな、柄から半分までは殴打に特化して、そこから切っ先までは斬撃用に分かれている武器だ。どうだ、カッコイイだろ？」

「随分とペラペラ喋る奴だな。そんなに自慢したいか？」

「まあね。やっと申請できて今日が初のお披露目だからな」

「そうかい、だけど、残念だったな。お披露目と同時にアンタは負けるぜ？」

「君にかい？」

「他に誰がいる。お前は負けるんだよ」

「いいねえ、気に入ったよ。じゃあ、試合再開と行きますか！」

アヴァンサルの猛攻が始まる。大剣をいとも簡単に操り、徐々にトラゴスを追い詰める。しかし、トラゴスは魔法を使わなかった。何度も危ない場面があってもなぜか一向に魔法を使おうとしない。そればかりか、指揮棒も収めて逃げることにだけに全力を尽くしていた。

「何だ、何だ！威勢の良いのは口だけかい！」

豪快に振り下ろされた大剣により再び地面が碎かれる。その衝撃

で足を取られたトラゴス。

大剣が、トラゴスを捉える。振り上げられた大剣により、トラゴスはいとも簡単に宙に投げ飛ばされた。まともに受身も取れず、背中から地面に落ちる。

「ぐっ」

打ち所が悪かったのか、背中を押さえている。何とか必死に立ち上がるが、すぐそこまでアヴァンサルが近づいていた。

「終わりだ！」

アヴァンサルは大剣を片手に持ち替え、体を回転させる。その勢いでトラゴスの脇腹、先程攻撃を当てた場所目掛けて大剣を思い切りぶつける。

腕で防御していたが、それでもトラゴスは吹っ飛ばされた。トラゴスは立ち上がることが出来ないほどの痛手を負った。

大剣を片手で操り、普通の剣以上の速さで攻撃を繰り返すアヴァンサル。強靱な体に見合った武器。振り下ろし、振り上げ、薙ぎ払い。この三つの単純な攻撃しか繰り返せない大剣だが、アヴァンサルが操ることにより、強力無比の武器を化す。

アヴァンサルはトラゴスの胸倉を掴み、持ち上げる。

「魔法の一つも使わないで負けるとは可哀想な奴だ」

その言葉にトラゴスは反応しない。

「なんだよ、もうダメなのかよ。つまんねえ……」

ふと、アヴァンサルはトラゴスの口から何かを聞いた。

「ん？何か言ったか？」

しかし、トラゴスは何を言わなかった。それでもまだ、トラゴスは何かを言っているようだった。

「はつきり言えよ！」

微かに、トラゴスは笑った。そして

「我慢比べといこうぜ。俺と、お前の……」

「は？」

その瞬間、トラゴスとアヴァンサルの周りに大きな魔方陣が現れる。通常の魔方陣より三倍以上の大きさだった。

「てめえ！いつの間に！」

「さあ、派手にいこうぜ」

次の瞬間、轟音と爆炎が同時に起こる。避けようとしたアヴァンサルだったが、トラゴスが掴んだ手を離さなかった。

メギストンの心臓だけでなく、会場全体にも轟音は響き渡った。

「何したんだ、アイツ。あの威力って上級並みだぞ」

「あれは、重詠唱だよ」

「重詠唱って？」

クロの質問にレクスは答えた。

「通常の詠唱を何回も繰り返し唱える上級術の一つで、魔法の威力を何倍もの威力で発動することが出来るようになるんだ。たださえ詠唱中は無防備になるのに、何回も詠唱をするこの術、普通はサポートを必要とするんだけど…」

「まさかアイツ、この一撃のためにずっと逃げていたのか」

「そうみたいだね。本当に使っなんて驚いたな」

レクスとトラゴスは昨夜、部屋で今日の対策を練っていた。魔法の連携などを考えているときだった。レクスが提案した、勝つ方法の一つとして重詠唱があった。その時、トラゴスは乗り気ではなかったが、アヴァンサルとの闘っているうちに一発で勝負が決まると考えて使ったのだろう。

やがて、炎が全て消え失せるとたった一人、トラゴスだけが立っていた。それを見たヴァローナは勝者の名を言葉にする。

「勝負あり、勝者トラゴス！」

第四十九の魔法「アルジェント」たった一つを極めし者」

歓声の中、ガッツポーズを天に向けて掲げるトラゴス。

「トラゴス！」

アルジェントはトラゴスのほうへと走っていった。トラゴスもアルジェントに気付き、笑顔を見せたが、その場で力尽き倒れこんでしまった。

「おい！大丈夫か！」

「無理しすぎちまった…体中いてえや…」

「まったく、二人揃って無茶しやがって」

トラゴスを起き上がらせ、クロとレクス元へと歩く。その目の前にヴァローナが現れた。

「今回は勝ち抜き戦だが、トラゴス君。君はもう闘えないだろう」

「まだ……闘えますよ」

「無理はしない方がいい。その体では満足に動くことも出来ないはずだ。次の闘いは君の棄権ということにしてもうらうよ」

「理事長の言うとおりでぞ。後は俺に任せてくれ」

「…わかったよ。その代わり、負けんなよ」

「ああ、約束する」

「絶対だからな……」

そう言っ、トラゴスは目を閉じた。

「トラゴス……」

「安心しなさい。気絶しているだけだ」

アルジェントはレクスにトラゴスを託し、中央へと戻る。次の対戦相手であるソーマはすでに立っていた。

「待たせたな」

「……………」

ソーマは無言のまま、アルジェントを見つめる。ヴァローナも中央へと戻り、試合開始を宣言する。

「四回戦、アルジェント対ソーマ。試合開始！」

試合開始と共に指揮棒を持ち、詠唱を始めようとするアルジェント。しかし、対戦相手であるソーマは武器を持っていなかった。

「お前、武器はどうした？忘れたのかよ」

「すでに持っている」

そう言つとソーマは右手を前に出した。武器はしっかりと握られていた。だが、それは武器と呼ぶには余りにも粗末なものだった。刃渡り15cmほどの小さなナイフ。ソーマはこのナイフしか持っていないかった。

「それが武器だと。ふざけるな！」

アルジェントの魔法は土。豪快に大地を揺るがす魔法には強力な魔法が多く存在する。初級と言えども、破壊力は四属性の中でも随一を誇る。

その一つである「ハトースカラ」は地面を自由自在に操る初級魔法。アルジェントはこれを使い、ソーマの周りの地面から腕を四本、造形する。四本の腕はまるで意思を持っているように、それぞれが自立的に動いている。目標をソーマに向け、拳を握り、一斉に殴りかかる。

全てがソーマに当たる瞬間、ソーマは大きく身かがみ、腕の根元を一本ずつ斬っていく。体勢を立て直し、素早く攻撃に転じるソーマ。ナイフをアルジェントに突き刺そうとしたが、二人の間に巨大な岩の壁が立ちふさがる。

「これは……」

巨大な壁の前にソーマのナイフはいとも簡単に弾かれてしまった。その反動で体勢を崩すソーマ。そこに岩の壁から出現した無数の球がソーマを襲う。

防御のタイミングを失ったソーマは直撃を喰らいながらも距離を取る。壁が徐々に崩れ去る。すでにアルジェントは指揮棒を収めていた。

「なぜ、棒を収める。勝負を捨てたのか？」

「ここからがオレの魔法の見せ所だ」

アルジエントは地面に両手を置き、詠唱を始める。すると、地面から大きな土の塊が姿を現した。それは、徐々に姿を変え、やがて人の姿へと変貌を遂げた。それぞれが剣・槍・弓・斧などの武器を構える兵士のような土の塊。

「面白い魔法だな」

「随分と余裕だな。そういうのは、勝ってから言いやがれ！」

第五十の魔法「ソーマという男」

四体の土兵士がソーマ目掛けて走り出す。

アルジェントは他の生徒とは魔法に対する考え方が違っていた。たった一つ、その一つの魔法を極めることが自分にとって最高の魔法になると考えていたのだ。その考えが通じたのか、自分の素質が土であると知った瞬間、土から形あるモノを作り出す「ハトースカール」をこの一年間極め続けていた。そして、今では人形を作り出し、自由自在に操るまでに成長していた。

「今年は、優れている生徒は、沢山いるようだな……」

アスワドはただただ、生徒の成長振りに感動していた。目頭が熱くなるほどに。

「なんだ、おっさん。涙もろいのは年寄りの証拠だぞ」

そんなクロにアスワドの拳骨が待っていた。後頭部を殴られたクロは余りの痛さに少しだけ涙が出ていた。

「強すぎるぞおっさん！」

「お前こそ、泣いてないでしっかりと実演を見ている。次はお前の番なんだから、無様な真似だけはするなよ」

「あ、そっか……」

バシリスやトラゴスの闘いを見て、良い刺激になったかと思えば、相変わらず能天気というか、緊張しない図太い性格の持ち主だと、

アスワドは再認識した。

そんなやり取りをしているうちにアルジェントは四体の人形を駆使してソーマを追い詰めていた。それぞれが違う武器を持つ人形の攻撃を避けるだけで精一杯のソーマ。

そんなソーマの姿を見ていたメルキュールは。

「おい、ケーニツヒ。アイツ勝てるかな？」

「さあ？」

「さあつて、このまま負けたらヤバイだろ。三戦して一勝もしていないんだぞ。ここらでソーマが勝たないと」

「何とかなるんじゃない」

魔法学科の能天気がクロだとすれば、騎士学科の能天気はケーニツヒのようだ。

「それとも、何か策があるのか？」

「さあ？」

「あんな、アイツと同じ部屋だろ？何か聞いてないのかよ？」

「別に、何も話してないよ。それに、ソーマがどんな奴かイマイチ知らないし」

「どういつこと？部屋で一緒なんだから何か話せばいいじゃん」

「まあ、話すことは話すけど…下らない話しかしないのだよね。と

にかく、ソーマは謎なんだよ。自分のことは何も話さないし」

「そう、なんだ……」

「もしかして、気になってる？」

「バカッ！」

依然、四体の人形の攻撃をかわし続けているソーマ。最初は、避けるだけで攻撃をかわしていたが、次第に土兵士たちのスピードが増し、ナイフで受け止める場面が増えてきている。

「そいつら土の兵士は俺の手でも足でもあるんだ！攻撃を避け続けれるわけ無いだろ！」

一本一本の指を動かして、四体の土兵士に繊細な動きを命じるアルジェント。土兵士を自分の体の一部として操っていく。

劣勢と思われているソーマだったが、顔色は一つも変えていなかった。

「そろそろか……」

そう呟き、それまで防戦一方だったソーマの目が変わる。目標のアルジェントを見据えると、攻撃を全て回避し、アルジェントに向かって走り出す。

「残念だったな」

再び、両者の前に大きな壁が立ちはだかる。だが、先程と違いソーマは壁など関係ないかのように更に速度を上げた。四体の人形も

ソーマを追うようにして走った。

（もう少し、もう少し近づいて来い…）

アルジエントは人形の目を通し、ソーマの居場所が分かっている。壁にナイフを突き刺したところを一気に人形で襲わせる。そう計画していた。

ソーマはナイフを使わず、大きくジャンプした。そして、壁目掛けて蹴りを入れた。

「なっ！」

壁は蹴られた場所から中心に粉々に壊れ、無防備となったアルジエントの前にソーマが立つ。

指揮棒を使うにも使えなかった。四体の人形に魔力を集中させているため、ハトースカーラを使うことが出来なかった。

ソーマはナイフを持ち、構えも取っていないアルジエントを切りつけた。

第五十一の魔法「最後の魔法」

四体の人形は形を留めておけず、崩れていく。魔力を注入してくれる術者が力尽きた証拠だった。

終わった。倒れているアルジェントを見て、そう確信したソーマは光の中から理事長に話しかける。

「終わったぞ。さあ、この光を解け」

「それは、私が決めることだよ。それにまだ終わっていない」

「なんだと……」

かすかに聞こえる物音。振り向くとアルジェントは立っていた。

「理事長の……言うとおりだ……俺は、まだ戦える」

「もうよせ、ナイフで切ったにしても傷口は深いはずだ。その体ではろくに魔法も使えないだろう」

「それは、俺が決めることだ！」

指揮棒を握り締めるアルジェント。最後の力を振り絞り魔力を集中させる。

これだけは使いたくなかった。最悪の場合、暴走を起こしてしまう自分自身でも制御が利かなくなってしまう。

だけど、約束した。必ず勝つと。

指揮棒を地面に突き刺す。地面が徐々に振動を始めた。地震のようメギストン全体が揺れ始めた。

「貴様、何をしている！」

ソーマは走り出しアルジェントを止めようとする。しかし、アルジェントの下の地面が急激に盛り上がり、ソーマの行く手を阻む。盛り上がった地面は再び人の形へと変貌を遂げた。先程までの四体の人形の巨大化したような姿だった。頭の部分にはアルジェント自身が乗っていた。

「これが本当に、最後の魔法だ。行くぞ、ロックガーディアン！」

アルジェントの号令と共にロックガーディアンも動き出す。握られた拳はソーマに向けられていた。間一髪で攻撃をかわすが、すぐさまもう一つの拳がソーマを直撃する。

光の壁が無ければどこまで飛ばされていたか分からない。それ位強い勢いでソーマは壁にぶつかった。

「ぐっ！」

膝を付き、殴られた場所を押さえるが、眼光は鋭いままだった。

大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出す。慎重に敵を見極める。所詮、大きいだけの敵。攻撃力は高いが、速さは無い。先程のような多段の攻撃だけを気をつければ問題は無い。弱点は……。

ナイフを持ち、ロックガーディアンに近づく。振り下ろされた腕を寸前で避けると、その腕を利用して高くジャンプする。

頭に乗っているアルジェントと同じ高さまで到達したソーマ。しかし、距離は遠い。ソーマは渾身の力を使いナイフを投げる。ナイフはロックガーディアンの胸部に直撃した。しかし、ロックガーディアンには攻撃が効いていなかった。

空で無防備になったソーマに再び拳が襲い掛かる。今度はしっか

りと両手でガードしたため、壁にぶつかることなく着地することが出来た。

「無駄だ。このロックガーディアンはどんな攻撃にも緩まない！」

我武者羅に攻撃を繰り返すロックガーディアン。メギストンの心臓自体が強固なため壊れることは無いが凄まじい音と共に容赦ない攻撃がソーマを追いつめる。

「どうするのよ、ソーマの奴。武器も無くなっちゃったし……」

不安そうにそう言うメルキュールに対して何時までも能天気なケ―ニツヒはこう言った。

「大丈夫、もうソーマの勝ちだ」

「え？」

「見てれば分かるよ」

攻撃を避け続けるソーマだが、その視線はナイフに向けられていた。

第五十二の魔法「見えているか、見えていないか」

もう一度、先程の状況を作る。今度は失敗しない。しかし、このロックガーディアン。巨体であるため易々と距離を取ることが出来ない。

仕方ない。これはあまり使いたくなかったが……。

両腕に力を入れる。ソーマの腕が徐々に筋肉質に変わっていく。そして、ロックガーディアンの足に潜り込み、鷲掴みにする。

「ああああああああ！」

ソーマが力を入れる。

「持ち上げる気が。無駄だ。どれだけ重いつている！」

「俺が、持ち上げられるくらいの重さだろ！」

その言葉どおりにロックガーディアンの足は持ち上がった。

「なっ！嘘だろ！」

平衡感覚を失ったロックガーディアンは大きな地響きと共に地面に倒れこんだ。

その場を観客席で見っていた生徒は啞然として言葉が無かった。それは魔法学科サイドだけではなく騎士学科サイド（ケーニツヒを除く）も教職員たちも言葉が無かった。見た目が非力なソーマだけに驚きは二倍も三倍もあった。

当の本人は何事も無いようにゆっくりと距離を置いた。

「そんな、バカな……」

ロックガーディアンから転げ落ちたアルジェントも急いでロックガーディアンの体勢を立て直す。

大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出す。慎重に敵を見極める。目標は胸部のナイフ。先程と同じ感覚だ。いける！

そう確信したソーマは再びスピードを上げてロックガーディアンに向かう。

「倒したからっていい気になるなよ！」

焦りからか、アルジェントには先程の映像が見えていなかった。見えていたソーマと見えていないアルジェント。勝敗はそこで分かれた。

拳を繰り出す。

それを避ける。

腕を利用して高く飛ぶ。

しかし、前のジャンプと違う。確実にロックガーディアンに向かって飛んでいる。

その時になってアルジェントには先程の映像が見えた。

しかし、すでに遅かった。ナイフ目掛けて勢いよく蹴りを繰り出したソーマ。

ナイフは完全にロックガーディアンの内部に入り込み、そこから亀裂を生み出した。体全体に亀裂が走り、ロックガーディアンは見事に砕け散った。受身もろくに取れずに、アルジェントは地面に叩きつけられた。

「くそ……」

意識が朦朧とするなか、アルジェントは最後の力を振り絞って立

ち上がった。

「まだだ、まだ、終わっていない」

指揮棒を強く握り締め、覚束ない足取りでソーマに近づく。だが、ソーマは闘おうとはしなかった。ゆっくりと振り返る。

それを合図にしたかのようにアルジェントはその場に力なく倒れた。そして、光の壁が消えると同時にヴァローナの試合終了を続ける言葉が響いた。

第五十三の魔法「ゼロと呼ばれた男」

メギストンは熱気に包まれていた。勝ち残り戦となっている今回の実演では二勝一敗一分と騎士学科がリードしている展開だった。ここからは魔法学科の副将が登場する。これまで魔法学科の生徒も騎士学科の生徒も二年生とは思えないほどの技術の応戦だったために副将への期待は自然に高まっている。

そんな、観客席のなかで最上段に位置する場所に男が一人冷静な態度で闘いを見ていた。その男に近づいてくるのはリエータ先生だった。

「あらあら、こんな所にいたの。随分と探したわよ」

「リエータおばちゃん。久しぶり、あんまり変わってないね」

「そう言うアナタはすいぶん変わったわね。どう、シュルヴィーヴルは？」

「窮屈極まりないところだ。居るだけで寿命が縮むぜ」

「あらそう、ところでゼロ君」

ゼロと呼ばれた男は生返事を返す。

「どう？今年の生徒は？」

「なかなか教え甲斐のある生徒が何人が居るみたいだな。どちらとも甲乙付けがたいが選ばれているだけのことはあると思う」

「そうならよかった。じゃあ、例の話し引き受けてくれるわね？」

その言葉にゼロは嫌な顔を見せた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。それとこれとは別だろ？まだOKしたわけじゃないし……。そう、俺だって意外と忙しいんだぜ」

「あら？この間、任務で問題起こしたそうじゃない。当分は任務に参加できないって、理事長から聞いたわよ？」

「あの野郎……。どんなことでも調べやがって……」

「それに、理事長がこの提案を話してみると良い機会だから是非ってシウルヴィーヴルの隊長さんも承諾してくれたわよ？」

「マジかよっ！」

話をしていると、再び観客席から歓声が響き渡った。メギストンの心臓を見ると先程の騎士学科の中堅と魔法学科の副将が立っている。

「その話はこの実演が終わってからな」

「はいはい」

第五十四の魔法「お前が嫌い」

クロは深呼吸を始めた。去年とは話が違ふ。自分の力を、本当の力を試すときが来たのだ。緊張はしていない。逆に会場の雰囲気と同調するように気分は絶好調だった。

「女か……」

その言葉が耳に入り、ソーマを睨みつける。

「何か文句でもあるのかよ？」

「別に」

明らかに見下している発言だった。だったら、本気を見せてやる。そして、ヴァローナの合図が聞こえた。

先手必勝。クロの考えは去年とは変わっていない。黒い力を右手に集中させる。

思い切り前に突き出すと、訓練の通りに黒い力が塊となってソーマに襲い掛かる。

だが、予想外のことが起こった。ソーマは一步も動けずに直撃を間逃れなかった。

勢いよく吹っ飛び、壁に激突する。そのまま正面から地面に崩れ落ちる。

一瞬の静寂、クロはまだ突っ立ったままだった。こんなに、強い力だったのかと、クロは自分でさえも驚いていた。

「勝者、クロ！」

その言葉でハッ和我に返る。そして、歓声がクロを包み込む。やがて、光の壁が開放されてケーニツヒがソーマを抱える。

一瞬、二人の眼が合う。だが、何も言わずにケーニツヒは振り返り、騎士側へと帰っていった。

今は敵同士ってことか…。

「まったく……俺に噛ませ役をさせるなんてな……。この貸しは大きいぞ」

「分かっている。無理言つてすまないね」

「お前のことだ。何か訳があるからだろ？」

「ご名答」

「どんな理由か知らないが、この実演は絶対に勝てよ」

「ああ」

ケーニツヒと入れ替わるようにしてクロの次の対戦相手であるメルキユールが姿を現した。

綺麗な人。それがメルキユールの第一印象だった。とても同年代とは思えないほどの綺麗な顔。ただ歩いているだけでも分かる様な上品な出で立ち。

程なくして光の壁が二人を囲む。すると、メルキユールが剣をクロに向け、こう言った。

「私は、お前が嫌いだ」

「は？」

その次の瞬間、メルキュールは一気にクロに近づく。そして、腹部に突きを一閃。

間一髪避けたクロ。メルキュールはすり抜けるようにして後ろへと走り去る。

「てめえ、いきなり何すんだ！」

答えようとせず、メルキュールは更に襲い掛かる。

尋常ではないメルキュールのスピードと突きの威力を察知したクロは足に力を発動させ距離を取ることにした。足に発動させれば通常の三倍の脚力を得られる。

だが、それでもメルキュールとの距離は縮まらなかった。逆に狭まってきている。光の壁で造られた空間の中では満足に距離をとることは出来なかった。

なら、迎え撃つただけだ。今度は腕に力を集め、黒い弾丸を数発、メルキュールに向けて撃ち込む。

一発、二発と避けていくメルキュールだが、三発目には真正面を捉えられた。メルキュールはスピードを落とし、愛剣「ルーン」で黒い弾丸を受け止める。

威力が高いため、徐々にだが、後ろに引きずられていく。これ以上モタモタしていれば追撃の機会を与えてしまう。メルキュールはそう判断して、両手に力を込め弾丸を上へと弾き飛ばす。

すぐに体勢を立て直し、クロの方へと向き直る。二人の距離はおよそ10m離れていてお互いをけん制している状態になった。

「さっきの言葉、どういう意味だ？」

「どついう意味、って？」

「『俺のことが嫌い』って言葉だ。アンタとは初対面だろ？」

「初対面とか、関係ない。アンタは私の大切な人を奪ったんだ！」

「大切な人って……誰だよ？」

少しの間の後、メルキユールはある人物の名前を口にした。

「……レクスのことよ」

「は？」

「お喋りはここまで。試合再開と行くわよ」

「おい、ちょっと待て……」

クロの言葉を聞く前に再びメルキユールはトップスピードでクロに接近する。

第五十五話「許婚」

「訳わかんねえよ！」

両手両足に力を込める。メルキュールの激しい攻撃は避けるだけで精一杯だった。

何とか喋ろうとするが、そんな暇を与えてくれる間もなくメルキュールの突きがクロを襲う。

動体視力も身体能力も共に上昇しているクロだったが、反撃の機会を伺うだけだった。

メルキュールとの距離が少しだけ離れた。そのチャンス逃すことなく、メルキュールに殴りかかる。

しかし、メルキュールの速度が更に上がる。殴りかかる前にクロは同じ場所に数発、突きを喰らってしまう。

「ぐっ！」

ただ一点を深く傷つけられ膝を付くクロ。その姿を見たメルキュールはフツと鼻で笑った。そればかりか余裕の表情を見せている。

「クロ！」

その、レクス言葉に過剰に反応するメルキュール。その顔には余裕なんてものはなく、悲しみに満ちた表情をしていた。

「どつして……」

クロのことなど放っておくようにしてレクスを見つめているメルキュール。

「オラアアアア！」

立ち上がり、殴りかかるクロ。しかし、その声に素早く気付いたメルキュールはルーンで受け止める。

しかし、凄まじい力の衝撃によりメルキュールは吹っ飛ばされた。

「よそ見なんかしてんじゃねえ！」

速さでは勝てないと判断したクロは、黒い力の全てを拳に溜めた。力では絶対に負けたくない。

「アナタに何がわかるっていうのよ！」

メルキュールは立ち上がり、クロに斬りかかりに行く。

「分かるかよっ！だから聞いてんだ！」

メルキュールのスピードが遅くなった。何かに動揺しているのは分かる。

この程度の速度ならば、とクロも反撃に移る。拳と剣が二人の間を応酬する。

「アナタが私からレクスを奪った！ずっと、レクスと一緒にだったのに……。それをアナタが！」

クロの手が一瞬、躊躇ったかのように止まる。自分が、人の何かを奪った。それは自分が昔にされたこと。

兄を……。大切な仲間を……。

その悲しみもこの娘に与えてしまったこと。

一瞬の隙を見逃さなかったメルキュールは速度を上げ、突きを繰り出す。

今度も先程と同じ場所。痛みの引いていない場所に再び攻撃を受けるクロ。膝はつかなかったが、腹部を押さえ、苦しそうな表情を見せる。

メルキュールは肩で息をしながら鋭い目つきでクロを睨みつける。

「私が、どれだけ苦しい思いをしたのかも知らないで……。アナタが私から全てを奪っていった」

「さつきから、ゴチャゴチャと……。アンタ、レクスは何なんだよ！」

一呼吸して、目を合わせて彼女は言った。

「許婚よ」

その言葉で彼女の気持ちが分かった。許嫁を奪われたら誰だって悲しい。だけど、彼女は勘違いしている。

私はレクスに特別な感情を抱いていない。ただ、トラゴスと同じように仲良くしていただけだ。

それでも、こんな勘違いをしているということは、自分ではなくレクスに問題があるのではないだろうか。クロはそう考えた。

しかし、今更「自分は別にお前からレクスを奪った覚えはない」等と言っても聞く耳は持ってくれないだろう。

「絶対に、アンタからレクスを取り返してみせる」

まったく。どうして私の周りの男は面倒ごとが多いんだ。しかし、

今はあれこれ考えている場合ではない。

この闘いに勝って、それから話をつければいい。

第五十六の魔法「エトワール」

「次は、本気の本気。誰も見たことのないスピードでアナタを倒す」
力なく両手をぶら下げ、左にゆっくりと体を揺らす。右に揺らした一瞬で、メルキユールはその場から消えた。

「なっ！どこ行っただ！」

クロは辺りを見渡すが、メルキユールの姿は無い。すると、クロの周りから地面を蹴る音が聞こえてくる。徐々に、間隔が短くなり、蹴る音も強くなっていく。

右側の地面が激しく砕ける音を発した。それと同時にクロの右肩に激痛が走る。

「ぐっ！」

右腕を押さえると、今度は左手、右足、左足、胴体と、体の至るところを斬りつけられていく。

メルキユールの圧倒的なスピードは、視覚を黒い力により研ぎ澄まされたクロでもついていくことは出来なかった。

観客席から見る景色は不思議そのものだった。地面を蹴る音だけが響き、メギストンの心臓にいるクロが踊っているようにも見える。

体の至るところが紫に変色する。魔法を使っていなければ既に死んでいる傷の量だった。それでも、クロは倒れなかった。

守るべき、約束のために。一方的だけど、自分で決めた約束。

副将对副将の闘いが始まって、まだ十分。すでに勝負は付いたようなものだ。騎士の副将のスピードに対する魔法学科の副将は見る事さえも難しい状況。

もつと、面白い展開が待っていると思ったのだが……。拍子抜けの一言だ。先鋒や次鋒の方が良い闘いをしていると言える。

それに、魔法学科の副将はなんて格好をしているんだ。女の子なら女の子らしく可愛らしい服装をするものだ。時代遅れの学生服など、それに男子用を着るなど言語道断だ。

言葉遣いも悪い。さつきから聞いていれば、まるつきり男言葉ではないか。女性はもつと慎ましくだな……。

途端、会場の雰囲気が変わる。観客席のざわつきがハンパではない。

メギストンの心臓に目を向けると、魔法学科の副将の様子がおかしかった。

黒い……。何かが確認できる。先程から使っている魔法。弾丸のように飛ばしたりしているだけだったあの黒い何かが、今度は体全体に纏わり憑いている。それを見たゼロは確信した。

「おい、ばあちゃん」

「どうしたの？ゼロくん」

「あれは、何だ？」

「ああ、あのクロって生徒が見つけた新しい魔法らしいわよ」

新しい魔法……。違う。アレはもつと、面倒なものだ。それも昔からの魔法。

「エトワールの残した物……か」

「何か言ったかしら?」

「ばあちゃん、ヴァローナに伝えといて。学科最高責任者の任、快く受けるってさ」

「あら、そう。それは嬉しいわ」

見つけた。この世界を正しい方向へ導く。可能性に満ちた力を。

第五十七の魔法「絶対負けない」

もはや、手加減は出来ない。このまま斬り続けられればいつかは意識が吹っ飛ぶ。そうなったら、負けも同然だ。

斬られ続けるなか、クロは目を瞑り、呼吸を整える。時間にして約五秒。

その五秒が過ぎた瞬間。クロは姿を消した。メギストンの心臓にはメルキュールの足跡以外、何も聞こえない。

不思議に思ったメルキュールは、中央部分で足を止める。足からは微弱だが、焦げ臭い匂いがする。

「何処に行ったの？もしかして、逃げたのかしら」

「後ろだ！メルキュール！」

その、ケーニツヒの言葉を素直に聞く。振り向いた瞬間、背筋に戦慄を覚えた。

すぐさま、距離を取る。自分の真後ろにいるのがクロだと分かるのに、数秒掛かった。

顔に黒い十字模様。漆黒の瞳。全身から発せられている黒い何か。メルキュールには、到底、理解できるものではなかった。

「時間が無いからね、一気に行くわよ」

その言葉の後、鳩尾に衝撃が走る。クロの右腕がメルキュールの鳩尾を殴っていた。

「オ……ア……」

声にならない声を口から嗚咽の様に吐き出す。前のめりになった頭に回し蹴りをまともに喰らった。

勢いよく吹っ飛ばされたメルキユールは腹部を押さえながら、ゆっくりと立ち上がろうとする。

「ヒュー……ヒュー」

今まで受けたことの無いような痛み。全身に衝撃が走るほどの一撃。先程までのクロとは別人のように思っていた。

「なんなのよ、一体」

手に思うように力が入らず、ルーンを持つことだけで精一杯のメルキユール。クロが歩を進め、徐々に近づいてくる。

「アナタが、どうして私に恨みを持っているのか、なんとなく分かったわ。だけど、それは闘いが終わってから、ゆっくり話し合いましょう？今は、闘いに集中するべきよ」

クロは右手を横に突き出す。黒い力が右腕に集中する。やがて、黒い力は大きな手へと姿を変えた。

クロが手を握れば、大きな黒い手もクロの手と連動するように、手を握る。感触を確かめるように、何度もグーとパーを繰り返す。

「うん、いい感じ。じゃあ、いくわよ」

クロが構える。しかし、クロが動き出す寸でのところで、メルキユールが再び加速を開始した。

「私は絶対、負けない！」

第五十八の魔法「黒い魔法の意味」

地面を蹴る間隔、強さが先程よりも数倍強くなっている。今度こそ、本気の速さだろう。そう思ったクロは、右手を天高く掲げる。

「アナタは、確かに速いわ。だけどね……」

クロの右手に宿った大きな黒い手は、形を変え、大きな球体へと変化した。そして、そのまま上空へゆつくりと上っていく。

レクスも、ケーニツヒも、観客席も、その球体を見入っている。ただ一人、ゼロだけはクロの姿をじっと見据えている。

「さあ、何をしてくれる？ お前はどうかやって、その力を使ってくれる？」

球体は、上にも存在する光の壁まで近づくと、自動的に破裂した。そして、黒い粒となり、上空を黒く染めた。

「さあ、現れよ。『黒く凍てついた嵐』よ」

その粒が剣へ姿を変え、一斉に降り注ぐ。それは、バシリスが使った魔法「フレッド・テンポラーレ」に良く似ていた。

黒い剣が、嵐のように、メギストンの心臓に降り注いだ。

全ての剣が上から落ち、メギストンの心臓は黒く染まっていた。そこにはただ一人、クロだけが立っていた。

体が痛い。やはり、あの姿に変身するのは、相当の負担が掛かつ

ている。おまけに、傷も癒えていない。最悪の形でケーニツヒと闘うのか……。時間にして四十五秒。それが、今の限界。恐らくもう、変身することは出来ないはずだ。だけど、絶対に負けたくない。負けたら……。

次の闘い。魔法学科の副将と騎士学科の大将との闘いの準備をしている最中。観客席はどよめきで埋め尽くされていた。ただ一人。ゼロはクロだけを見つめていた。

「人の魔法を、自分の魔法に変える……。か。やはり、本物のようだ」
ゼロは、満足そうな表情で、クロを見つめた後、視線を少しずらす。

目に映っているのは、一人の男子生徒。今年の新入生の一人。この男子生徒だけは、他の生徒とどこか違っていた。皆が、黒い球体を見入っていた時でもゼロと同じようにクロだけを見ていた。それを、ゼロは見逃さなかった。少なくとも、何かを知っているような、そんな気がしたからだ。

第五十九の魔法「騎士学科二年最強の男」

騎士学科最後の生徒、ケーニツヒがメギストンの心臓に足を踏み入れる。

ただ、それだけのことで、観客席の騎士学科の生徒は歓声を上げた。絶対的な実力を兼ね備えた騎士学科二年最強の男。

「やっと、闘えるね。クロ」

クロは返事をしなかった。体中に走る激痛を堪えながら、必死で隠すように、息を整えていた。

剣を鞘から抜き、一振り。その一瞬の動作でケーニツヒの目つきは変わった。

「悪いけど、ケガしていても本気でいくよ」

最初から手加減してくれるとは思っていない。ただ、一瞬の隙さえあればと思っていた。

クロはもう一度、目を閉じて集中した。

「では、試合開始！」

その合図でクロは力強く目を開く。瞬間、黒い力が渦のようにクロを取り囲む。

「出た……ヨシッ！」

力強く前へ一歩踏み出す。爆発的な瞬発力を利用して一瞬でケーニツヒの眼前まで辿り着く。

突き出した拳は、剣によって阻まれる。ケーニツヒは剣にもう片方の手を添え、力を入れてクロを押し返す。

体を仰け反らせ、体勢を崩したクロを見逃さず、横一線に剣を振りぬく。

しかし、クロも体勢を崩しながら足に力を込め、大きく後退する。

「間近で見ると、本当に不思議だね」

その言葉とは裏腹に、ケーニツヒは果敢に攻撃を仕掛ける。クロも反撃に出るが、その最中、力に違和感を覚えた。

力が弱くなっている。

黒い力はクロ自身にとっても未知な部分が多い。連戦で使うのも初めてだから。

このとき、クロはある仮説を立てた。短い時間内に連続で使えば、力が弱くなると。

「覚えてる？ 約束のこと」

「当たり前だ！」

「なら、頑張らなきゃ。もっと、もっと」

ケーニツヒの剣が次第に強くなっていく。クロは反撃も出来ず、攻撃を避けるか、受け止めることしか出来なかった。

黒い力は防御にも使えるため。傷を負うことは無かった。

次第にケーニツヒの剣のスピードについていくことが出来なくなってきた。そして、腹部を切りつけられる。

「ぐっ！」

途端、激しい痛みがクロを襲う。耐え切れなくなり、クロはその場で膝をついた。

何かがおかしい。クロはそう思っていた。黒い力が半端に働いている。痛覚が何倍にも研ぎ澄まされているようだった。自分の意思とは無関係に力が勝手に働いている。

「どうしたの？まさか、もう終わり？」

「ふざけんな！」

クロは渾身の力を右手に振り絞り、勢いよく、前に突き出した。しかし、黒い力はその瞬間、完全に消え去ってしまった。

「え……」

「やっぱり、もう終わりだね」

隙を逃さなかったケーニツヒがクロの眼前に立ちはだかる。

天高く持ち上げた剣はクロの右肩から鋭く入り込み、振り下ろされた。

耐え難い激痛。背中から地面に倒れた頃には、クロに意識は無かった。勝者の名を叫ぶヴァローナの声も。

「勝者、ケーニツヒ！」

第六十の魔法「ケーニツヒVSレクス」

目が覚めたとき、クロはメギストンにある医務室のベッドにいた。心配そうに見つめているのはローザとサフィラだった。

「大丈夫？クロちゃん」

何度聞いたことが、そう思うほどにローザには心配をかけていたとクロは思った。上半身を起こすと、頭に鋭い痛みが走った。

「う……」

「まだ寝てなきや」

サフィラは、クロの体をゆっくりとベッドに寝かせた。

「そういえば、闘いは……？」

「今、レクスとケーニツヒが闘ってる」

「そうか……」

体が思うように動かないクロはゆっくりと目を閉じた。今は何も考えないで、ゆっくりと休もう。

メギストンの心臓にはレクス、ケーニツヒ両生徒が合図を待って

いた。

「随分と、寂しくなったね」

「それはそちらも同じだろ？」

二人以外の代表の生徒は全員、両方の医務室に運ばれている。アスウド、ルーウエルはもちろんのこと、ヴァローナでさえこの事態は予測できないものだった。

「これ以上の実演は危険なのではありませんか？」

「しかし、もう最終戦を残すのみ。実施したほうが賢明かと」

アスウド・ルーウエルの意見は分かれていた。ヴァローナは二人の意見を聞いた後、後者の意見を受け入れた。

「確かに、最終戦を残して強制的に終了するのも後味が悪いだろう。それに元々、新人生のための実演だ。単なる勝ち負けだけを決める訳ではないから、実行しよう」

単なる勝ち負け。その言葉はルーウエルにとって、絶対に証明しなくてはならないものだった。たとえ、ヴァローナがそれを優先していなくても。

光の壁が最終戦の二人を包み込む。

「では、試合開始！」

第六十一の魔法「レクス的心」

ケーニツヒはゆっくりと剣を構える。

「イエロ・ブリッサ！」

先手を打ったのはレクスだった。三つ放った風の弾丸はケーニツヒ目掛けて襲い掛かる。

ケーニツヒは最小限の動き、手首の動きだけで器用に剣を動かし、弾丸全てを弾く。目の前を見るが、レクスはいなかった。

レクスは既に、風の力を利用しケーニツヒの後ろに回りこんでいた。

「ウイリデ・ウラガーノ！」

素早く魔方阵を描き、指揮棒から竜巻を起こす。大きな竜巻はいつも簡単にケーニツヒを吹き飛ばす。

「くっ！」

真後ろからの攻撃に避けることが出来なかったケーニツヒ。ただ、それほどダメージを受けていないのか、ゆっくりと立ち上がり服についたほこりを払っている。

「全然、ダメだなあ」

「ん？」

「君には資格がない」

試合中にも関わらず、レクスはケーニツヒの声に耳を傾ける。

「何のことかな？」

「彼女のこと……、クロのことだよ」

「どういうことだ？」

「君は、クロに対して何か特別な感情を抱いていないかな？」

「それは……」

言葉が出なかった。自分にはメルキュールという立派な許婚がいるのは事実。それなのに、いつの間にかクロに対しても特別な感情を抱いてしまったのも、また事実。

幼い頃に、親の言い付けで許婚になった。だから、本当にメルキュールのことが好きなのは、わからない。大切だとは思っている。だけど、それが「好き」という特別な感情とは違う気もしている。人を愛することも知らず、許婚となったメルキュール。人を愛することを知って、特別な感情を抱いたクロ。

「もしも、僕の言っている事に心当たりがあるなら、止めた方がいい」

「なんだと……」

「君には、クロを任せられない」

「なぜ、君にそんなことを言われなければならない」

「彼女は、クロは、僕じゃなければダメなんだ」

そう言つと、ケーニツヒは俯き、悲しい表情を浮かべた。

「仕切り直そうか、そろそろ決着をつけたいし」

「それも、そうだな」

不思議な言動だったが、今はこの鬨いの決着をつけることが先決だと考えたレクス。全てが終わってから、クロとは話し合おう。

第六十一の魔法「レクス的心」（後書き）

37話以来の後書きです。

どうも、友人が見ていると書く気になれなくて……。

長かった5対5の実演もいよいよ最終戦となります。

まあ、やりたいことをやりすぎてキャラが増えすぎたせいで

色々と考えなければならなくなった……。

この小説はケツコー自由に書いています。設定などは大まかに決めて、

あとは自分の書きたいことを書いている感じです。

これからちよくちよく書いてみたいと思うので、暇な御方が

いらしたら見てください。

最後に、新連載を投稿しようと思っています。

新連載はなるべく設定なども細かくしっかりとしていこうと思います。

が、まだあまり決まっていません。

強いて言うなら「現代を舞台にした超能力」です。

超能力ということで、色々カブるかもしれませんが、

楽しく見てくだされば幸いです。

長文になりましたが、これにて失敬。

第六十二の魔法「ケーニツヒの実力」

先に動いたのはレクスだった。指揮棒を前に出し、意識を集中する。レクスの足元から風が生まれる。風はレクスを包み込むと、その身体を微かに浮かせていく。

「すごいね、僕には真似できないな」

レクスが風を纏う。メギストンの心臓に風が吹き荒れる。レクスが指を差し向ける。その方向はケーニツヒ。レクスは風を極限まで圧縮させて指先に緑色の小さな弾丸を作り上げる。

「タルナーダ！」

弾丸が、ケーニツヒに向けて発射された。あまりの速さに、それは緑色の線を描いた。

ケーニツヒの左耳を僅かに掠った。光の壁を突き破り、弾丸は観客の壁に激突した。

あまりに一瞬の出来事のため、観客も教職員でさえ、息を飲んでいた。

「バ、バカな……。光の壁を突き破るだと……」

ルーウェルは驚愕し、ケーニツヒが負けるのではないかと危機感した。しかし、それよりも驚いているのはアスワドだった。

長年、生徒を見てきたが、わずか二年生で上級魔法「タルナーダ」を行使できる生徒がいるとは。

「レクス……、アイツは天才だ」

レクスは再び、指先に力を集める。

「今度は外さない。全力で当てる」

その言葉の覇気、眼の強さ。全てが本気であるとケーニツヒは悟った。

「そう、なら僕も本気で立ち向かうよ」

そう言つとケーニツヒは右手の掌をレクスに見せるようにして前に突き出した。

「何の真似だ？まさか、片手で防ぐつもりか？」

「まあ、そういうこと。別に手加減しているわけじゃない。これが僕の本気だ」

完全に舐められている。そう感じたレクスは先程よりも大きな弾丸を作り始めた。

風の勢いが強くなり、指先には何倍にも膨れ上がった弾丸が創り上げられていた。弾丸と言うよりもまるで、大砲の弾のようなそれは、確実にケーニツヒに定められていた。

「タルナーダ！」

風の弾はケーニツヒ目掛け勢いよく飛んだ。

瞬間、ケーニツヒの右腕の指が小刻みに動く。レクスはケーニツヒの掌に小さな、円があることを確認できた。

弾がケーニツヒの右腕に直撃する。激突した際の衝撃によってメ

ギストンの心臓を徐々に壊れ始めていた。既に、光の結界も強制解除されており、風圧は観客席にまで及んだ。

誰もが目を瞑り、一部始終を見ていなかった。見ていたのは、アスウドとルーウェル、ヴァローナだけだった。

そして、レクスは目の前の光景が理解できなかった。

なぜ、騎士が……？

ケーニツヒに直撃したはずの「タルナーダ」はケーニツヒを吹き飛ばすことなく、ケーニツヒの右腕に吸収されていった。

徐々に小さくなる自分の魔法を理解することは出来なかった。全てが吸収された後、ケーニツヒは拳を握り、前へと突き出す。

「君の魔法、倍にして返すよ」

ケーニツヒが突き出した手を開いた瞬間、レクスの放った「タルナーダ」の数倍の大きさの風の弾がレクスを襲う。

逃げようにも、逃げられなかった。大きすぎて、回避するのが間に合わなかった。

レクスは自身の魔法をその身に受け、なす術もなく倒れこんだ。

第六十二の魔法「ケーニツヒの実力」(後書き)

これにて、実演の話は終了です。

けっこう話数を取っていたかもしれませんがね。

次回からは色々なことの後片付けを始めたいと思います。

第六十三の魔法「ゼロ」

「勝った」というには、あまりにも誤算の多い結果となった。全勝することがルーウエルにとつての勝利だったはずだ。しかし、結果は大将戦までもつれ込んでの勝利。それに、精鋭を集めたはずのメンバーはケーニツヒを除いて重傷。辛うじての勝利にルーウエルはあまり喜んで入れなかった。

「やはり中止しておくべきだったのかもな」

その言葉はアスワドだった。確かに、とルーウエル自身もそう思っていた。まさか、ケーニツヒにこのような力があつたとは。

メギストンの心臓は半壊。観客席にも被害が及んでいる状況。幸い、傷を負った生徒や重傷者がいないだけ良かった。

「しかし、今回は本当に良い戦いでしたね」

「まあ、生徒たちの伸びしろが見ただけでも良しとしますか」

アスワド・ヴァローナが会話をしていると、一人の男が観客席から飛び降りて、此方に近づいてくる。

「君は……」

「久しぶりだな。ヴァローナ。それにオッサンも」

「お前、ゼロか！随分と久しぶりだな！どうしたんだよ急に」

「いや、ヴァローナに呼ばれちゃって」

「どういふことですか？それに、この男は？」

三人で和気藹々と話しているところをルーウェルが口を挟む。

「そうか、ルーウェルは知らなかったね」

改めて、という様にゼロはルーウェルの方を向き、ヴァローナもまた、ゼロのほうを見る。

「彼は、ゼロ。5年前の卒業生で、この春から学科最高責任者の任を受けてもらうことにしていたんだ」

「なっ！」

「ここに着たということは……」

「もちろん、その任、快く受けるぜ」

「いいんですか理事長！」

「何がですか？」

「こんな若造に学科最高責任者など務まるとは思えません？」

「何も年を取っているから偉いとか強いとかそついう観念はいらないと思ひましてね」

「しかし……」

「論より証拠です。試しに闘ってみてはいかがですか？」

「私が、ですか？」

「もちろん。私もアスワドもこの男の力は充分知っていますから」

「しかし……」

「恐いのか？おっさん」

口を挟むゼロ。顔には余裕が見られた。

「なんだと」

「いくら、アンタが強くても俺には勝てないからな」

「口の減らないガキだな。いいだろう、闘ってやる」

「違う、違う」

「何？」

「俺が闘ってやるんだ。光栄に思え」

その言葉に怒ったルーウェルは身構えてもいないゼロ目掛けて剣を振り下ろした。

眼が覚めると夜になっていた。医務室の窓から月の光が差し込んでおり、目を覚ましたクロはベッドから降りて医務室を後にした。身体感覚はいつものように戻っていた。何処も痛い箇所は無い。少しは自分の力について分かってきたみたいだな。

廊下の先に一つの影が見えた。その影がこちらに近づくにつれ正体が分かる。ケーニツヒだった。

「もう、身体は大丈夫みたいだね」

その言葉に違和感を覚えた。

「あまり、その力を使いすぎないようにね。あんな風に無茶な使い方をしていたら、身体がボロボロになっちゃうよ」

やはり、おかしい。ケーニツヒは何かを知っているように見えた。

「アンタ、俺の何を知っているんだ？」

「全てだよ」

その言葉で胸の鼓動が速くなる。

「え……」

「君の思っている疑問、それらに対して答えは出せると思うよ」

「教えてくれ！何でもいい！アンタの知っていること全てを！」

ケーニツヒの肩を強く揺さぶる。動揺を隠し切れなかったのだ。

「分かったから、とりあえず落ち着いて」

肩の手を振り解き、クロの眼を見つめる。クロは小さく二回頷いた後、二・三步下がり距離を取る。

「何から話せばいいのかな」

ケーニツヒは難しく考えていた。どう話せば、分かり易いか。

「まず、君はその、黒い力について何を知っている？」

「この力は……エテレインから聞いた話だと、私の種族を滅ぼした魔物が……最後の力を振り絞って私に強引に与えた力だって……」

エテレイン。その名を聞いたケーニツヒの顔にはいつもの笑顔は無かった。

「そうか、エテレインめ……」

「なに？」

「いや、なんでもない」

再び、難しそうな顔をし口に手を当てて考え始めた。

「結論から言うと、それは嘘だ。エテレインは君に嘘の真実を話したんだ」

「どうして？」

「そのほうが、あつちにとって都合が良かったから。本当は……」

その次の言葉を口にしようとしたとき、すぐ近くで扉の開く音が聞こえた。その扉からはレクスが出てきた。

「レクス」

「クロ。それに……」

気まずい雰囲気流れる。レクスがクロに対して持っている特別な感情。それを知っているケーニツヒとクロ。

「また、明日」

「あ、ケーニツヒ」

沈黙に耐えられなかったのか、二人きりにしたかったのか、ケーニツヒはクロの手を拒み、夜の廊下に溶けていった。

第六十四の魔法「クロの答え」

しばし、沈黙が続く。お互いどう切り出しているのか解らないでいた。

「許嫁だったんだね。あの娘と」

「ああ」

少しの沈黙。

「君に、謝らなければいけない」

今度はレクスから話し始めた。

「正直、まだ気持ちの整理はついていない。君に対しても、メルキユールに対しても……」

「だったら、俺が言ってやろうか？」

レクスの言葉を最後まで聞かず、クロは話し始めた。

「俺は、アンタにそんな感情は持っていない。多分これから変わらないと思う。他に違う人がいるからとかじゃなくて、初めて会った時からずっと」

「そう、か」

「だから、アンタはアンタを大切に想っている人を想えばいい」

「そうか……それが、聞きたかった……ありがとう」

レクスもまた、夜の廊下に消えていった。

静かに、扉が開いた。自分のいた部屋から。

「本当に、よかったの？あれで。アンタだって……」

「いいんだ。これでよかったんだ」

サフィラの言いたいことは解っていた。だけど、誰かが苦しむのは嫌だった。そうしなければ自分の幸せは手に入らないと知っていても。もう誰も傷つけたくないから。

ケーニツヒは廊下を歩いていった。騎士学科の宿舎へと続く道を。目の前に一人の男が姿を現す。ゼロだった。

「よう。久しぶり」

「ゼロ、懐かしい顔が現れたものだね」

「一応、年上なんだから敬語使えよ」

「嫌だよ。アンタは兄貴みたいなもんだから」

「良い様に言いやがって」

「それで、何か用？疲れて眠いんだけど」

「そうつれないこと言うなよ。一人気になった奴がいてな、今年の新入生だ」

「種族は？」

「カノン族だったはず。そろそろあちらも本腰入れてきたのかもな。それまでに、あの不良女を……」

「不良女？」

「女のクセして男用の学生服着るなんて不良だろ」

「クロのこと？」

「そう、そんな名前してたな」

「で、どう？ゼロから見て」

「顔は上の上だ。但し、制服が問題だ。あと、言葉遣いも」

「そうじゃない」

その言葉を聞いたゼロの顔は真剣になった。

「まだ、二年だろ。あと一年あれば成長するだろうな」

「じゃあ」

「ダメだ」

「なんでさ」

「あの制服と言葉遣いが気に入らん」

「そんなことか。問題ないよ」

「何か秘策でもあるのか？」

「とっておきのね」

そう言ったケーニツヒの顔はいたずらを考える子供のように笑っていた。

「お前がそういう顔するときってなんか相手が可哀想になるんだよな」

「そう？ けっこう面白いけどな」

第六十四の魔法「クロの答え」（後書き）

こちらは自分でも書いていて楽しくなるようなことを考えていて、これからは闘いから離れて、なるべく日常的なことを書いていこうと思います。

もう一つの物語が「現代」で「男の主人公」

こちらはというと「ファンタジー」で「女の主人公」

まったく逆のお話なので、同時更新中は書いているときに混乱することもあります。

長い目で見えてくれると幸いです。

第六十五の魔法「一つの終わり」

夜の闇が一層深くなった頃。メルキユールは目を覚ました。まだ、身体が痛い。

負けたのは正直に悔しかった。だけど、それ以上に……。

心が痛かった。闘っている、結局集中できていなかったみたいだ。

胸の奥がチクチクと痛い感覚に包まれている。昔から、こんなことは初めてだった。

いつも、想うだけで、胸がときめいていた。何をするにも、全てにおいて、第一に考えていた。

これは似合うかな？

これは好きかな？

これは嫌いかな？

これは嫌がるかな？

それだけで、何もかもが苦ではないような気がしていた。

……そう、気がしていただけだった。実際、離れているせいか、あまり会えなくなり、いつの間にか、心も離れてしまったようだ。

あの時のレクスの声が今でも響いている。

その声を思い出すとまた、胸が痛くなる。

ドアが叩かれた。部屋には自分ひとり。誰かが、尋ねてきたのだ。

「レクス……」

「……久しぶり」

二人は部屋を後にした。

「何か、用？」

「君に、謝りたいことがあって、ここに来た」

「……」

「俺は、君の気持ちを……」

「ねえ、レクス？知っている？」

「？」

「私は、アナタの許嫁だよ。どうしてだと思っ？」

「それは……」

「アナタは、プレミア族の中でも王族の王族。私も貴族ではあるけど、アナタから見たら所詮、端の端」

淡々と、話は続く。

「私、頑張ったんだよ。貴方に少しでも多く見てもらいたくて、昔から、貴方と同じことをしてきた。どんなにライバルが多くても、絶対に勝ちたいって……」

「貴方が私を選んでくれたのは、凄く嬉しかった。今でも、その時のことは良く覚えてる」

「それから、私は必死で努力してきた。剣術も、習い事も、何もかも。全部、貴方と肩を並べて歩くため……」

声が掠れていた。涙を拭っていた。それを見たレクスは、胸が締め付けられた。しかし、今の自分には何も出来ない。こんな辛い思いをしている彼女を慰めてあげること。

「だけど、もう疲れた。貴方は、私を見てくれていなかった。自分ひとりが舞い上がって、馬鹿みたい……。結局、貴方は私のことをなんとも思っていなかったのね」

「それは……」

「もう、いいの。私には、貴方は似合わなかったみたい」

彼女は、そう言い残し、騎士学科の宿舎へと戻っていった。

自分は、最低だ。無くなってから、大事なものに気付いてしまった。

昔を思い出した。初めて彼女と喋った時。自分に対してこんなにも優しく接してくれる人がいることを、初めて知った。

跡目問題とか、王族の礼節などで、人の温かみに触れたことなど少なかった。せめて、自分だけでも明るくしていよう。そんなときに、彼女と出会った。

何時頃からだろう。それが当たり前になって、彼女の優しさが当たり前になってから、彼女と会う機会も無くなっていた。

それが、この結果だと。自分で納得する以外、方法は無かった。

第六十五の魔法「一つの終わり」（後書き）

今日が終わる二十分前。

これにて、合同実演の話は終了です。

ここからはゼロを含めた新しい展開へと続きます。

出来れば今回の話で登場したキャラにはそれなりに出番を増やしたり。

また一週間後。

第六十六の魔法「着任式」

二年生による合同実演の日から数日が経っていた。新入生も徐々にはあるが、ユートピアにも慣れ始めてきた頃。

朝早くから、クロは目の前にあるケースと睨めっこしていた。何時届いたのか分からないが、差出人、というか貼ってある紙にはこう書いてある。

「ケーニツヒより」

考えただけでも、背筋に悪寒が走る。果たして、自分に似合うだろうか……。女らしさなど、自分には皆無だと知っている。けれども。

恐る恐る伸ばす手。ケースに触れたその時。

「おはよう、クロちゃん」

寝室のドアから、ローザが姿を見せた。その言葉で、心臓が跳ね上がるほどの衝撃を抑えて必死にケースを隠す。

「よ、よお。おはようローザ」

「ん？どうしたの？」

「べ、別に！何でもねえよ！」

「そお？あれ？」

気付かれたか？でも、今気付いても中身は出ていない。大丈夫だ。

「そのケースどうしたの？」

さっそく聞かれた。ここまでは予想内。しかし、どう答えるべき

か……。

「あー、えつとなあ……。内緒だ……」

「ふーん、内緒なんだあ」

「そう、内緒」

「わかった」

そう言つと、ローザは洗面台へと向かつて行つた。ローザが朝弱くて助かつたと、本気で思つた。

全校集会が開かれることになつたのは、今朝いきなり決まつたそうだ。教師の何人かも驚きを隠せないでいた。

本日の集会の目的は、学科最高責任者の後継者が決まつたということ。ただ、会場は不穏な空気に包まれていた。

その男は、シュルヴィーヴルから来た男だそうだ。一身上の都合でユートピアにやってきた男だが、問題は風貌にあつた。

規則の厳しいシュルヴィーヴルにおいて、腰まである金色の髪。左の頬には刺青。ド派手な柄のコートを羽織り、背中には地面すれすれまでの大きさの指揮棒らしきものを背負っている。

充分、怪しかった。こんな男に学科最高責任者が務まるのかと、生徒全員が思つていた。

「あーあーあー」

マイクの音量をテストした男は、マイクを右手に持ちながら教壇の前に出た。

「どうも、ゼロだ。よろしく」

いきなりの挨拶で敬語は使わなかった。はじめましても言わずに、まるで自分のことを知っている人間に挨拶するような言い方だった。

「まず、生徒に言いたい事がある」

自己紹介かと思いきや、話が始まるようだ。

「お前たちには、夢があるはずだ。それは、人それぞれだろう。だけど、少なくとも、このユートピアに入学しているのなら当然、夢を叶えるためにジュルヴィーヴルに入隊しなければならない」

ゼロはまだ、話を続けた。

「誰かが言っていた。夢を叶えるには幾つかの山を登らなければならない。その一つ一つの山には頂上があり、その頂上へ辿り着くことが夢の第一歩だ」と

ゼロは、人差し指を天に向ける。

「少なくとも、このユートピアにいる時に登っている山の頂上にあるのは、シュルヴィーヴルへの入隊だ。ならば、お前たち生徒は俺を目指せ。俺も数年前までこのユートピアの生徒だった。そして、俺は三年のとき首席でユートピアを卒業した。いいか、お前たちの登っている山の頂上には俺がいる。俺を超えられるように、俺と並

べるように、このユートピアでの時間を有意義に過ごせ。以上だ」

言い終わるとゼロはそのまま教壇を後にしようとした。降りる直前で再び教壇の前まで戻り

「言い忘れたが、俺がこのユートピアに来たことを祝して祭りを行う！各クラスが催し物を開き、盛大に祝え！いいなっ！開催は二週間後だ。もちろん、様々な賞も用意してある！豪華なプレゼントもあるので、よろしく！」

これが本当に最後だと言う様にマイクを置き、教壇からゼロは降りた。

第六十七の魔法「準備」

次の日を待たずして、各クラスは催し物についてクラス会議を開いた。

ユートピア祭。そう命名されたこの行事は各クラス、やる気を見せずに入られなかった。

もちろん、クロのクラスでも。

「さあ、まずは何をするか決めようか。誰か意見のある人」

教卓にはクラス委員長のエリエルが司会をしていた。ただ、クラスの皆はざわついていてだけで、何がしたいという明白な意見は出てこなかった。

「意見のある人だけ喋ってね？んで挙手お願い」

その言葉で、一同静まり返ってしまった。エリエルは面倒見が良くて気配りも出来る。姉御肌の性格だ。ただ、怒らせると、何をするか分からない。一度本気で怒ったときには机が真つ二つになってしまった。それ以来、誰も彼女を怒らせたくないと思った。だから彼女の低い、冷静な声で言うことは絶対に守らなければならない。怒ろうとしている前兆だから……。

「誰もいないの？さっきまであんなに喋っていたのに」

左右の拳の指を鳴らす。これは、危険信号だ。エリエルが本気を出すときの。

授業で一度、体力測定を行った。魔術師にも単純な力が必要らしい。その授業で遠投を行ったエリエルの球は結局見つからなかった。

何処まで飛ばしたのか、何処にそんな力があるのか分からないけど、その球を投げる前にも、指を鳴らしていた。

以来、それは危険信号となっていた。

殺伐とした雰囲気のほか、一人の少女が手を上げた。

「はい、ローザ」

「あの、喫茶店とか……どうかな？」

ゆつくりとだが、自分の主張をしたローザ。

「喫茶店かぁ。よく街で見かけるけど……」

「机とテーブルもあるし、メニューもすぐ作れそうなものにしたなら、楽しく出来るんじゃないかなって……」

「そうね。誰か他に意見のある人」

誰もが黙っていたが、徐々に賛同の声が広がって言った。再び、騒がしくなるクラス。そして聞こえる指の鳴る音。

「静かにして。まとまらないでしょ？」

声は明るいが、顔は全く笑っていない。

「じゃあ、喫茶店で決まりでいいかな？」

その言葉の後には、拍手がクラス中に響いた。

クロのクラスは準備に取り掛かった。やることが決まってから、エリエルの指示は実に手際が良かった。生徒一人一人に的確に指示を出していく。

「どうかした？クロ。浮かない顔しているけど」

「……」

「クロ？」

「えっ、どうかしたか？」

「なんか変だよ、アンタ。何かあった？」

「いや……別に」

とても言えたようなものではない。

「そつえば、ローザはどこいったの？」

「ん？いや、見てないけど」

「さっきまで居たのに、どこいったんだろ？」

「喋っていないで手を動かそうか」

とつさに後ろから声をかけられた。声の聞こえた方へと振り向く。予想通り、エリエルだった。

「あのさ、ローザは何やってんだ？」

「ああ、ローザならちゃんと仕事してもらっているわよ。ちょっと特別だけど……」

そう言ったエリエルの表情は少しだけ笑っているようにも見えた。

「特別？」

「そう、多分あの娘じゃないと出来ないことだから」

意味深な言葉を残してエリエルは仕事に戻った。

「なあ、サフィラ。今のどう思う？」

「特に気にすることじゃないんじゃないの」

気楽に考えているサフィラを横目に何だか嫌な予感がしてならなかった。

「ねえ！クロ！」

また、後ろから声が聞こえる。マルグリットだった。

「アンタ、レクス様知らない？」

「は？何で俺が知ってるんだよ？」

そう言つとマルグリットは納得したかのように。

「それもそうね。見かけたら一言ちようだいね」

気楽に言ってくる。あの一件以来、喋ることはおろか面と向かったことすらなかった。同じ教室にいるのに、どうしても見ることが出来ない。後ろめたさなどがあるわけではないが、どこか後味の悪い感じが残っている。

第六十八の魔法「密会と決心」（前書き）

一日遅れでの更新になってしまいましたのでいつもより少し多めに書きました。

第六十八の魔法「密会と決心」

作業は夕暮れ時まで続いた。授業そっちのけで行っているのには理由があつた。先日の合同実演のせいで「メギストン」が使い物にならないためだつた。この時期になると、二年・三年生は「メギストン」での授業が多くなってくる。しかし、使い物にならない今、カリキュラムの変更をすると後々の予定が狂ってしまう。そのため、現在は授業を中止し、このユートピア祭の準備に割り振られている。

「さあて、今日はここまでにしましょう」

エリエルの号令で本日の作業は終了した。

「あと、一応ウェイトレス役と調理役してもらう人は張り紙に書いておいたから確認しておいてね」

生徒がその張り紙に群がる。クロも一応、自分の役割ぐらい知っておきたかつた。

名前を見つける。その役は「調理役」だつた。

「よかった……」

正直、安心した。ウェイトレス役などになったら、どうなっていたことか……。軽く、肩を数回叩かれる。

「まあ、なんで男の格好しているのかとか、今更聞かないし。なんか事情があるからしてるんでしょ？」

「え……ああ」

「なら、無理にウェイトレス役してもらわなくても大丈夫よ。適材適所ってやつね」

「その、アリガトな」

「気にしない。気にしない」

エリエルの気遣いだろうか。うれしかった。

夜、クロは風呂に入り終わり髪を乾かしているところだった。不意に扉の開く音がした。洗面台から部屋へと戻る。ローザの姿が見当たらない。こんな夜遅くにどこ行っただ？と正直に思うが、特に気に留める必要もなさそうだったので、そのままにしておくことにした。

ローザはある人物と出会っていた。その人物とは初対面であったが、ある事情で協力することになった。笑顔の似合う青年。ローザは青年にある一枚の紙を渡す。

「それが、制服のデザイン。あと、寸法がちょっとだけ間違ってる、あっちは直しておいたよ」

「そう、ありがとう」

「いつごろできる？」

「五日もあれば出来るかな。こう見えても裁縫は得意なんだ」

「うん、あの出来を見ればわかるよ」

「じゃあね」

「うん、本番が楽しみね」

「そうだね」

そう言つて青年はまた笑顔を見せてくれた。

再び、クロはケースとにらめっこを始めた。まだ、中身を確認していない。

開ける勇気が出てこない。だけど、ケーニツ人の約束だから、仕方がないと、自分に言い聞かせるようにケースを開けることにした。

「やつぱり」

出てきたのは想像していたものと一緒だった。女子用の制服。綺麗にたたまれており、新品特有の匂いがした。制服を取り出すと、一枚の紙がケースの底に貼ってあった。何かが書かれていて、確認するために紙をはがす。

「クロへ。丹精込めて作りました。早くこの制服を着たクロの姿が

見てみたい。一日でも早く着てくれて、僕に見せてくれる日を楽しみにしているよ。ケーニツヒより」

丹精込めて作りました。その文面が気になって仕方がない。もしかして、支給される制服を見て、布地から作ったということだろうか。だとしたら、なおさら、着なければ申し訳ない。ただ、抵抗はある。

サイズを合わせるため、鏡の前に立つ。ぴったりだった。ただ、似合うかは分からない。

ローザはまだ帰ってきていない。念のために一度、部屋の外を確認する。ドアを開けて左右を確認する。長い廊下にローザの姿は見えない。

ちよつとだけ……着てみて確認してみようかな……。クロは何かを決心したかのように、服を脱ぎ始める。

第六十八の魔法「密会と決心」（後書き）

もう少しで七十話になりそうなのですが、話があまり進んでいない
かもしれませんね。

出来るだけ多く描きたためて更新したいと思っていますんで
よろしく願います

第六十九の魔法「発見と屈辱」

初めて着た女子用の制服。スカートが、すごい不安に感じてしまう。あまりにも無防備すぎではないだろうか。生涯で初めてスカートを着用したから来る感情だった。

「なんか……変な感じだ」

もう一度、部屋のドアを開ける。今度はゆっくりと、開けることにした。左右を確認して、誰もいないことを念押しする。そして、再び鏡の前に立つ。

これが、自分自身なのか。クロは正直にそう感じた。帽子も脱ぎ、髪を整えてみる。鏡の前にいる自分は、女の子だった。

自分なりに女の子っぽい仕草を試してみる。笑顔であったり、上目づかいであったり。後ろを向いて、くるっと一回転してからの満面の笑顔。

やばい、何か変なスイッチが入った感じがした。自分だけなのに、ものすごい恥ずかしい気分になる。それに加えて、ちょっとだけ気分も良くなってきた。

もしかしたら、けっこう似合っているのかも。

「ねえ、クロ。明日のことで聞きたいことがあるんだけど」

その言葉と同時に、部屋のドアが開いた。ほっぺたに指を添えて、ちよつと首を曲げての笑顔のポーズの最中だった。ノックもせずに入ってくるのはサフィラだった。

「あ……」

「……よう……」

服を着替える時間など微塵もなく、女子の制服を着ているところをサフィラに目撃される。

「え……えつと、これはだな……」

弁明する時間もなく、サフィラは大声を出して笑った。

「ごめんごめん、とサフィラはベッドの上で顔を両手で覆い隠しているクロに謝った。クロはまだ、女子の制服を着ている。

「突然だったから、びっくりしちゃって」

「そんなに、似合わないかよ……」

「ううん、そういう意味で笑ったんじゃないで、でも、けっこう似合っているわよ」

その声に反応して両手で顔を覆っていたクロの顔はサフィラのほうを向く。

「ほ、本当かよ……」

「うん、うん。似合っている。やっぱりクロも女の子なんだからちゃんと制服着ないかね。せつかくの美人が台無しだよ」

自分は美人なのか？クロは素直にそう思った。

「美人って……サフィラのほうが美人だろ？」

「まあ、そうだけど。私に比べたらまだただけだね」

「その割には男子が寄ってこないよな」

「高嶺の花って呼んでほしいわね」

「近づきたくないだけだって。お前みたいな凶暴女」

「なんですって！もう一回言ってみなさいよ！」

「クラスの男子みんな知ってるぞ。お前とトラゴスのやり取り見れば嫌でも幻滅するだろ」

「う……」

その言葉の後、急に黙り込んだサフィラ。しかし、少し経った後で笑いだした。

「なんか、アンタとこうして話すの久しぶりよね」

「そういえば、そうだな」

二年生になってからは授業が難しくなり、勉強についていくのもやっとだったから。こうして、友人とゆっくり話すのは本当に久しぶりだった。

「じゃあ、またね」

「おう、またな」

「ダメ」

「は？」

「もっと女の子らしく」

「……」

「早く言わないとここで大声出すわよ？」

「……またね、サフィラちゃん」

笑顔で一言。

口を押さえたサフィラが無言で手を振りながら扉を閉める。
そのあとで、最初のような大笑いが聞こえた。

「殴りてえ……」

第六十九の魔法「発見と屈辱」（後書き）

更新日を変更したいと思います。

前は毎週木曜日だったのですが、今回から毎週金曜日によつと思
います

ので、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8221k/>

剣と魔法と不良少女

2011年6月3日20時33分発行